

〈登場人物〉

剣 礼士…秋田新幹線『スーパーこまち20号』運転士。

峠 桜…秋田新幹線『スーパーこまち20号』車掌。

碓氷 瑞穂…居酒屋『かま田』店員。

釜田 神威…居酒屋『かま田』店主。

大和 叶…居酒屋『かま田』店員。

霧島 翼…独立行政法人・運輸安全委員会委員。

大空 秀…新幹線総合指令室室長。

矢野 友久…秋田県警捜査一課警部。

八雲 克子…警視庁捜査一課警部。

沖 緑…警視庁捜査一課刑事。

三朝 航大…株式会社『柿崎建工』東京支社社員。

舞鶴 寛…三朝の部下。『スーパーこまち20号』乗

客。

藤川 舞…株式会社『柿崎建工』静岡支社社員。舞鶴・

三朝の元同僚。

〈路線概説〉

秋田新幹線…盛岡と秋田を結ぶJR線。元々は田沢湖線と奥羽本線大曲～秋田間を東北新幹線との直通運転のために改築したものであり、新幹線と名乗ってはいるが法律上の区分は在来線の「ミニ新幹線」である。2013年当時は車両の老朽置換の時期に当たり、『スーパーこまち』『こまち』の二種類の列車が活躍していた。

東北新幹線…東京と新青森を結ぶJR線。盛岡で秋田新幹線と分岐する。2013年より、最速達列車『はやぶさ』が単独で日本最速の時速320キロでの運行を開始した。翌2014年からは『こまち』も併結の上で時速320キロ運転を行い、現在に至る。

〈車両概説〉

E6系…東北・秋田新幹線『スーパーこまち』『こまち』用の車両。先代車両の老朽置換のために2013年から14年にかけて製造・投入された。2013年当時、営業最高速度は時速300キロ、性能上は時速360キロでの走行が可能。増備が完了した翌2014年より時速320キロでの営業運転を開始している。在来線区間も走行可能なように設計された「ミニ新幹線」であり、通常の新幹線車両よりも小さく作られている。また、東北新幹線内で運行が完結する『やまびこ』『なすの』の一部列車にも使用される(写真①)。

E5系…東北新幹線用の主力車両。『はやぶさ』を中心に『はやて』『やまびこ』『なすの』などの列車でも活躍する。2013年、当時世界最速の時速320キロ運転を開始した。後に開発されたE6系とほぼ共通の走行性能を有している(写真②)。



→写真①

→写真②

E954系…2005年に開発された新幹線車両。最高時速360キロでの営業運転を目標として、データ採取のために試作された。愛称は『FAST ECH(ファステック)360S』。時速360キロでの高速走行試験は主に東北新幹線仙台～北上間で行われた。後のE5系E6系の母体となり、東北新幹線の高速化に大きく貢献した。役目を終えた現在は廃車、解体試験が行われ現存しない。

〈補足・注意事項〉

*『スーパーこまち』は、2014年3月ダイヤ改正で愛称が消滅しました。現在は、全列車が『こまち』として運行中です。

*本作品に掲載した写真は法と安全に則って筆者が撮影したものです。無断転載を固く禁じます。

*本作品に掲載した全ての図において、無断転載を固く禁じます。

〈前回までのあらすじ〉

居酒屋『かま田』店員として働く碓氷は、店主の釜田、友人の剣と共にトワイライトエクスプレスに乗車した。そこで剣から交際を申し込まれるも、同時に事件に巻き込まれてしまい、返事はうやむやになってしまう。一方で居酒屋『かま田』は移転して再スタートを切り、新たな仲間を迎える。

プロローグ

6月21日、金曜日。その日は台風が過ぎてまもなく、活発な梅雨前線の影響により全国的に雨だった。

秋田駅、12番線。僕は出庫させた列車を入線させた。雨に濡れた茜色の車体が艶やかだ。車両の世代交代の波を迎えた秋田新幹線では、今運転しているE6系が勢力を拡大しつつある。明後日にまた一編成、兵庫から貨物列車で届けられる。今頃は愛知県、東海道本線を東進しているだろう。明後日は非番だし、撮りに行くか。

「停止位置、よし」

「尾灯点灯1、2、よし」

「『スーパークまち20号東京行き』表示よし」

「パン上げ、よし」

「進路、よし」

進行方向側の運転席に移動する。体が大きいための、椅子を最大限後ろにずらさないといけない。ガコガコとずらす。まだまだ確認事項が多いが、いつものことだ。

「第3020M列車、幹7両」

「前部標識灯点灯1、2、よし。減灯」

「列番表示、第3020M列車、よし」

「列車無線電源、よし」

「ATS電源、よし」

「SIV、よし」

「ブレーキ圧……非常……圧力上昇。7段……圧力低下……制動試験、よし。常用最大」

「停車駅、大曲、角館、田沢湖、盛岡。運転停車、大

釜、併結、盛岡、第3020B列車。減速区間、無し」

雨が降り続けている。ワイパーがせわしなく窓の水滴を拭う。無数の雨粒が赤信号に照らされて赤く光る。

発車時刻が迫り、チャイムが響いた。車掌が笛を鳴らし、ドアを閉め、ブザーを鳴らす。戸じめ灯が点く。

雨粒が青く染まった。

「戸閉め、よし。19時09分00秒、時刻よし。進行

信号点灯、よし。出発進行！」

19時09分00秒。前照灯を全灯に切り替え、軽く警笛を鳴らす。マスコンを引くと東京行きの最終列車、

「『スーパークまち20号』は夜の中へと走り出した。

「秋田、定発。第3020M列車、次は大曲」

しばらく列車を走らせていると無線電話が鳴った。車掌室から車掌がかけてきたか、それとも運行を管理する指令室からか。応答すると車掌からだった。

『こんばんは、峠です。車内巡回を済ませ、主だったトラブルはありませんでした。羽田に向かう日航の飛行機が欠航になったせいとか、普段より乗客が多いです』

「了解。お疲れ様です」

乗客が多いのか。最終列車にしては普段よりも加速が思わしくないのにも合点がいく。

運転士の仕事が大変なのは言うまでもないが、だから

と言って車掌の仕事が楽なわけではない。検札はもちろん、常に車内外の安全確保に努めなければならぬ。これがなかなか曲者だ。乗客同士のトラブル、急病人介

護、不審物の処理などなど。あまり知られていないが、かなり忙しい。ましてや、僕は在来線区間が終わる盛岡

で交代するが、峠さんはこれから泊まりがけで東京まで乗務する。今日も普段のように何事も無く穏便に過ぎる

……はずだった。

峠さんによると、その乗客には大曲駅を出てすぐに声を掛けられたという。ばかでかく太った男で、リュックサックと二つの旅行鞆を持っていた。どれもこれもやけに大きく膨れている。奇妙な客だった。

この乗客が列車の……ひいては、僕達の運命を大きく狂わせる事になる。その鞆の中にはトータルで20キロは優にありそうな大量の爆弾が詰められていた。

第一章

高速を一路東京へ、私は釜田さんが運転する白いトヨタ・マークIIに揺られていた。いや、渋滞のせいですつと止まっているから『揺られて』という表現はおかしいかもしれない。ノロノロと貨物列車に追い抜かれる。

「あくあ……だりいな」

釜田さんはハンドルから手を放し、大きく伸びをし

た。車内に流れる音楽は水樹奈々『Chronicle of sky』……渋滞にはとてもふさわしくない、テンションアゲアゲで爽やかな一曲だ。これは釜田さんの趣味ではない。

私の横に座る後輩……大和叶の選曲だ。

赤倉翔一殺害事件の犯人、白雪春江の裁判に証言者として叶ちゃんが呼び出されたのは、彼女が居酒屋『かま

田』の新米店員として仲間入りをした直後のことだった。元々はトワイライトエクスプレスのクルーとして働

いていた彼女だが、その仕事は寿退職するはずだった。しかし婚約者の赤倉氏が殺害されてしまい、その後色々あって今の店に流れ着いた。今回の裁判はその犯人のもの

のだ。

トワイライトエクスプレス。あの列車の中で起きた事件は今でも克明に思い出すことができる。それくらい衝撃的な事件だった。何よりもその犯人の一人、白雪が釜田さんの元妻だったという事実は私にとって、それ以上に元夫の釜田さんにとって大きなショックだった。『かま田』の店主である釜田さんも私と同じでこの事件の結末を放っておけなかったのだろう、わざわざ小田原まで出向いて裁判を傍聴した。

そして今。裁判を終えた私達は帰路についている。私は裁判に同行する必要は無かったのだが、秋田に一人であるのも退屈だ。結局同行して裁判を見てきた。

「はあ〜……飽きたあ〜……」

叶ちゃんはぐでーっとしながら、いつまで経っても変わらない車窓に目をやる。窓ガラスには一粒、また一粒と雨粒が模様を描く。

CDが終わり、釜田さんはカーラジオをつけた。

『列島各地に被害を与えた台風3号は今日昼過ぎ、温帯低気圧に変わりました……』

気の早い台風が列島を襲ったのは昨夜にかけてのことだ。梅雨時ということもあり、四国や九州を中心に大雨をもたらした。あちこちに被害が出たようだ。

「……店、大丈夫ですかね？ 新装開店したばかりなのに、この台風で滅茶苦茶になったら嫌ですよ」

「さあな。秋田の方の被害はほとんど聞かねえから、多分大丈夫だろ。今回の被害も大体は西の方だしな」

前の車のテールランプが消え、ノロノロと走り出す。

釜田さんも少しアクセルを踏む。やっとな前進だ。

『台風の影響で交通機関にも影響が出ています。昨日の台風で機材練りなどの影響により、今日、日本航空が1

21便、全日空が96便の欠航を決めました。他の航空各社でも欠航や遅延が出ています……』

「それよりも確氷、大和。お前ら帰りの心配をしろよ。飛行機はどうなってる？」

私と叶ちゃんは先に飛行機で秋田に戻る予定だった。

釜田さんのように秋田から小田原まで車で往復するなんてタフな真似、私には無理。まずこの渋滞でギブだ。

「駄目です。欠航になりました」

ANAから本来乗るはずだった便の欠航の知らせが来たのは、裁判所に着いてすぐのことだった。

「機材練りがつかなかったみたいです」

私はスマホの画面を確認する。叶ちゃんも覗き込む。

「そうか……どうすんだ？」

「JALに振り替えようかと最初は思ったんですが、ここからだ時間的に無理でした。というか、JALも欠航でしたし」

「そうなんですか、先輩？」

叶ちゃんにJALのホームページを見せる。『羽田発秋田行き1267便・秋田発羽田行き1268便は、機材練りの影響で欠航となりました』と赤字で述べられている。羽田行きはANAへの振替案内も出ている。

「じゃあ新幹線か。今からだと間に合うか？ というかJRは生きてんのか？」

「運行状況は全然大丈夫ですけど、最終の新幹線に乗るのは無理ですね。飛行機の客が流れ込んだみたいで、調べたら満席でした。でも上野を9時過ぎに出る夜行があるの、それで帰ろうかと思えます。長居は無用ですし。叶ちゃんはどうする？」

『あけぼの』ですか。うーん……宿代も勿体ないし、そうします。でも先輩、実は少しでも早く愛しの剣さん

に会いたいただけなんじゃないですか？」

叶ちゃんがからかう。先の事件にも絡んでいた『あけぼの』を提案するのは不安だったが、ここまで元気なら事件からまだいぶ立ち直ってきたのだろう。嬉しいことだ。でも……立ち直られたら立ち直られたで面倒だ。オフではこんなに陽気に絡んでくるキヤラだとは思ってもならず、最初は面食らったものだ。

「別にそんなんじゃないってば。あの人、今夜は最終で盛岡に行くって」

「最終ってことは……20号か。おいおい、告白にちゃんと返事をしたわけでもねえのによく知ってるな。随分アツアツじゃねえか」

釜田さんも一緒になって冷やかす。黙殺。

「まだ悩んでいるんですか？ 剣さんの事」

叶ちゃんは続ける。ため息で応えるしかない。話した覚えは無いのに一体どこで知ったのだろうか。どうせ釜田さん辺りが漏らしたのだろうか、恐ろしい後輩だ。

先月のゴールデンウィーク。それこそトワイライトエクスプレスの車内で。私は剣さんに告白された。私は驚き、断ろうとした。私みたいな女はそぐわない。だが、事件のごたごたで返事はうやむやになってしまい、それつきり。本人は気長に待っているのだろうか……いや、とうに諦めたのだろうか？ 私は一体どうしたらいいのか段々分からなくなってきた。自分の気持ちも、あの人の気持ちも。

あの人は私と一緒にいると幸せなのだろう。でなければ私に告白などしない。でも……本当に私なんかでいいの？ こんな薄汚れた女でいいの？

いいわけない。私はあの人にとって何のためにもならない。でも、だからと言って、ここまで棚上げにした今

となつてはお断りの返事を切り出す勇氣もない。かといつて、あの人の好意を真正面から受け止める勇氣もない。ずるずると返事を先延ばしにしているだけだった。

私は……嬉しいのか、苦しいのか、もやもやと複雑だった。私に幸せはそぐわない。いや、そんな生易しいものじゃない。許されない。頭ではそうと分かっているはずなのに、どうしてはつきりと断ることができずにいるんだらう。

「剣さんとは最近会っていないんですか、先輩？」

叶ちゃんの言葉で意識を引き戻される。

「いや、ぼちぼち会つてゐるわよ。部屋も隣だし」

「でも、何にも返事をせかして来ねえんだらう？」

「ええ……」

「さつさとOKしちゃえばどうですか？ ぼやぼやしていると取り返しがつかなくなりますよ。今は大して好きじゃなくても、付き合ひ始めてから段々心惹かれてくともありますよ。ダメならダメで別れたらいいですし。はつきりすつきりしていじやないですか」

それ以前の問題なのよね……。

渋滞に嫌気がさした私達はサービスエリアで休んでいくことにした。『あけぼの』の時間にはまた間に合ひし、最悪それも満席なら東京で一泊していけばいいだけだ。少し遅めの夕食だ。

食堂のテレビでは夜のニュースをやっていた。

『……次のニュースです。大手ゼネコンの柿崎建工は、秋田市中心総合病院の旧棟の解体現場から、爆破解体用のダイナマイトを一部紛失したと発表しました』

セルフサービスの醤油ラーメンを手に席に向かう。先に席を陣取っていた二人のメニューを見ると、叶ちゃんはきつねうどん、釜田さんは海老天そばだ。私を待たず

に揃つてズルズルやっている。

「秋田市中心総合病院つて……おいおい、うちの近くじやねえか。物騒な話だなあ」

「そんな病院があつたんですか？」

「あ、叶ちゃんは知らないか、秋田に引越してきたの最近だもんね。最近建て替えのために一時的に閉鎖されてるの。別に私が入院しているときに閉鎖しなくなつたつて。おかげでわざわざ大曲の病院まで転院しなくちゃならなくて大変だった」

「入院？ 何か病気ででもしてたんですか？」

「うーん……まあね、病気とか事故とか」

私はチャーシューを噛みちぎりながらお茶を濁す。叶ちゃんに私の以前の部屋、巻き添えで移転前の店が爆破されたことは何も話していなかった。その時の怪我で入院していた病院だ。犯人を特定するめぼしい証拠もほぼ皆無で、捜査は打ち切られるかもしれない。事件とい、白雪の証言といい、私の剣さんへの思いといい、ぐじゃぐじゃと分からないことだらけだ。

そうやってぼんやりと考えていると、テレビから緊迫したアナウンサーの声が聞こえてきた。

『……ここで、番組を変更して臨時ニュースをお伝えします。先程19時45分頃、秋田新幹線『スーパーこまち20号』が占拠されたとの情報が入りました。犯人は大量の爆発物を所持しており、迂闊に手を出せない状況だとのこと。警察や政府及び、列車の運行会社のJR東日本から今のところ公式発表はなく、詳細は不明です。繰り返してお伝えします……』

……え？

「……先輩？」

……何よ、これ。

「あの……」

……まさか。

「ひよつとして、剣さんが乗務している列車つて……」
全身から力が抜けた。

嘘だ。

こんなの、悪い冗談に決まつてる。

剣さんが危ないなんて。

剣さんが死ぬかもしれないなんて。

剣さんにもう会えないかもしれないなんて。

何かの間違いに決まつてる……。

* * *

都内の某所。新幹線総合指令室本部は上へ下への大騒ぎだった。新幹線が爆弾魔に乗っ取られるなんて前代未聞の犯罪が起きたのだ。無理もないだらう。

入口をくぐると、白髪染めをしたひよろひよろの男性が近づいてきた。互いに一礼して、名刺を交換する。

「大空です。ここの責任者を務めております」

少しかすれた声で喋り、名刺を渡される。

「霧島です。独立行政法人・運輸安全委員会の者です。」

国土交通省の指示によつてこちらに伺いました」

こちらにも手短かに返す。

「運輸安全委員会……？ なぜこちらに？」

「確かに、我々の本職は鉄道事故などの原因究明及び再発防止策の策定にあります。無論、今回は事故やなくて事件です。じきに警察の方々もいらつしやるでしょう。」

しかし、警察は鉄道システムには疎いんです。僕が仲立ちをしたら、ここと警察の連携も上手くいくでしょう。それに、これはただの犯罪ではありません。テロ犯罪の可能性があります。警察と国交省は普段からテロ防止において協力関係にありますし、そもそもこのような事態に

おいては国交省が主体的に動く必要があります。いずれにせよ、必ずあなた方のお力になれるでしょう」

「それは心強い。我々としてもこんな事態は初めてです……。とにかくこちらへどうぞ」

室長は建物の中心部へと案内した。大学の大講義室みたいな部屋だ。しかし、テーブルの上にはたくさんのパソコンモニターや電話、コピー機、そして正面の壁には巨大な路線図が据え付けられていた。東京から先、東日本中の新幹線路線を網羅したその前を大勢の職員がてんやわんやしている。

「第849M、運休とのことです」

「第3043M、大地沢信号場で第3020Mの回避準備が完了……」

もはや戦場だ。

「現在の状況を詳しく説明して下さい」

「はい……いえ、少々お待ちを。警察の方がお見えになったようです」

室長の部下と思しき人がスーツ姿の二人組を連れて来た。一人は見覚えのある福々しい体形のおばちゃん。もう一人は七三分けの髪をした若い男だ。

「遅くなりました。警視庁の八雲です。こちらは部下の沖です」

警察手帳を見せながらおばちゃん警部が言う。僕ら二人も挨拶を返す。

「お久しぶりですね、八雲警部」

「ご無沙汰ですね。上越新幹線の節はどうも。沖君、この人が前に上越新幹線での事件を解決してくれた人よ」

「ああ、2月の末くらいにあった東京湾の溺死体の事件ですか。そうですね、あなたが……それは心強い」

沖刑事が顔をほころばせた。こっちは心もとない。警

察は捜査や犯人の検挙などには長けているが、いかんせん鉄道には疎い場合がある。権力があるだけに生半可な知識でとんでもない判断を下されたら厄介な相手だ。

「では、現状を説明します。皆さん、前方にある路線図を見てください」

室長の言葉に僕は従い、揃って前を向く。

「秋田新幹線と書いてある所です。あのピンク色の3020Mという数字のランプが当該列車『スーパーこまち20号』です。あのランプの位置が列車の大まかな現在地を示しています。現在、羽後四ツ屋駅を通過している所ですね。乗客は300人近く。ほぼ満席です」

「最終なのに満席って……あ、飛行機の客が流れてきたんですか」

昨日まで台風で大荒れの天気だった。東北の方にはあまり被害は出ていないはずだが、機材練りの都合がつかず、秋田を発着する飛行機にも欠航などの悪影響が出たのだろう。そんなことを考えながら路線図に目を向けると、確かに、ピンク色のランプと数字が盛岡と書かれた文字の方に向けて動いている。

「それで？」

沖刑事がメモを取りつつ先を促す。

「列車から緊急連絡が入ったのは19時43分でした。車掌が無線電話で伝えてきたものです」

「防護無線は出さなかつたんですか？」

「あの、防護無線って何ですか？」

早速八雲警部が質問を挟む。

「列車が事故などで走行不能になった際や走行が危険な時に発信する非常信号です。指令所と周囲の列車に危険を知らせる強制的に停車させる機能を持ちます」

やっぱり素人か。頼むから引つ掻き回してくれるな

よ？ 僕が解説し終えるのを待ち、室長が答える。

「犯人の要求に大人しく従って停車できない状況だったので、通常の無線連絡でした」

「なるほど……じゃあ、他の列車にはまだ連絡をしていないのですか？」

「いえ、大曲く盛岡間の他の列車においては、秋田の方の指令室に事情を説明し、すでに他の列車を回避させ始めています。あそこは在来線区間なので、我々新幹線総合指令室の管轄外なんです。在来線指令室によると、一旦は犯人の要求を呑むことにして、盛岡駅までは当該列車を無停車で走らせることにしたそうです」

「では、東北新幹線はまだ動いていて、田沢湖線は我々の指示を待たずに止めたということですね？ ……まあ、今回は状況が状況ですから仕方ないでしょう」

やれやれ、事件が終わったらまた秋田に出張に行く羽目になりそうだ。どうせなら『かま田』で一杯やるか。これくらい呑気に構えていた方が頭もよく回る。

「詰め腹で良ければ後でいくらでも切りますよ。東北新幹線は現時点ではまだ定刻通りですが、すでに事件のことは各乗客乗務員に伝達してあります。あなた方の指示で我々がいかようにでも動かしませう」

警察と違って、こちらはまだ与しやすそうさ。

「……無線電話の録音は？」

八雲警部の問いに室長は頷いた。

「全て自動録音されています。あとでお聞かせしましょう。で、ここからが本題です。犯人の名前と要求です」

「沖君、警視庁のデータベースへのアクセスを用意して。前科が無いかどうか調べるから」

八雲警部と沖刑事は身構えた。

「まずは氏名から。舞鶴寛。現在、柿崎建工の社員だそ

うです」

「柿崎建工って……大手ゼネコンやないですか。単独犯ですか？」

僕の問いに大空室長は頷く。

「現状では確定ではありませんが、共犯者は名乗り出ていません。現在、車掌とパーサーが全ての乗客の手荷物を調べています。まだ2割ほどしか済んでいませんが、今のところ不審物は何も出ていません」

「……そういえばさつきちらつと話していましたが、犯人の目的は？ 金ですか？ それとも誰か他の犯罪者の刑務所からの釈放などですか？」

沖刑事の言葉を前に、室長の顔が曇った。

「それが……どうも不可解なんです」

「不可解って……どういう風に？」

僕の質問への答えは、確かに無茶苦茶だった。

「遅くとも22時40分までに東京駅に着いて、そこで乗客乗員を全員解放。警察は乗客の名前や身分は一切把握しないこと。車内の監視カメラで映像を逐一確認しているため、把握しようとしてもすぐに分かる。また、解放後も含めて一切手を出さないこと。無関係な列車の運行を妨害しないこと。そして……解放後に自分を逮捕すること。逮捕までに前述の条件が全て満たされていたら逮捕に際して一切抵抗しない……とのことですよ」

* * *

「現在、舞鶴は？」

前方から目を離さずに僕は峠さんに尋ねた。暗闇の中、青白い前照灯に照らされた線路が勢よく流れる。

「監視役にパーサーをつけて、12号車の多目的室に閉じ込めています。爆弾も一緒です。鞆と手首を手錠で繋いで離れないので。大人しいもんですよ、抵抗もしませ

んでしたし。客室内の監視カメラの映像は乗務員用のタブレットで逐一確認しています。あと、全乗客の携帯電話、スマートフォン、その他通信機器を全部回収させました」

「……多分、乗客が外部と通信することも何か都合が悪いのでしよう。それに、警察に乗客の身分を把握しないように要求していることを考えると、乗客の名前が外部に露出することを避けたのかもしれないですね。理由は分かりませんが、それで、乗客の方々は？」

「今はまだ冷静ですが、いつまで持つか……。安全を考慮して、13〜17号車に移動してもらいました。万一爆弾を保管してある12号車が吹っ飛ぶ事になっても直接的なダメージは軽減されます」

「そうですか……」

僕は浅くため息をついた。

「私からも一つ質問していいですか？」

「ちよい待ち……制限85、よし！ ……ええ、どうぞ。何でしょうか？」

「警察は……犯人の要求を呑むんでしょうか？」

峠さんはややどもりながら疑問を發した。

「最悪そうなるでしょうね。走行している列車に手を出すことは警察にも困難でしょうから。犯人が大曲を過ぎから乗っ取りにかかったのは運が悪いですね。秋田駅を出てすぐの占拠だったら大曲で鉄道警察隊なり警察の機動隊なりに突入してもらおうんですが」

「スイッチバックで必ず停車しますからね、あそこは。」

それに犯人も犯人で、要求が全部呑まれたら大人しく逮捕される気です。それにしても、犯人の要求を呑む事なんて物理的に可能なんですか？」

質問の意図がイマイチ掴めない。

「物理的に、とは？」

「時間的に、とても言いましようか。だって、そうでしょう？ 本来ならこの列車は23時4分に東京に着きます。それを遅くとも22時40分に着くと舞鶴は言っています。今が19時47分なので、定刻通りなら終点まであと3時間17分。そこから最小で24分の時間短縮が求められています。できるでしょうか？ できなかったら最悪、私達はみんな揃ってあの世行きですよ」

「上層部の指示次第ですね。峠さんも存じの通り、とりあえず盛岡までは全区間無停車で走るように指示が出ました。対向列車の待ち合わせも無いそうです。このように指令室も、既にこの列車の所要時間短縮に動き始めています。後はそこから先の新幹線区間の指示と……運、でしょうか」

「運って……そんなテキトーな！」

「残念ながら、現状では神頼みしかできません。犯人を説得するにも僕や峠さんだけではまず不可能です」

暗い窓ガラスに、峠さんの不安げな表情が映りこむ。

「ですが……要求を呑むとしたら、この列車は東京までノンストップで走らないと犯人が要求する時刻に間に合わないと思います。そうなると、どこかで新幹線区間を運転する乗務員と交代させることも不可能です」

内心恐れている事態に峠さんが触れた。

「……つまり剣さん、あなたがこの列車を東京までぶっ通しで運転することになりますよ？ できるんですか？ 剣さん、在来線区間の運転免許しか持っていないのではありませんか？」

僕は大きく警笛を鳴らして、峠さんの質問を遮る。本来停車するはずだった角館駅を通過する。

「すみませんが、質問はこれくらいにして下さい。」

の通り、今は相当切羽詰まっていますからね」
盛岡から先の新幹線区間を僕に運転できるのか？ ……
…正直、考えたくもない。

* * *

「要求を呑む！？」

電話口で八雲警部が素っ頓狂な声を上げた。

「でも……え？ 何です？ ……はあ、そうですか……

了解です。岩手県警に協力要請を」

八雲警部は電話を切り、深くため息をついた。

「警視庁上層部の指示を伝達します。対策は取りま

す。万一の場合には舞鶴の要求を呑みます」

「つまり、最悪の事態に備えて第3020M列車が22時40分までに東京駅に着くようにしておけ、という事ですか？」

冗談じゃない、と大空室長は吐き捨てた。同感だ。

「第3020……？」

「『スーパードライバー20号』の事です。飛行機で言う

ところの565便とかみたいな感じで、あまり知られてはいませんが列車にも番号が割り振られているんです」

沖刑事の呟きに僕は答えた。

「全く、どの馬の骨が要求を呑むって決めたか知らんけど、簡単に言ってくれよ」

「あくまでも犯人の要求を呑むのは最終手段です。その前にこちらでも対抗策を取りま

す」
最初に『要求を呑む』と聞いた時にはぎょっとしたが、やはり警察もおいそれと犯人の指示に従う気は無いようだ。……にしても、犯人の動機が掴めない。

「対抗策って……何か考えでもあるんですか？」

僕は問う。八雲警部はためらいがちに頷いた。

「骨格だけはできています。でも、計画の実行にはまだ

準備が程遠い状態です」

「……その、骨格というのは？」

「それらしい理由をつけて犯人の承諾を得て、列車を駅に停車させます。そのまま説得にかかります。そしてドアを開放。機動隊と爆発物処理班を車内に突入させ、犯人と爆発物を確保します。それが済んだら人質を救出します」

立てこもりなどの犯罪対応としてはオーソドックスな手のように聞こえる。爆弾魔が人質を取って立てこもっている、という状況は確かに当てはまる。

「問題は、列車を停車させるのどうやって犯人を説き伏せるかですね。ダイヤ上の都合などといった理由では

とても納得しないでしょう。犯人の要求通り、途中無停車で走らせることになっていますし。犯人を納得させる

ような『もつともらしい嘘』を用意する必要があります。それは鉄道の門外漢である我々警察には無理な話で

す。霧島さん、大空室長、何か考えはありませんか？」

なるほど、それで骨格だけというわけか。僕は室長と顔を見合わせる。先に室長が問いを放つ。

「列車の足止めに必要な時間はどれくらいですか？」

「長ければ長いほど良いです。最低でも10分以上は欲しいです」

「じゅつ、10分ですか？」

そんなの、普通の運転停車でもあまり例が無い。ましてやこんな状況下では論外だ。

「……そこまでの長時間となると、信号システムの異常や車両故障、停電、その他事故や天災でもない理由になりませんよ。すぐに嘘だとばれてしまいます。もっと

短時間にできませんか？」

「……説得の工程を省略するしかないですね。元々、説

得は勝ち目が薄いですし」

勝ち目が薄い……？ まあいい、その話は後回しだ。

「3分くらいなら何とかなるかもしれませんが、ただし、駅が限られます」

「とりあえず聞かせて下さい」

沖刑事が僕の発言に食いつく。

「場所は盛岡駅です。確保できる時間はせいぜい3分だと考えて下さい」

「盛岡駅……人員を派遣する立地としては最高ですね。機動隊の展開も短時間で済みます。すぐに手配します」

八雲警部は沖刑事に目配せした。刑事はスマホを取り、岩手県警とやり取りを始める。

「で、停車の口実はどうするんですか？」

「データラメな鉄道の専門知識を吹き込みます」

「具体的には？」

「少しややこしい話です。しつかり聞いて下さい」

僕は警部がメモを取る準備を終わらせるのを待って、再び口を開く。

「秋田新幹線と東北新幹線では、諸事情により信号システムが異なります。これらの両方に対応した専用の車両を『スーパードライバー20号』として走らせていますが、

この異なるシステムに対応するための車両側の切り替え対応は、盛岡駅構内で停車中に自動的に行われます。所要時間は十数秒です。これが本来の姿なんです。『こ

の切り替えのために盛岡駅で3分くらい停車する必要があります』

「……それ、犯人が鉄道に詳しいような人間だったら苦しい嘘ですよ」

「沖刑事、その通りです。ですがこの辺はかなり専門的

な知識を活用した嘘ですから、そう簡単にはれる心配は

無いと思います。ただ、システム切り替えに5分も10分もかかるとさすがに怪しまれるはずなので、時間稼ぎとしては甘く見積もっても3分くらいが限界です。それに、この他の嘘を今すぐ用意しろと言われても、後は熊を跳ねたとかくらいしか思いつきません」

正直なところ、僕にもこの嘘が妙案とは思えない。だからと言って代案は何も思い浮かばない。

「……分かりました。これで行きます。現職の鉄道職員に説明させるとより信憑性も高いでしょう。室長から犯人に伝達を……」

しかし、室長は路線図の正面ですたんばって、ばしばしと指示を飛ばしている。

「第3020B、いわて沼宮内に臨時停車して下さい。」

その先は暫時指示します……」

「第70B、運休です……」
盛岡から先、列車を優先的に走らせるべく東京までの線路を空けようと奮戦しているようだ。それに、他の列車まで爆発に巻き込まれたら目も当てられない。

「……室長は忙しいそうですね。犯人への伝達は運転士にやってもらいましょう」

「運転士にですか？」

八雲警部の言葉をオウム返しする。

「目の前で運転している人の言葉なら信じやすいでしょうし、嘘だとばれても犯人は手を出せません。運転士に手を出したら、東京まで列車を運転する人がいなくなり。本来の要求を満たせなくなります」

「……一理ある。」

「警部！ 岩手県警への協力要請が受理されました。すぐに人員を盛岡駅に展開配置するそうです」

沖刑事の知らせに少しほっとした。でも、不安は拭い

切れない。

「では、この突入作戦をプランAとします。プランAが失敗したときのために、プランBも練りましょう……というか、既に上層部が決定しています。端的に言いましょう。犯人の要求を呑みます」

やっばりか。さっき電話口で素っ頓狂な声を上げていた。厄介なことになった。警察が犯人に屈するなんて想定外だ。

「犯人は要求を呑めば乗客乗員全員を解放して大人しく投降すると言っています。走る新幹線には手も足も出ません。異例の判断なのは百も承知ですが、プランAが失敗した場合は大人しくしているのが無難です。大空室長、すぐに準備を」

「勝手に話を進めないください。国交省として絶対に反対します。これは僕個人の意見ではなく、運輸安全委員会及び国交省全体の総意です。リスクが大きすぎる」
ここで自分の立場をはっきり伝えておかなければ。

「今は時間が無いんです。国交省上層部を説得して下さい。それとも、何かプランBに代わる考えでもあるんですか？」

「それはありませんけど……でも、無茶を言わないで下さい。新幹線の運転士を今から送り込むわけにはいきませんし、かと言って新幹線の運転免許を持たない者に新幹線の運行を任せるわけにはいきません」

警察コンビは目をぱちくりさせた。

「あの……免許、って何の話ですか？」

沖刑事がおずおずと尋ねる。僕は段々苛々してきた。

「鉄道の運転免許と一口に言っても、色々と種類があるんです。新幹線には新幹線の、在来線には在来線の運転免許があります。本当はもっと細かいですけど。自動車

で例えると、普通自動車の免許とバスやトラックのような大型自動車の免許とが分かれているようなものです」
「でも、今列車が走っているのは秋田新幹線ですよ？ 新幹線の運転免許で何も問題無いのでは？」

おいおい、まずそこからか。僕は辛抱強く説明する。
「確かに、名前だけは新幹線です。ですが実際には在来線とほとんど何も変わりません。速度も遅く、踏切もある。『こまち』という列車は新幹線と直通運転する普通の在来線特急列車だと考えて下さい。それが秋田新幹線などの『ミニ新幹線』の実態です。当然、運転免許も新幹線のものではなく、在来線のもの適用されます」

「在来線……？」
まさかこいつら、在来線の定義も知らんのか？ 知らんのかい。

「在来線ってのは、日本での一般的な鉄道路線です。新幹線よりも設備がちやちで、サイズが小さいです。元々新幹線は、在来線の輸送力が限界を迎えたために敷設されたんです。秋田新幹線は事実上の在来線です」

これでこの二人もいかに無茶苦茶なことを言っているか理解できたろう……と思ったのだが、思いの外食いがかる。沖刑事が予想だにしないことを言ってきた。

「じゃあ、『スーパーこまち20号』の運転士が新幹線の免許も在来線の免許も持っていればいいんですね？ 自動車の免許とバイクの免許を両方持っている人みたい。室長、当該列車の運転士の経歴は分かれますか？」

「少々お待ちを」

室長は部下に命じて、一枚の紙を持ってこさせた。

「読み上げます。剣礼士、28歳。2007年に仙台支社に配属後、震災を機に秋田支社へ転勤。以後は一貫して秋田新幹線での乗務を担当しています。新米ですが、

各種試験の結果は非常に優秀。勤務態度も良く、腕は確かです。免許は在来線の物しか持つていませんが」

「剣さん……そうですか、剣さんが……」

よりにもよってここで剣さんの名が出てきて驚く。……あの人は相当な鉄ヲタだから免許を持つていなくても新幹線の運転に精通しているかもしれない。だからといって、新幹線区間を運転させるわけにはいかないが。

「お知り合いですか？」

沖刑事が僕の目を覗き込みながら尋ねた。

「ええ、個人的な知り合いです」

このコンビが前に泣きついてきた上越新幹線の事件を剣さんに『かま田』で丸投げしたことは黙っておこう。

「知り合いを危険に晒したくないがために私達に反対しているんじゃないでしょうね？」

「は？ 何だこいつ。」

「失敬な！ こちらだつて今初めて剣さんが運転していることを知ったんですよ」

「やめなさい、沖君。霧島さん」

八雲警部は有無を言わさぬ口調で僕の名を呼んだ。

「では、今からでも新幹線の運転免許を持つ運転士を手配できないんですか？」

「馬鹿なことを言わないで下さい。爆弾魔に乗っ取られた新幹線を命懸けで運転したい新幹線運転士がどこにいるっていうんですか。盛岡駅で乗務員交代をする時間も、プランAを実行したら無いでしょう。機動隊突入などでそれどころではありません」

でも、このままでは剣さんを運転士にして東京まで運転させると言いかねない。

「爆弾魔と対峙する機動隊と一緒に新幹線運転士を突入させるわけにもいきませんしね。一般人です。しかし

そうなると、プランBに移行せざるを得ない場合には……剣さんという人に運転させるしかなさそうですね」

「やっぱり。」

「国交省の事情も分かります。私だつて、新幹線が無免許で運転させるなんてことはさせたくありません。しかし、今回は事情が事情です。新幹線の運転免許を持つ運転士を列車に乗せることが困難な以上、在来線の運転免許を持つている人に……つまり、この剣さんという人に運転させるのが一番安全なんです。もちろん、我々警察もプランAが成功するように全力を尽くします。プランBは発動する可能性が低い、いわば保険なんです。霧島さん、大空さん、許可をお願いします」

「……どうしますか、霧島さん？」

室長は僕を見る。

「さっきの剣さんの経歴、ちゃんと聞いていましたか？ 今まで彼は一度も新幹線を運転したことが無いんですよ？ そんな人によつて本番で未知の路線を運転させることがどれだけ危険なことなのか理解して話しているんですか？ 車で例えましょうか？ 普通免許しか持っていない素人がぶつつけで、助手席に教官も無しに今まで走ったことが無い高速道路で燃料満載のタンクローリーを運転するようなものですよ？ しかも制限速度もオーバーして！ それに、警察が大人しく要求を呑むと言つて犯人はそう簡単に信じるでしょうか？ それ以前に、犯人の要求を呑むとなると、他の新幹線を止めて当該列車だけを最優先で走らせることになります。市民生活に大きな影響が出ますし、避けたいところです」

こちらとて簡単には譲れない。反撃の機会を窺う。

「犯人が警察を信じるかは……恐らく難しいでしょうね。警察は既に舞鶴から信頼を失っています」

八雲警部は渋い顔で言う。

「……どういう意味ですか？」

僕は尋ねた。全く話が読めない。

「実は、舞鶴は昨日の夜、警察に来ています。詳細は後で話しますが、その時の警察側の対応がまずかったため、今も警察に不信感を抱いていると思われれます。そこで、今回の要求受け入れの指示は基本的に国交省によるものとしてほしいんです。誤魔化すのは列車が東京に着いて、犯人を確保するまでの間だけです」

「そんな無茶な……」

それって、身も蓋もなく言つてしまえば警察の尻拭いをしろつて事やんか。呆れて言葉も出ない。……さっき言つていた『説得の勝ち目は薄い』というのはこの背景を指していたのか。

「何度も言っている通り、相手は爆弾を持っています。無用に興奮させるのは避けたいんです。犯人の要求に従つたふりをしつつ逮捕すれば、被害は最小限で済みませす。逮捕してしまえば後はこっちのものです」

「そんなことを言われましても、こちらにも立場ってものがあるんですよ。国交省上層部が反対の立場を取つている以上、僕の独断で進めるわけにはいきません」

「役割がどうのこうのつて言っている場合ではないんですよ、霧島さん」

今度は二人揃つて僕の目をのぞき込む。僕はだいぶ苛ついてきていた。

「私達警察だつて、本当は要求を呑みたくなんてありません。それに、霧島さんのおっしゃるようなリスクは拭い切れません。だからプランAを用意したんです。ですが、計画は多ければ多い方が良い。プランBは犯人の要求を呑むのでまだ安全です」

「しかし、要求を呑むといつても実際に呑めるんですか？ 在来線と新幹線ではそもそもその運転方式から何か大きく異なりますよ？ いきなり乗り、運転しろと言われて素人にできるものではありません」

「え？」

これだから素人は……いや、我慢だ、我慢。

「さつき、新幹線と在来線は異なる運転免許を必要とするという話はしましたよね？ それからも分かる通り、新幹線と在来線はそれぞれ全く異なる運転システムを構築しています。例えば信号。在来線では基本的に線路脇の信号機の指示に従って走行します。ですが、新幹線のような高速運転では信号機の目視確認は不可能。そこで車内信号を採用しています。要は、運転席のメーターに速度が表示されるんです」

「確かに、さつき信号システムの切り替えて盛岡駅に十数秒停車する必要があるって言っていましたね……ですが、結果的に信号が見えるのなら大丈夫なのでは？」

「今話したのはあくまでも新幹線と在来線の運転操作が大違いな一例です。他にも異なる点はいくらでもあります。そもそも、スピードから桁違いなんです？ それだけじゃない。そもそも新幹線なんて簡単にスピードを出せて、時間を縮められると思ったら大間違いです」

八雲警部は言葉に詰まった。

「ネットで見たら、『スーパーこまち20号』に使用されているE6系新幹線は、現状での最高時速は300キロ。ですが、性能上では最高で時速360キロまで出せるそうじゃないですか。そこまで速度を上げれば……」

「だーかーらー、話はそう単純やないんですよ」

僕は沖刑事のたわ言を遮り、潰しにかかる。いい加減頭に来た。

「ええですか？ 新幹線のスピードを上げるってのは簡単な事やないんですよ。付け焼刃の知識で時速360キロなんて言ってますけど、現状の地上設備では物理的に無理です。一例を挙げましょうか？ 新幹線に限らず、ほとんどの電車ってのは屋根上の架線からパンタグラフを通して電気を得るんですよ。スピードを上げれば上げるほど、架線とパンタグラフにかかる負荷は大きくなります。現在の東北新幹線の架線は構造的に最大で時速320キロまでしか対応できません。時速360キロ？

そんな無理に出したら架線が切れて停電、列車は止まってしまう、犯人の要求を満たせなくなる。するとどうなるか？ 乗客乗員もろとも列車は木っ端微塵です」

僕はぜえぜえと荒い息をした。大きく息を吸って再びまくしたてる。まくしたてるたびにさらに腸が煮えくりかえる気がした。

「出せるとしても時速320キロが限界です。その速度なら現在、E5系『はやぶさ』という列車がその速度で旅客営業をしています。架線も耐えられるでしょう。来年、2014年ダイヤ改正では現在の『こまち』全列車を今『スーパーこまち20号』で使用されているE6系に統一、時速320キロで走らせる予定です。時速320キロならば恐らく安全に走行できます。試運転の実績も何度かありますね。新幹線は車両だけやない。保守要員なども含めた何万という人の不断の努力によって支えられているシステムなんです。そんなことも考えずに浅はかな知識、浅はかな考えを振り回すだけの馬鹿げた指示なんて、従えるわけないやろ！」

警察コンビは渋い表情をして、そのまま黙って僕の顔を見ている。

「本音が出たようですね、霧島さん」

「市民の安全を守るために協力は惜しみませんが、我々の目的である市民の安全確保にも、またプランAの保険としても、あなたの方のプランBは最適な手段でない。その説明しただけです」

言うべきことと言いたいことを大体ぶちまけて、それなりに胸がすつとした。

「あの……」

黙って聞いていた室長が口を開いた。

「皆さん、お話の途中よろしいでしょうか？ 警察の指示に従い、犯人の要求を呑むとした場合、当該列車が何時に東京駅に到着するかの試算が出ました」

僕も含め、一同の視線が室長に注がれる。

「先程霧島さんが説明して下さったように、現状での時速360キロ運転は不可能です。犯人の要求を全面的に呑む場合、当該列車第3020M……『スーパーこまち20号』は盛岡から先の区間を最高時速320キロで走行、途中停車駅の盛岡、仙台、大宮、上野を全て通過することになります。実際はDS・ATCの頭打ちに引っ掛からないよう、320スレスレで走らせます」

「頭打ちって……本当にギリギリを攻めますね」

「やむを得ないでしょう」

「DS・ATC？ 頭打ち？」

「な、何かの呪文ですか？」

警察コンビの質問に僕は頭を振った。頭痛がする。

「多少の誤解を恐れずにざっくりと説明しますよ？ ATCってのは鉄道の運行制御システムの一つです。列車の速度超過や脱線、追突などを防ぐためのシステムで、制限速度を超えて走行した列車に信号を送り、強制的に列車の速度を制限以下に下げたうえで走行を継続させたり、場合によっては列車を強制停止させます。頭打ち速

度つてのは、ATCが許可した速度に達することです」

「は、はあ……」

「あまり理解できてないって顔ですね。まあいい。とにかく、『スーパー』まち20号』は320キロ以上を出したくても出せないように制御されていて、常に320キロスレスレで走らせると考えて下さい……室長、本来は300が制限のはずです。単独『はやぶさ』の速度照査パターンを適応させるんですよ？ 可能ですか？」

「……今ならまだ何とかできます。しかし最悪、ATCを開放して走らせることも検討すべきでしょうね」

「ATC開放って、あなた、まさか……まあいいです、その話は後回しにしましょう」

とんでもない話になってきた。一層頭痛がする。

「話が脱線しましたね。室長、続きをどうぞ」

「脱線なんてやめてください。縁起でもないですよ、八雲警部。今は下手をしたら脱線だけでは済まないかもしれないんです。それ以前に、今の話は専門的で分かりにくいですしあなた方には関係ないように見えますが、実際問題必要なプロセスです。話は脱線していません」

八雲警部はばつの悪い顔で黙った。こいつら、一体いつになつたら事の重大さを理解できるのだろうか？ そのボンクラっぷりにもはや怒りを通り越して呆れる。

「はあ……まあいいです。こちらをご覧下さい」

室長は部下に大きな巻紙を持ってこさせ、テーブルに広げた。様々な色の線が大量に、網の目のように紙を埋め尽くしている。

「これは……一体？」

沖刑事は呆然としている。

「東北新幹線のダイヤグラムですか。警察の方々、特にこのお二方にはキツイと思いますよ。初見です。市販

の時刻表の方がまだマシだと思います」

「……ですね。普通の時刻表を持つてきなさい」

室長の言葉を聞いた部下は壁際の本棚に走り、一冊の分厚い本を持つてきた。今月の時刻表だ。

「こちらをご覧下さい。秋田く盛岡間を最速で結ぶ『ス

ーパー』まち6号』及び、東北新幹線を時速320キロで走る『はやぶさ18号』のダイヤです。このスジ……列車を例に使って説明します」

室長も専門用語を避けようと必死だ。指に唾をつけながら不器用にページをめくる。お目当てのページを見つけ、僕らに見せる(図③参照)。

『スーパー』まち6号』は、大曲く盛岡間を全駅通過、完全ノンストップにすることで当区間の最速ダイヤ

となつています。所用時間は55分です。現在乗つ取られている『スーパー』まち20号』の所要時間は60分。とりあえず現在は犯人を刺激しないために要求をひとまず呑んでいる状態なので、『スーパー』まち20号』は大曲く盛岡間をノンストップで走らせます。まず、この区間で5分の所要時間短縮が見込まれます」

「犯人が要求する『スーパー』まち20号』の22時40分までの東京駅到着には、通常ダイヤと比べて最低でも24分の所要時間短縮が必須となります。定刻なら23時04分に東京に到着しますからね」

室長の説明に補足を加える。

「盛岡からは東北新幹線に入ります。ここからE5系『はやぶさ18号』と同様の時速320キロに速度を引き上げて『スーパー』まち20号』を走らせ、なおかつ

東京までノンストップとします。所定のダイヤなら盛岡く仙台間は43分で走行しますが、これが39分に短縮、4分生まれます。同様に、仙台く大宮間は72分

から67分、大宮く東京間は26分から23分に縮まります。それぞれ5分、3分を捻り出すことができます」

「じゃあ、5分+4分+5分+3分……17分!? 要求に必要な24分なんて無理じゃないですか!」

沖刑事は計算し、顔を青くした。

「まだ続きがあります。これは時速320キロで走らせても、途中駅に停車する場合があります。ここから停車時間を削り落としていきます。先程、大宮く東京間で3分の時間短縮が可能だと説明しましたね？ これは途中の上野駅を通過するからです。大宮く上野間の制限速度は時速110キロです。上野から先はさらに制限が厳しいので、実際は110キロより低速で上野を通過します。盛

岡駅、仙台駅、大宮駅は配線……敷設された線路の形状により、出してもせいぜい80キロくらい。上野駅とほぼ同じです。その各駅の通過及び加減速の簡略化による時間捻出をそれぞれ3分ずつ、盛岡駅では『はやぶさ20号』との連結作業を省略させるため所要時間短縮を4分と仮定すると、盛岡、仙台、大宮の各駅を通過することにより10分の短縮が見込まれます。さらに、諸々の操作によりさらに1分程の時間短縮が見込まれます」

「余裕時分まで切り詰めにかかるんですか？」

「はい。幸いにして、盛岡く東京間で減速区間はありませんが」

「……でも、剣さんにそこまでできますかね？」

「できるできないじゃありません。それしか方法が残されていない場合は、やらせます」

「余裕時分？」

僕の言葉に反応した沖刑事が尋ねる。……やれやれ、面倒だが仕事だ。説明してやろう。

左：『スーパーこまち6号』時刻（概略）
 右：『はやぶさ18号』時刻（概略）

・秋田	6 : 0 5	始発	(前略)		
・大曲	6 : 3 7	発		・盛岡	1 9 : 1 3 発
・角館	通過			・仙台	1 9 : 5 2 着
・田沢湖	通過				1 9 : 5 3 発
・盛岡	7 : 3 2	着		・大宮	2 1 : 0 0 発
	7 : 3 3	発		・上野	通過
(以下略)				・東京	2 1 : 2 3 終着

(双方とも出典：交通新聞社『JR時刻表
2013年5月号』)

「本来、鉄道のダイヤはある程度の余裕を持って組まれています。いつも最高の状態で走行できるとは限りませんが、例えば、日中に地上設備の改修をして、列車減速が必要となったとします。でもダイヤは厳守しないといけない。そのような時、余裕時間で遅れを取り返さなければなりません。逆に、特に遅れが発生しない状況で余裕時分のみだけダイヤより早く走るなんてことはせぬ、少し遅めに列車を走らせてダイヤ通りにさせます」

「……ということは、17分+10分+1分で……28の時短ですか。プランAが3分を消費するから25分、犯人の要求が最低でも24分の時短だから……」

「八雲警部の声には興奮が滲み出ている。リスクはかなり高いですが、成功する可能性もあります。どうしますか？」

「……八雲警部、残念ながらその計算は間違いです。僕の言葉を聞いた警部の顔に不安が広がる。プランAが3分と言いましたが、それはあくまでも停車時間のみを勘案した話です。実際は盛岡駅に停車するための減速、発車するための加速、双方にかかる時間を計算すると少なくとも5分は必要です」

「ということは犯人の要求が24分の時短、プランAが敗した場合の余裕時分は28分から5分引いて23分……そんなギリギリアウトで……」

「それでもやると言うならば、必ずプランAを成功させ下さい。プランAが失敗に終わった場合、素人の剣さしが新幹線を運転することになります。プランBでも巻返せず、列車が吹っ飛び公算が高いです」

「僕は念を押す。……他に方法が無いんです。やるしかありません」

「霧島さん、もはや猶予はありません。早く上の説得をしてください！」

「早く許可を出さないと、ATCなどの設定変更が間に合わなくなります。やるなら早く指示を、霧島さん！」

「警察コンビ、室長が揃って僕を見る。……僕はとうとう折れた。許せ、剣さん。」

「はあ……分かりましたよ、やればええんですよ、やれば！ どうなっても知りませんからね！」

「ご協力、感謝します。室長、準備を開始して下さい」

「慇懃な八雲警部の言葉に僕は鼻を鳴らした。こうなつてしまつては僕のクビが飛ぶかもしれない。室長はそんな僕をよそにデスクとパソコンの海に姿を消し、大声で指示を飛ばし始める。そして大勢の係員が電話をかける。める。」

「第160B、米沢にて抑止。その先、区間運休……」

「第1350C、高崎にて運転打ち切り。そのまま待機して下さい……」

「指令所が一気に騒がしくなる。まずはプランAですね……プランBについてはプランAの成否を見てから考えましょう」

「ここからでは祈ることしかできない。」

* * *

「列車は大きく警笛を鳴らしながら田沢湖駅を駆け抜ける。明かりは灯っているが完全に無人のようだ。峠さんは額の汗を拭い、受話器の向こうに報告を入れる。」

「犯人が所持している爆発物以外、荷物は全部異常ありませんでした。不審物も発見されていません。どうぞ」

「そうか……やっぱ舞鶴は単犯か。彼の様子は？ どうぞ」

「多目的室で大人しくしています。どうぞ」

「そうか……乗客は？ どうぞ」

「怯えている方々がほとんどです。このままではパニックになりかねません。どうぞ」

『何とかして抑えてくれ。どうぞ』

「……了解。どうぞ」

よく言うよ、こっちの気も知らないで……。後ろにいる峠さんの表情は見えないが、げんなりしきつっているだろう。

『剣に代わってくれ。どうぞ』

「はい……剣さん、大空室長です」

僕は黙って受話器を受け取った。

「こちら第3020M列車運転士、剣です、どうぞ」

『こちらは指令室の大空だ。聞こえるか？ どうぞ』

「ええ、聞こえます。どうぞ」

『警察、国交省、そして指令室の三者で協議した結果、これから二つの作戦を実行することになった。プランAとプランBだ。まずプランAについて説明する。盛岡駅において列車を停車させ、機動隊と爆発物処理班を車内に突入させる。犯人と爆発物を確保、乗客乗員を解放する。そのために、犯人を運転室に移送する』

「犯人を移送するって……ここにですか!？」

運転室に部外者を入れるなんて言語道断だ。ましてや爆弾を抱えた犯罪者なんて。

『まあ聞け。これは運転士でないと実行できない作戦内容になっている。犯人の要求を満たすためには基本的に列車を停車させることはできない。時間のロスになるし、駅に停車させたら機動隊に乗り込まれる心配があるからな。犯人も停車には反対するだろうし、場合によっては爆弾を使った脅しをかけてくると考えられる。そこで、我々は盛岡駅に列車を停車させる理由をでっち上げた。この理由を嘘と悟られずに犯人を説得し、盛岡駅停

車の許可を犯人から得てほしい』

「なぜ僕なんですか？ それこそ、指令室の人間が行えないのでは？ どうぞ」

『電話では顔が見えない。犯人が電話の相手を警察だと疑い、停車に同意しなければプランAはおしまいだ。その点、運転士が直に説明したら犯人の信用も得やすい。現役の運転士が言うことだ、まだ説得力がある。それに、運転士しか列車を運転できる者がいない現状において、犯人と運転士を同じ空間に置くことに大きなメリットがある。犯人の目的が東京駅に向かうことである以上、運転士を殺すことができないという点だ』

「だから運転室に連れてこい、と言うんですか？」

『異論は認めない。これは決定事項だ。犯人には『信号システム変更による機器設定の変更のため、盛岡駅で停車する必要がある』と説明しろ。停車時間はなるべく引き伸ばしたいが、長くても3分だろう』

「信号システムは……ATSとDS・ATCの変更のことですね？ 本来は十数秒で切り替えますが」

『犯人がそれを知っていたら万事休す、プランAは破棄してプランBに移る。また、プランAが何らかの事情により実行できない場合や失敗した場合も同様にプランBに移行する。プランBの説明に移る。犯人の要求を全面的に呑み、東京まで引き続き運転するように。どうぞ』

その言葉に、背筋を悪寒より冷たいものが走った。新幹線区間の無免許運転……嫌だ。

「……本気ですか？ 僕は在来線の運転免許しか持っていませんよ？ 新幹線の運転なんて、そんなのできるわけありません。どうぞ」

『盛岡駅でプランAを実行すると、乗務員交代を行う時間が取れない。プランAが失敗した場合にはお前が運転

するしかないんだ。新幹線区間の運転方式は分かるか？

在来線区間におけるデジタルATCの応用版だと思えばいい。スピードメーター上に表示された数字までは無条件に速度を上げることができる。ザックリした説明だが、とりあえずはこれで運転できるだろう。もちろん、運転の指示は逐一こちらから送る』

「いや、だから……無茶苦茶ですよ。そんな指示だけで運転できたなら、運転免許なんて要らないでしょう」

『我々としても剣に運転させることは避けたい。しかし、他に方法が無いんだ。今から新幹線区間の運転士を手配することもできないし、交代する時間もない。大丈夫、責任は私が負う』

「今の、しかと聞きましたよ。ですが、本当にいいんですか……どうぞ」

『免許も何も持っていないよりはマシだ。今回は事情が事情だ。繰り返すが、君が責任を負うことはない。国交省や警察からも特例で許可が出ている。どうぞ』

「……了解。どうぞ」

了解？ 冗談じゃない。今にも発狂しそうだ。新幹線の無免許運転なんて、考えただけでも身震いがする。責任を負うことはない？ ……どうだろうか。こんな時に立場が弱いのは決まって現場の人間だ。

『速度については、ATCの頭打ちストレスを維持してほしい。少しでも時間を稼ぐため、非常ブレーキの使用も許可する。また、併結予定だった第3020B列車、』

『はやぶさ20号』との併結も行わない。どうぞ』

「了解。東北新幹線内で減速区間はありますか？ どうぞ」

『いや、無い。東北新幹線でも既に他の列車は本線上から退避させつつある。心配はいらない。……運輸安全委

員会の方が代わりたいたいそうだ』

「分かりました。どうぞ」

役人か。話の分かる人だといいいのだが。

『どうも、国交省・運輸安全委員会の霧島です。まさか
剣さんが運転しゆうとは』

「霧島さん！？ 何でここに？」

以前、『かま田』と一緒に飲んだ時のことを思い出
す。あの時も事件が絡んでいたが、他人事だったからお
気楽だった。

『細かい説明は後です。剣さん、それに峠さんもよく聞
いて下さい』

「え？ ええ、はい」

『今から盛岡駅の状況を説明します。この説明が終わっ
たら、峠さん、あなたが舞鶴を運転室に連れてきて下さ
い。盛岡駅には既に機動隊と爆発物処理班が待機してい
ます。駅に着き次第、ドアを開放。機動隊が車内に突入
します』

「犯人を……了解です。突入はどのドアから行いま

か？ 犯人は車内の監視カメラを押さえています。普通
に入ったのでは行動が丸分かりです」

『初動では現在あなた方がいる乗務員室のドアから突入
します。その後、すべてのドアを開放して下さい』

僕はちよつとだけ峠さんの方に目配せした。峠さんは
諦めきつた表情をして運転室を後にした。

「今、車掌の峠さんが犯人を連れに行きました」

僕は努めて淡々と伝えた。

『助かります』

「ですが、要求を呑むといっても実際のところ可能なん
ですか？」

『指令所の試算では、ギリギリ可能とのこと。ただ

し、プランAが失敗したら微妙なところですよ』

「そうですね……」

僕はため息をついた。酷く喉が渴いている。

『それに、剣さんには聞く権利があります』

「それはありがたいですけど……僕が犯人を説得するな
んて、そう上手くいくんですか？」

『それは何とも。まあ、現職の運転士の話です。素直に
聞くと思いますよ？ それに……ここだけの話、特に剣
さんには聞いて欲しいんです。以前、『かま田』でお世
話になりましたかね。以前の上越新幹線の事件のよう
に、力を貸して欲しいんです』

「偶然解けただけです、あれは。とにかくやるしかない
さそうですね。僕として死にたくないの、やるだけや
りますよ」

このままでは死んでも死にきれない。……少なくとも、
もう一度確氷さんに会って、返事をはっきりさせて
おきたい。

「あの、霧島さん」

『どうしました？』

「その……犯人をこの運転室に連れてくるということ
は、ここで犯人が爆弾を爆発させたら、僕は死にますよ
ね？」

『……そうなりますね』

「……僕に何かあったら、遺言をお願いしますか？」

もちろん、死にたくはありませんが。万一のためです」

受話器の向こうから少しの沈黙が聞こえた。

「制限、70、よし！」

列車は暗い峠道を駆ける。

『……遺言ですか。どうぞ、メモの準備はOKです』

「そうですね……両親に『お世話になりました』と。そ

れと……確氷さんに『もう一度会いたかった』と……そ
う伝えて下さい」

『……はい。何かあったら伝えておきます。ですが剣さ
ん、それは自分で直に会って伝える気ですか？』

「当然です。必ず生きて帰りますよ」

背後でノックがした。

「剣さん、峠です。舞鶴を連れてきました」

「霧島さん。犯人が来ました」

『了解です。プランAを開始します』

「了解。……はい、どうぞ」

僕の呼びかけに答えるように戸が開き、この列車を乗
っ取った犯人と爆弾が運転室に連れられてきた。

「……あなたが舞鶴さんですか。運転士の剣と申しま
す。今後の運転についてお話ししたいことがあります」

僕の堅い声に、犯人の表情は読めない。暗い運転席の
窓ガラスにでぶでぶと太った顔がどうにか輪郭だけ映り
こむ。

「……何だ」

「端的に言います。盛岡駅で5分程停車する必要があります」

舞鶴は少し困惑したような表情を……したのだろう
か。背後だからちゃんとは見えない。5分……これは僕
なりの賭けだ。

『剣さん、5分って……犯人に怪しまれますよ！』

「なぜだ」

受話器の向こう側のささやき声を遮って、低く、物騒
な声色が返ってくる。

「この列車が22時40分までに東京駅に到着しなかつ
たら……分かっているだろうな？」

「そう言い、手元の鞆を持ち直す。」

「ええ。ですが、盛岡駅で停車しなければそこから先の運転は不可能です。理由は信号システムにあります」

「信号システム？」

「ええ……制限、90、よし」

列車は峠を下り始める。段々と盛岡が近付いてくる。

「現在走行している秋田新幹線と、盛岡から先の東北新幹線では異なる信号システムを採用しています。そのシステムの切り替えのために、盛岡駅で停車する必要があります。また、僕は新幹線区間の運転免許を持っていません。盛岡から先の運転は免許を持った人間でないと不可能です。そのため、盛岡で乗務員交代を行う必要があります」

「お前が東京まで運転を続けなければいい。今からこの列車を運転したがる人はいないはずだ。乗務員交代の必要は無い」

舞鶴の答えはにべもない。

「停車もそんな長時間は認められない。どうせ、停車中に警察が突入する手はずになっているはずだ」

受話器の向こうから息を呑む音が聞こえた。僕は平静を装い、話を続ける。

「しかし、停車しないことにはシステムの切り替えが不可能です。停車しなければ盛岡から先の走行は不可能です。これは運転士の問題とは違い、どうすることもできません」

「だが5分は長すぎる」

「では……3分でどうですか？」

僕は要求のハードルを下げた。承諾してくれたらプランAを発動できる。そうなればもう大丈夫だ。

「3分で切り替えは終わるのか？」

「いくつかの工程を省略したら行けます」

嘘の上塗りだ。

「……仕方ない。いいだろう」

「了解」

犯人が要求を呑んだ。プランA実行が決まった。

* * *

テレビから流れるニュース速報の音が店内の静けさを際立たせる。

「先輩……」

叶ちゃんがそっと私を見る。

どうしよう。

突然の知らせに私は完全に動揺しきっていた。

どうしよう。

「先輩！」

「何よ……！」

大声で叶ちゃんに怒鳴る。

「あ……ごめん、叶ちゃん。ちよつと……その、えー」と、ごめん

「いえ……」

叶ちゃんの目線が私からテレビに移る。ヘリから撮影しているのだろう、乗っ取られた列車の姿がぼんやりと茜く闇に浮かんでいる。

「……まずは食え。話はそれからだ」

釜田さんが私達をなだめるように言い、自分は海老天の尻尾を口に放り込む。

「腹が減っちゃあ、戦はできねえぜ」

その言葉に私も叶ちゃんも、テレビにがっかりと視線を固定したまま、めいめいに麺を啜る。全く味が無い。

「あの、先輩。私、聞きたいんですけど」

「待ちな、大和。ここだと少し場所が悪い」

釜田さんは何を感づいたか、遮る。やがて食事を終え

た私達は食器を下げ、車に戻った。

車内に入っても、釜田さんはエンジンをかけない。重

苦しい空気と、屋根を叩く激しい雨の音が重なる。

「先輩」

「え？」

隣の席、叶ちゃんのくりくりした目が私を見据える。

「先輩、剣さんのことをどう思っているんですか？」

一瞬、質問の真意が測りかねた。

「……え？」

「だから……」

叶ちゃんはじれったい表情をした。

「確氷先輩は、剣さんが好きなんですか、それとも好き

じゃないんですかって聞いてんですよ！」

……思ってもみないタイミングで思ってもみない質問が飛んできた。動揺を隠せない。

「え、いや、その、私は……」

「好きなんですしょ？」

「……」

うまく返事が思いつかず、ただ口をばくばくさせる。釜田さんは何かを察したかのように口をつぐみ、エンジンのかけた。車が一つ身震いし、ラジオからニュースが流れ始める。

「好きじゃなかったら、あのニュースでここまで動揺するわけ無いじゃないですか！好きな人がこんな危ない目に遭っているのに、どうして何もしないんですか！」

「駄目なものは駄目なのよ……！」

私は力任せに怒鳴った。頭の中で、優しげな剣さんの面影が、私には決して手の届かない面影へとみるみる色褪せていく。何だかそれが無性に悲しかった。

「……駄目、ってどういう意味ですか？」

「そのままの意味よ。私はあの人を好きになつてはいけない。私にそんな価値は無い」

私はせいぜいと肩で息をしながら続ける。

「私みたいな女が……剣さんを好きになつたとしても、私はあの人に釣り合わない。私と剣さんが好き合つても、私が幸せに生きる資格は無い。……だから、駄目なのよ。私は暗くみじめに生きるしかないのよ」

「……その言い方、やっぱり剣さんのことが好きなんじゃないんですか？」

叶ちゃんの言葉に怯む。

「……何なの？ あの人のが好きだとしたら何だつていうの？ どうせ手は届かないのよ」

突き放す。でも、なぜか違和感。

「はあ？ 何訳の分かんないこと言つてんですか、関係ないじゃないですかそんなこと！」

「どこがよ！ どこが関係ないつて言うのよ！」

「全部ですつてば！ 先輩が言うこと全部！」

叶ちゃんは窓ガラスをぼんと叩き、私を睨む。

「先輩の何が後ろめたいのか知りませんが、今この機会を逃したらもう手遅れなんですよ！？ 剣さんが死んだら、あの人の気持ちにどうやってケリをつけるんですか！ 釣り合わないですつて？ 幸せになつちやいけないですつて？ アホかお前は！ 釣り合わないなら釣り合うようにすればいいだけです！ 幸せになつちやいけない人なんているわけじゃないでしょうが！」

……は？

呆然とする私にキレたのか、叶ちゃんの顔にさらに赤みが差す。

「まだ分かんないんですか！？ 剣さんのことを好きになつちやいけない理由なんてどこにもないんですよ！」

それなのにいつまでもうじうじと、もう面倒なんですよ！ 大体あんた、告白されたのも一カ月以上も前でしょうが！ 放つとく剣さんも剣さんだけじゃあ、あんたもいかげん早くはつきりしろ！ 好きなものは好き！ それでいいの！」

言い争いが小休止した車内をラジオの音が支配する。

『……警察と国土交通省は、占拠された『スーパードラム20号』の人質解放作戦に向けた調整を行うことにしたと発表しました。作戦内容の詳細は現状では未定とのことです……』

その支配を叶ちゃんが破る。

「嫌いなんですよ、チャンスを目の前にしてうじうじしてる人。人生は短いし、一回ぼつきり。だから、やりたいうことをやればいい。それなのに先輩は何なんですか！ いつまでも訳分かんない御託を並べてばかりで！ 素直になつたらどうなんですか！ 剣さんに対して素直になるチャンスはもう今しか無いんですよ！？」

「素直に……なる……」

……そんなの、できるわけないのに。

「ええ、そうですよ。今素直にならなくていつ素直になるんですか。自分の本心に正直になつて下さいよ」

……私の本心……。

「剣さんのことが好きなんでしょう？ だったらここでぶつぶす燻つてる暇なんてないでしょう！ 先輩以外の誰が剣さんの助けになるんですか！」

私の、本心……。

「後悔してからじゃあ……もう手遅れなんですよ……死に別れてからいくら大好きな人を想つても、その人にはもう会えないんですよ……先輩は私と違うんですよ……先輩はまだ、間に合うんですから……今ならまだ、好き

つて伝えられるんですから……」

……本心なんて、そんなもの……。

「先輩だつて……あの時の事件の謎解きで言つてたじゃないですか……『殺された人には、死に別れた人にはもう二度と会えない、残された人には悲しみしか残らない』つて……そう言つてたじゃないですか……」

「駄目」

「へ？」

叶ちゃんは不意に私の口からこぼれた言葉に虚を突かれ、呆けた顔をした。

「……やっぱり、駄目よ。私なんて」

「先輩、まだそんな寝惚けたこと言っているんですか」

「寝惚けてるのはあなたよ。叶ちゃん」

叶ちゃんの言葉に度肝を抜かれたが、聞いているうちに段々ライライしてきた。

「あなた、私の何を理解して話しているの？ 私のことを理解しようとして話しているの？」

弾けた言葉は止まらない。

「いや……その……」

「私には私なりの理由があるのよ。それを考えもしないで、無責任なことを言わないでくれる？ 幸せになつていいなんて、そんなの言うだけなら簡単よ」

脳内に血まみれの記憶が蘇る。

「……そんなに突き放すことないじゃないですか」

「素直になつてなれないのよ、私は！」

車の中に沈黙が降る。ラジオの音も、屋根を打つ雨粒の音も、全て静けさの一部分に溶け込んでしまつていくようだ。

「幸せになつてなれやしないのよ……私なんて」
叶ちゃんは何も言わず、私から目を逸らせずにいる。

「……相変わらず、訳分かんねえことゴタゴタ言ってるな」

運転席から呆れ返っただみ声が聞こえた。

「釜田さん」

「悪いが、俺にはお前のことを理解して話すことなんてできねえぜ。お前の過去を知らねえんだからな。大和の言葉は無神経かもしれないねえし、それに怒るのは勝手だ。二人で好きにやってくれ」

釜田さんは少し考えこみ、言葉を続ける。

「お前が幸せになれねえってのは釈然としねえが、とりあえず分かった。一旦置いておこう。だがなあ、刃のこのことを考えてみる。あいつはお前のことが好きなんだぜ？好きな人には笑顔でいて欲しいって思うのは、そりや人間の性ってもんだ」

「……何が言いたいんですか？」

「はつきり言ってるのか？ 確氷。今のお前は、自分のことしか考えちゃいねえ。自分の喜びから逃げることしか考えちゃいねえ。だからあいつの想いに応えられねえんだろ？ 自分勝手だから、あいつの気持ちに응えられる自分になれねえんだろ？ だったら逆に考えてみる。お前は刃をどうしたい？」

「私が……刃さんを？」

「……はつきりとした答えはすぐには浮かばない。

「あいつをどうしたい？ ん？ 何も思い浮かばねえか？」

私は……。

「分かりません……でも」

私は口ごもる。

「でも……少なくとも、嫌な目には遭って欲しくない。私はそう思います」

「そうか。なら話は簡単だ。嫌な目にはもう遭っちまってるんだから、あとはそれをどう癒すかだろ？ それができるのはお前だけだ。お前が刃を救いたいのなら、お前が刃を救えるのなら、躊躇うことはねえ。突っ走れ」

「でも、私……」

「確氷。お前まさか、自分が刃のそばにいとあいつにとつて厄介事になる、なんて馬鹿なこと考えちゃいねえだろうな？」

頬に血が巡る。凶星だった。

「人間、誰だって何かしらの厄介事をしよい込むもんだ。刃はまさにそうだ。今、とんでもねえ目に遭つてやる。人間、不幸続きだと折れちまう。お前がそばにいてやったら、刃は折れずに済むはずだ。違うか？」

言葉に詰まる。分からない。

『……ここで新たな情報が入ってきました。警察は、列車を盛岡駅で停車させ、犯人確保と人質解放を目的とした突入作戦を行うとの情報です。列車は現在、盛岡駅の一つ手前、大釜駅構内に入ろうとしている所です……』

人質解放作戦？ ってことは、刃さんもここで助かるってことなの？

釜田さんがラジオのボリュームを上げた。緊迫したアウンサーの声に、雨の音はかき消された。

第二章

指令室は息苦しい緊迫感に満ち満ちていた。列車はもうすぐ盛岡駅だ。プランA実行の時が刻一刻と迫っていた。指令員の視線の多くは、盛岡駅から送られてくる新

幹線ホームの映像に縛り付けられていた。

画質が少し粗いテレビ画面には、物々しい装備をした機動隊の一団の姿が見える。監視カメラの映像を転送しているため、音声は聞こえない。

路線図で『スーパーこまち20号』の現在地を確認する。大釜駅を過ぎ、東北新幹線へのアプローチ線に入った辺りだ。

『指令室。こちら第3020M運転士。大釜駅を通過、盛岡駅に入線します。どうぞ』

刃さんの声だ。室長が応答する。

「こちら指令室。位置を確認した。列車を所定停止位置Zに停車させよ。停車次第、直ちにプランAを実行する。どうぞ」

『了解』

映像の奥に眩い光が見えた。『スーパーこまち20号』はその茜色の車体を現し、僕は身構えた。

「機動隊の準備は？」

「大丈夫。犯人がいる運転席から見えないように、死角に隠れて配置してあるから」

警察コンビの会話が漏れ聞こえてきた。流石に警察をやっているだけある。そこまで考えなかった。

「刃さん……」

僕は、祈るように呟いた。

* * *

大釜駅を通過すると、東北新幹線の高架に繋がるアプローチ線に突入する。

「制限、70、よし。デッドセクション確認。ノッチオフ」

電圧が切り替わるため、惰性で坂道を駆け上る。ゆっくりとメーターに表示された速度が落ちていく。

「デッドセクション、通過完了」

ジリジリとATSのベルが鳴る。確認ボタンを押すと、キンコンキンコンと持続音に変わる。東北新幹線の高架に合流した。

「ATS作動、確認。東北新幹線、入線」

そのまま盛岡駅の大屋根の下に滑り込んでいく。大きく警笛を鳴らす。本来はここで数度停車して連結を行うが、今日はそれが省略されていてえらく違和感がある。

ホームの上には誰もいない。乗客はもろろのこと、駅員も機動隊も皆無だ。犯人は僕のすぐ背後まで身を乗り出し、食い入るように前方を見ている。

ブレーキをかける。鋭い音を立てて列車は停車した。

「停止位置、よし。盛岡駅、20時36分04秒。4分56秒到着」

ATSの表示が消え、ATCの作動音がチンと響いた。切り替えはこれで完了だが、ここから3分は粘らないとまずい。それだけ粘れば助けが来るはずだ。助けが来たら、碓氷さんにまた会える。

「おい、今の音は何だ」

犯人が僕の背後からぬつと顔を突き出し、メーターを覗き込む。どきりとするが平静を装う。

「信号システムの切り替えを開始した音です。ここから切り替えに約3分かかります」

口からでまかせを言う。舞鶴の表情を盗み見ると、かなりじれている。何がこの男をそんなに焦らせるのだろうか？ それよりも、機動隊はまだなのか？ 戸じめ表示が消えている。峠さんは予定通りにドアのロックを解除したのでらう。

ホーム横の鏡をちらりと見る。盾を構えた機動隊の1団が、そつとこちらに駆け寄ってくるのが見えた。

「おい、まだかかるのか？」

「もう少しです。あと2分弱」

既に停車してから1分以上が過ぎている。犯人の苛立ちが、運転室の空気を尖らせていく。

「早くしろ！」

舞鶴が耳元で怒鳴る。

「お、落ち着いて下さいよ」

「うるさい、今すぐ列車を出せ！ どうせ機動隊にでも突入させるんだろ！」

ばれてる。今度は僕が慌てる番だった。機動隊は何をモタモタしているのか、ようやく運転席のドア近くに来て、突入のタイミングを伺っているところだ。

そして、恐れていた事態が起きた。

しびれを切らした犯人が運転席のドアに向かう。その手にはしっかりと爆弾が握られている。

このまま外を覗いたら機動隊と鉢合わせだ。しかし、止める間も無かった。

ドア窓が開く音がした。万事休す。犯人が叫び、そして怒鳴り声が聞こえた。

「おい、これはどういうことだ！ 早く列車を出せ！ 早くしろ！」

「で、ですが！」

「お前ごと列車を吹っ飛ばすぞ！」

爆発音がした。列車が一揺れして、線路に黒煙が弾ける。何かがガシャガシャと落ちる音がある。本気だ。

「回避！ 回避！」

機動隊の叫び声に背中を押されるように、僕は峠さんに電話をかけた。すぐに応答がある。

「峠さん、プランAは失敗です！ 早く戸閉めを！」

『了解！』

戸じめ表示が点灯する。横のATC表示に目を移すと、黄色く丸い光の中に320という数字が浮かび上がった。走れる。走れるけど……320!?

「ATC、確認。制限320。出発進行！」

マスコンを一番手前まで引き倒すと、列車は東京へ向けて猛烈な勢いで走り始めた。

犯人が爆弾をもつ一つ投げたのだろうか。また爆発音が聞こえ、列車にショックが走った。

「指令室、プランAは失敗。……プランBに移行します。指示をどうぞ」

電話の向こうから、沈み込んだため息が聞こえた。

* * *

指令室は水を打ったように静まり返っている。自分も含め、ほぼ全ての職員が盛岡駅からの映像を注視していた。その映像も爆発の衝撃で大きく揺れた。そしてざあざあとモノクロの砂嵐に切り替わった。

「……そんな」

八雲警部が動揺しきった声を漏らす。僕は何が起きたのかにわかには理解できなかった。いや、理解したくなかったのかもしれない。

「刃さん……まさか」

「……死んでないやろうな。」

ジリリリリリリ！

無線電話が鳴った。大空室長が弾かれたように電話に飛びつき、応答する。

『指令室、プランAは失敗。……プランBに移行します。指示をどうぞ』

刃さんの声が聞こえた。無事だ。プランBに移行したという事は、列車にとりあえぬ異常はなさそうだ。指令室の空気が一気に安堵で緩む。

だが、事態は最悪の方向に動き出した。安堵は一瞬のことだった。あつという間に指令室の空気は沈み込んでしまう。室長が電話にため息を返す。

「運転に支障は？」

『現在、峠さんが被害状況を確認しています。追って報告します。現状では走行に特段の支障はありませんが、ATCが320信号を出しています。どうぞ』

「それは構わない。プランAが失敗した以上、一刻も早く東京に着く必要がある。320まで上げて、少しでも時間を稼いでくれ……盛岡は何分早発だ？ どうぞ」

『20時38分16秒発、2分44秒早発です。どうぞ』

2分44秒早発……となると、盛岡には2分12秒停車していたことになる。

「加速性能も考えると約4分強のタイムロスですね」

僕の脳味噌は一気に回転を始めた。元々の余裕時分は28分、それが今は24分弱、犯人の要求は最低で24分の時短……まずい。

「室長、このままでは間に合いませんよ！」

「そのようですね……」

室長の顔に疲労が浮かぶ。このまま犯人の要求する時間に間に合わなかったら、東京駅でさっきの数倍の爆発を起すだろう。そうなっては間違いなく死人が出る。

でも、これ以上の時短の余地は無い。

どうする。

必死に考えようにも、脳内は真っ白にフリーズするばかりだ。焦りばかりが先立って何も浮かぶものがない。

「霧島さん」

室長が思いつめた表情で僕の方を見る。

「これ以上の時短となると、打つ手は限られてきます。

危ない橋です」

「危ない橋って……そもそも、これ以上何ができるんですか？ 現状の時短策でも列車は既に最速の320キロを叩き出しています。これ以上どうしろと……？」

「途方に暮れるにはまだ早いです。私としてもこのような手段を取るのには万死に値すると分かっていますが、背に腹は代えられません」

万死に値する……一体何をするつもりなんだ？

「霧島さん。DS・ATCを開放しましょう。それで列車に時速360キロを出させます」

「……何ですって!?! ATC開放!?!」

僕は自分の耳を疑った。

「あの、ATC開放って何ですか？」

八雲警部が口を挟む。

「ATCについては先程簡単に説明しましたよね？ 列車の速度を制限し、列車同士の衝突や追突を防止するシステムです。新幹線の信号と思えばいいでしょう。それを開放する、つまり、列車側のATC信号の受信を停止するんです。列車の制御を全て運転士一人の手に委ねて、フェイルセーフを全て無効にすることだと言えます。ATCは新幹線の安全の根幹、それを無視するということは重大な法令違反、禁じ手そのものです」

「……今、ハンドルを握っている剣さんって、新幹線の運転免許を持っていないんですよね？」

「ええ。現状は、列車がATCの制御下に置かれているために何とかなっているんです。室長の言う通りにATCを開放した場合、列車の命運は素人運転士に全て託されることになりませう」

僕は早口で説明をまくし立て、室長に向き直る。

「室長、ATCを開放したところで時速360キロ運転は不可能なものではありませんか？ 地上設備はそこまで高速運転に対応していないはずですよ。それに、他の列車との兼ね合いはどうするんですか!」

室長はしよぼしよぼと目をこすった。

「第3020M列車の現在地は前方のCTCモニターで把握できます。それに、他の全列車は既に退避が完了しています。本線上には他の列車は存在しません。なので、追突などの他の列車を巻き込んだ事故は起こりえないんです」

もう退避が完了したのか。時間帯が夜遅く、列車の運行本数が少なくなっていたのが救いだっただろうだ。

「ほかの列車の退避が完了したので、現在本線を走行しているのは第3020M列車のみです。状況としては、試作車両の高速試験を行う時と同じです」

「試作車両の高速試験？ ……ああ、FASTECHとかですか」

「ふあす……てつく？」

聞き慣れない単語に警察コンビがきよんとする。

「数年前に試作された新幹線です。時速360キロでの走行試験を行いました。その高速試験の時の地上設備が現在もそのまま使われています。その設備がある区間だけはATCを開放して、360キロ運転が可能です」

室長が説明する。……さすが現職の鉄道マンだ。

「で、その設備がある区間はどこですか？」

「北上と仙台間です」

前方の路線図を見ると、列車は早くも盛岡の一つ先、新花巻に至ろうとしていた。新花巻の次が北上だ。

「……他に時短の方法は無いんですかね？」

僕は念を押す。

「ありません」

室長は悲壮な顔で断言する。

「しかし、ATC開放なんて言語道断、法令違反も甚だしいですよ。それでも他に方法が無いんですか？」

「ありません……時短の方法はこれだけです」

気が付くと、ほとんどの指令員と警察関係者が僕と室長のやり取りを注視していた。

「走行中のATC開放って、安全性は大丈夫なんですか？ 前例はあるんですか？」

「時速360キロを出したくらいでは脱線することはまずありません。ただし、ほぼ満員の中、ぶっつけ本番でカタログスペックの最高性能を出す……故障や車両不具合は発生しやすくなります。それと、前例もあるにはあります。ですが、東海道新幹線開業後すぐの黎明期の時、約半世紀前の話ですし、明確な資料が残っているわけでもありません」

「……その時の状況は？」

「ATCの故障による特例措置で、国の機関からの圧力がかったために渋々行ったそうです。結果的には無事に運転を終え、そのまま事実上公的にはもみ消されたようです」

「背広組からの圧力ですか……」

背広組である僕ですらも知らない話だ。

また前方の路線図を見る。北上までもうしばらくだ。

「……仮に360キロで走らせるとすると、何分短縮できますか？」

「加減速にかかる時間も含めて2分……というところでしょうか」

室長が少し考えながら答える。2分か……となると、余裕時分は2分弱になる。依然として厳しい時間配分だ

が、これは妥協するしかなさそうです。

「霧島さん、どうしますか」

もう一度路線図に目をやる。列車は北上に迫ろうとしていた。もう猶予は残されていない。

「……」

「霧島さん！」

「……分かりました。ATC開放を許可します」

僕は苦い顔をして許可を出した。クビは確実だろう。でも、これで人質が助かるなら安いものだ。

「了解。第3020M列車に連絡、ただちに準備を！」

指令員がまた一斉にわらわらと動き出し、指令所は喧噪を取り戻す。

「しかし、360キロ走行は仙台までですよ？ そこから先、ATCを復帰させるんですか？」

「いや……運転操作は素人任せという最悪の状況で、余裕時分が1分半というのはあまりにも心もとないです。他の区間でもATC開放による速度超過を行い、余裕時分を確保します」

「確保って……どこでやるんですか？」

「現在考えているのは大宮〜上野間です。あそこは地元自治体との騒音対策協定により速度を抑えているので、騒音さえ気にしなければ速度向上は可能です。時速110キロから130キロくらいまで上げて、約1分の所要時間短縮を狙います」

「それでも3分弱ですか……ギリギリですね」

まるでアリバイトリックを組んでいる気分だ。いや、そんな呑気なことを言っている場合じゃない。

「第3020M列車、まもなく北上駅を通過します！」

前方から指令員の声が届いた。

「……こちら、盛岡駅上空です。今、二度目の爆発がありました。新幹線ホームから黒煙と赤い炎が上がっています。現場から中継です」

カーラジオからの音声に血の気が引いた。

「剣さん……」

私の吹きもどうにもならない。聞いた限りではかなりの爆発だ。一たまりもないだろう。でも……まさか、剣さんに限って……。

死なないで……剣さん！

神に祈るように。仏にすがるように。私はぎちぎちと両手を握りしめた。

『……今、新たな動きがありました。乗っ取られた『S1。P1。こまち20号』が盛岡駅から出てきました。東京方面に向かって速度を上げています。犯人確保と人質解放は失敗に終わった模様です』

どういうこと……？ 私はゆっくりと両手を開いた。じつとりと手汗が滲んでいる。

「……剣さんは、無事なんですか？」

叶ちゃんが私の思いを代弁する。

「そう考えるのが一番合点がいくんじゃないか？ 現に列車が走っていることは、誰かが列車を運転しているってことだ。あの場にいる人間で列車を走らせることができるのは剣だけだ。列車が走っていることは、剣が生きているということだ」

全身の力がゆっくりと抜けていく。安堵した。

「しかし、これはやべえな……」

釜田さんの表情は浮かない。

「確かに、列車が走っていることは……事件はまだ終わっていないって事ですもんね」

「ああ。それに、剣は新幹線の運転免許を持っていねえ

し、運転操作を教えたこともねえ。そんな奴にいきなりぶっつけ本番で新幹線の運転をさせるなんて、無茶ぶりにも程があるぞ」

「一難去ってまた一難、ですか」

釜田さんと叶ちゃんの会話が、剣さんがとりあえず無事だという安堵感に冷や水を浴びせた。

「このままだと、あいつら東京に来るぞ。爆弾魔を引き連れてな」

その言葉に安堵感が段々と薄れていき、心を不安が埋め尽くす。不安は恐れを生み、理性を殺す。

「このまま……」

「ん？」

「え？」

釜田さんと叶ちゃんが揃って私を見る。私も自分で思わず漏らした言葉に驚いたが、漏れ出した言葉は止まらない。

「このままこんな所でじつとなんてしてられません！」

私は叫んだ。叫んでから一足遅れて、禁忌を破った心がずきりと痛む。でも、それよりも怖く、激痛を伴う未来が見える。

「このまま何もしないでいるなんて……そんなの、嫌です！ そんなことしたら絶対後悔します！」

「先輩……」

「後悔だけは……それだけはしたくないんです！……誰かを喪うのは、もう嫌。二度と……嫌……いや……」

「確氷、お前……」

「もし剣さんが……礼士さんが死んじゃったら、私、わたし……」

恐怖が涙をこぼれさせる。

「……それがお前の本心ってわけか、確氷」

私は涙を堪え切れないうまま、ゆつくりと頷いていた。釜田さんと叶ちゃんがやりと笑うのが、ぼやけた視界に見えた気がした。

「確氷」

釜田さんが静かに語りかける。

「泣くのは構わねえ。泣くのは恥でも何でもねえ。だがな、どうせ泣くなら剣の胸で泣いたらどうだ？」

もはや恐怖にかまけている一刻の猶予も無い。

「……私、行きます」

釜田さんと叶ちゃんの顔が和らぐ。釜田さんはぱんと手を叩いてハンドルを握った。

「よく言った、確氷！ それでこそ剣が惚れた女だ！」

顔が赤くなるが、ここは素直に頷くしかなさそうだ。

「でも行ってくつて、どこにですか？」

「……そんなの決まってるじゃない」

私は涙と迷いを拭い、眼鏡を掛け直して言った。

「東京駅よ」

* * *

鋭い風切り音とモーターの叫びが、暗い運転席にこだまする。窓の向こうには、とんでもない速度で消し飛んで行く景色。普段運転する列車の実力を目の当たりにして、僕は必死に運転台にしがみついている。

電話が鳴った。指令室からだ。

「第3020M列車、運転士の剣です」

『こちら指令室。北上から先の区間について指示します。よく聞いて下さい』

室長の部下なのだろう、知らない声だ。物凄く嫌な予感がする。

『残念ですが、犯人の要求を全面的に呑む現在のプランBにおいて、現在の上までは犯人の要求を呑むことがで

きません。22時40分までに東京駅に到着することは不可能です』

「そんな……！」

プランA失敗の結果がこれか。あまりにも大きな代償に視界が絶望で暗く染まる。

「しかし、それでは乗客や僕の身が危ないです」

『だから、今から言う指示に従って下さい。これは国交省の承認を得た室長命令です。北上駅通過後、ATCを開放。仙台まで列車の速度を360に上げて下さい』

「ATC開放……ですか！？ ふざけないで下さい！」

新幹線の運転を全くしたことがない自分からすると、ATC制御は最後の命綱みたいなものだ。

『ですが、他に方法が無いんです』

だとしても無茶苦茶だ。

『既にほかの列車は回避が完了していますし、CTCで列車の現在地を逐一確認しながら今後の運転指示を出します。我々としても苦渋の決断ですが、これは既決事項です。命令に従いなさい』

「……」

僕は必死になって他の方法を考えたが、時短の方法として速度向上以外に何も思いつかない。こうやって考えている間にも北上駅はどんどん迫ってくる。

「……復唱します。北上駅通過後、ATCを開放。仙台まで360に上げます。どうぞ」

『まもなく北上です。ATC開放の準備をしてください。スイッチを切れば開放扱いになります』

「了解」

線路の先を見つめると、駅が見えてきた。北上駅だ。猛烈な勢いで通過する。ホームの蛍光灯の明かりがうる

んで流れ星みたいだ。

「指令室、北上駅を通過しました。ATCを開放、360運転に移行します。どうぞ」

流れ星が窓から消える。

『北上駅、通過確認。ATCを開放して下さい』

「……了解」

ATCスイッチを切る。指が震えたが、実際に切つてしまえば呆気ないものだ。速度制限が解除される。

「ATC開放、制限360」

力を解き放たれた『こまち』は更に加速を始めた。

* * *

私達は一路東京駅へと向かっていった。車の中にはずつと、新幹線の現況を伝えるニュースが流れていた。

『……』「スーパーこまち20号」は北上駅を通過し、更に速度を上げています。空撮ヘリではとても追いつけません。東京駅には22時40分頃に到着の見込みです……』

「……東京駅に22時40分到着して……まさか、320キロを超えて走らせるとはな。指令所も相当切羽詰まってるな、こりゃあ」

釜田さんが呟く。車は相も変わらず渋滞にはまってる

つちもさつちもいかず、私はじりじりしていた。

「焦ることはねえさ、確氷。どの道今東京駅に着いたところ

で、俺達にできることは何もねえ」

「そうですけど……」

でもねえ……。

「でも、東京駅に行つてもどうするんですか？ どうせ私達

は入れませんよ？」

「まあ、掛け合うだけ掛け合つてみようぜ。石頭の警察

様によ。劔の妻で、お腹に子供がいるとでも言えば通し

てもらえるかもしれねえ」

叶ちゃんが私の隣で嘔き出した。釜田さんなりに緊張をほぐそうとしてくれているかもしれないが、冗談にしてももう少しマシなネタを用意してほしい。

「……まあ、今のは冗談として、俺達は新幹線に誰が乗っているかを知っている数少ない一般人だ。劔という運転士と知り合いだつてことをきちんと話せば、頑張れば

駅の敷地くらいには入れるかもしれねえ。警察の方も、俺と確氷と劔が知り合いだつてことは容易に調べがつくはずだ。トワイライトエクスプレスの事件の時、揃

つて警察からの聞き込みを受けたからな」

「でも、あれは秋田県警の話ですよ？ ここは東京です

から管轄は警視庁で全然違いますし……そんなにうまくいきますかね？」

「当たるも八卦当たらぬも八卦、つてとこだな。いや、

残念ながら俺達の方が分が悪い」

叶ちゃんの言葉に釜田さんは渋い顔をする。

「そもそもこんなテロ事件において、警察からするとわ

ざわざ一般人を事件現場に巻き込むメリットが皆無だか

らな。警察の方に強力なコネでもあれば、話は別なんだ

が……そんなもの、あるわけねえよな」

「あるとすれば劔さんだけですよね。あの人のおかげで

この間の事件も解決できたんですし」

その通りなんだけれど、その探偵が事件に巻き込まれ

ているからねえ……。結局、東京駅には行くだけ行って

みてあとはぶつつけ本番、うまくやれば構内に突入、と

なった。何たる無計画。

「にしても……まさか、劔が言っていた推理がほぼその

まま真相だったとはな。あの裁判」

釜田さんが話題を変えた。

「本当に、あんな時刻表トリックを組む人っているんで

すね。二時間ドラマの世界だけかと思つていました」

「でも、気になりますね……白雪が赤倉を殺害した後

に、誰かが現場に入った痕跡が見つかったなんて」

そういえば、裁判で誰かがそんなことを言っていた。確かに白雪は赤倉殺害を全面的に認めた。礼士さんが暴いたトリックそのままそっくりだ。でも、殺害後に現場に再侵入した可能性を追及されていたが、それは全面的に否定している。礼士さんも推理でそれについて指摘していた覚えはない。

「あの女の他に、赤倉を恨んでいた奴がいたつてことなのか？ 侵入つてことはまず間違いない赤倉に対して友好的じゃねえだろ？」

「知りませんよ」

叶ちゃんは怒つたように言うが、その目は痛そうに潤んでいる。釜田さんの元妻、白雪に婚約者を殺されたのだ、無理もない。……その婚約者もなかなかどうしてろくでもない男だつたのはまた別の話だ。

「しかも、痕跡だけあつても誰が入つたのかは特定できなかったつて、まるで以前の確氷の時のようじゃねえか？ 結局あの事件も迷宮入りだろ？」

「……まあ、私の時は部屋が丸々吹っ飛んだことも理由ですけれど。痕跡なんて跡形もなくて当然です」

「爆発つて……物騒ですね」

物騒なんてもものじゃない。文字通り死にかけた。さっきの礼士さんのように。そういえば、まだ叶ちゃんには何も話していなかった。霧島さんが事件を持ち込んできた

た辺りから内容をかいつまんで話してあげた。

「……その爆発に巻き込まれて、さっき話した入院に繋がつたのよ。我ながらよく入院だけで済んだわ」

そろそろ話を戻そう。

「それで、あなたは？ だいが立ち直った？」

叶ちゃんは私から顔を背けて暗い窓を覗いた。あの事件があった時は、もっと澄んだ暗い空をしていた。

「まあ……ぼちぼちです。今の仕事は楽しいですし」

「……なら、良かった」

「先輩が悩みの種ですけどね」

「はあ！？」

「おいおい、新人指導はしつかり頼むぜ、碓氷」

釜田さんがげらげらと笑う。叶ちゃんもこれだけ軽口が叩けるようになれば上等だろう。

「それで、先輩？ 結局、剣さんの告白を受け入れる気になっただけですか？」

「……ええ、多分」

「多分、かあ」

「多分、ですか。煮え切りませんねえ、先輩も。傍から見たら両想いなのは丸見えですよ」

叶ちゃんは呆れた声を上げた。釜田さんがフォローに走ってくれる。

「まあまあ、迷うことは悪いことじゃねえさ。お前はまだ若いんだから、いっぱい迷うといい」

「そんなんじゃないよ……」

私の呟きに二人は怪訝な表情を見せたが、それ以上何も言わなかった。

事件に気付かされた。私は礼士さんのことが好きだ。『多分』って言うって叶ちゃんにはお茶を濁したが、そんなことはない。あの人への想いはもう揺るがない。

でも、私があの人に相応しいかどうか、あの人を幸せにできるかどうか、……その自信は未だに無かった。

そして、私の想いが受け入れられても、私はそれに見合う女ではない。幸せになるだなんて、他人の幸せを奪

っておきながら許されるものではない。おこがましいし、背負うべき不幸から目を背けることになる。さっきの叶ちゃんの言葉は、それはやましい過去を持つ私には届かないものだ。

それなのに私は、幸せを追い求めようとする本心に従ってしまった。

その幸せの終わりからは逃げられない。

自分の過去、自分の罪、それに目をつむってあの人との未来を追い続けることなんて、私にはできない。

でも、それは私の本心の全てではない。

私は怖くて逃げていたのかもしれない。私が本当に幸せを追い求めるなら、過去に蓋をして生きるしかない。

逆に、過去と向き合う生き方をしたら。……礼士さんに私の過去を知られ、一巻の終わりだ。

その終わりの始まりが怖くて、礼士さんへの返事を先延ばししていたのだろうか。そして今度は、自分の過去から逃げようとしている。

私は卑怯者だ。

頭の中で、がんがんと私を責め立てる声が反響する。

……お前は誰も幸せにできない。誰もお前みたいな不幸をまき散らすゴミなんか求めていねえんだよ。

……お前が幸せになる？ 馬鹿か、クソ女。

でも、今はとにかく、一刻も早くあの人に会いたかった。……考えたくはないが、手遅れにならないうちに。

……口答えすんな、ゴミ！

「……んばい？ 先輩？」

叶ちゃんの声でまどろみから覚醒する。酷い、そのまま昔ではない夢だ。

「大丈夫ですか？ うなされていましたよ？」

「……ええ、大丈夫よ。大丈夫」

半ば自分に無理矢理言い聞かせているようだった。東京駅まではまだ時間がかかる。

* * *

指令室のモニターには、一ノ関駅からの映像が送られてきている。僕と大勢の指令員が固唾を飲んでそれを見つめている。

まさしく、一瞬。茜い新幹線が爆速で通り過ぎた。

『第3020M列車、一ノ関駅通過です』

とんでもないペースで東京に向かってきている。列車から電話が来た。室長が出る。

「こちら指令室。室長の上空だ」

『こちら第3020M列車、車掌の峠です。先程の盛岡駅での爆発による被害状況の報告です。走行機器に今のところ問題は見られません。11号車山側ドア破損、肉眼で歪みが確認されました。11号車山側側窓、2枚割れ、3枚ひび入り……』

そこから延々と報告が続く。窓割れくらいで済んだのは幸運と言わなければならないだろうか？ これくらいで動じなくなってきたら自分を見省みると、感覚が麻痺してきているのだろうか。

警部は警部でせわしなく電話をしている。

『盛岡駅の被害状況報告です。死者は出ませんでした。機動隊員二人が骨折でそれぞれ重傷、爆風の直撃を受けて吹き飛ばされたとのことです。17名が軽傷。火傷や煙を吸い込んだ、などの怪我が確認されています。死者が出なかったのは奇跡と言っているでしょう』

「そうですか……」

八雲警部が岩手県警の人と電話をしている。とりあえず死者が出なかったのは本当に良かった。『また、爆弾に使われている爆発物がおおむね特定でき

ました。閃光や煙などの特徴から、工事現場などで使用されるダイナマイトだと考えられます」

「ダイナマイト？」

『はい。現在、出どころを調べています。ですが、十中八九の確率で秋田の廃病院から盗まれたものでしょうね。舞鶴はその病院の解体工事を受け持つ柿崎建工の社員です。とにかく、犯人が持つ爆弾は本物であり、ハツタリではなかったということですね』

その後、会話は室長と盛岡駅の担当者ものに移行した。盛岡駅の消火活動は終了したようだが、被害は甚大らしい。派手にやってくれた。

電話を終えた八雲警部は警察関係者を集めて話を始めた。聞き耳を立ててみると、犯人とどう交渉するかを検討しているようだ。いや、さつき失敗したばかりやろ。

「舞鶴が素直に我々警察との対話に応じるとは思えません。それでもやるんですか？」

「こうなった以上、我々にできるのは犯人の目的を暴いてそれを失敗に終わらせることよ。そのためにはまず、犯人の要求を聞き出さないといけないでしょ？」

「でしょ？ ……って、それができたら苦労しませんよ。そんな簡単に犯人が目的を喋るとは思えません」

沖刑事は呆れた声を出した。珍しくまともなことを言っている。

「手がかりの少しくらい得られるでしょう」

「だから、警察だと名乗って犯人が応じてくれるのかって話ですよ」

八雲警部は少し考えこむ。そして僕の方を見た。

「霧島さん」

「……はい？」

「少しいですか？」

ちつとも良くない。良くないのだが、渋々と近寄る。

「少し協力して欲しいことがあるんです」

勘弁してくれ、頼むから。

「……何ですか？」

「これから列車にいる犯人の舞鶴に、事件の目的を聞きこむつもりでいます」

「そうですか。上手くいくといいですね」

素っ気ない態度を決め込む。

「ですが、私達警察が電話をかけて、犯人が馬鹿正直に答えるとは思えません。そこで霧島さん、あなたに犯人との連絡をやってほしいんです」

「お断りします。僕は警察ではなく、国交省の人間です。そちらの仕事を代わりに担う筋合いはありません」

やっぱりろくな頼みではなかった。

「ですが、この場において適役はあなただけです」

「犯人交渉なんてやったことはありませんよ。警察は犯罪を取り締まるのが仕事でしょう。自分の責務を果たしたらどうですか」

「その職務を果たすために協力をお願いしているんです。犯人は先程のプランAの件や、それ以前にも警察とのトラブルがありました。ここで警察が再度接触を試みるのは成果が期待できません」

「そういえば言っていましたね、舞鶴は昨日警察に来た、と。トラブルってその話ですよ？ だから警察関係者ではない僕に犯人との接触を行ってほしい、というわけですか」

でもどうして僕が。腑に落ちない。

「事件解決のためです。私としても、無茶ぶりだということでは理解しています。しかし、警察が出るとかえってこじれる案件です」

警察が引つ掻き回して色々こじらせているのは今に始まったことではないやろに。

「……これ以上あなたの話に反対しても時間の無駄ですね。犯人に話したいこともありますし、ここは僕が引き受けましょうか」

ここで言い争っている場合ではない。どうせ僕はクビだし、こうなったらもうヤケだ。

「助かります」

「その代わり、情報を何も引き出せなくても僕の責任ではありません。素人に犯人との交渉をやらせたあなた方警察の責任です。それは明確にさせてもらいますよ。トカゲの尻尾にされるのはごめんなので」

釘を刺しておく。言質を取らずに適当な言い逃れをされたらたまったもんじゃない。クビになるならこいつらも道連れだ。

「それはそうと、八雲警部」

沖刑事が話しかける。

「本庁から連絡が入りました。舞鶴について庁内のサーバーを調べたところ、過去に東京の警察に来たことがありました」

「ええ？ 昨日の秋田だけじゃないの？」

沖刑事は手帳を開き、メモを目でなぞる。

「詳細は追って連絡することですが、警察には事件や事故ではなく、相談として来ていますね。ざっくり言うと、財産関係のトラブルのようです。警察は証拠不十分と民事不介入を理由にこの件にはほとんど立ち入っていません。去年十月のことです」

「詳細な情報が必要ね。すぐに」

「もうしばらくして、本庁から詳細な内容が電話される予定です。柿崎建工東京支社とも連絡を急いでいます」

「上はいつも遅いんだから……頭も固いし」
お前が言うなよ……。

「しかし警部……本当にこのまま列車を東京まで向かわせるんですか？ 完全に犯人の要求通りに？」

「ええ。他に手を打ちようがないもの」

沖刑事の不安げな問いへの答えはにべもない。

「ですが、こちらとしても何も手を打たない訳には……利用者でゴった返している状態で列車を駅に向かわせるわけにはいきませんよ」

「ああ、そのことね。その辺は大丈夫。東京駅に爆発物処理班と公安の方々を配置、遅くとも22時には駅を全面封鎖します。列車やバスの乗り入れも一時的に全面禁止にします。さらに、沿線の各県警及び自治体に緊急連絡。安全の為、列車が駅を通過する前にその駅の利用客を全て避難させます」

至極妥当な判断だ。無関係な一般人をこれ以上事件に巻き込むわけにはいかない。

「え？ でも、他の路線の邪魔をするなって……その要求に反していることがばれたらどうするんですか？」

「東京駅のホームには無人の列車を多数配置してもらいます。逮捕するまでの僅かな時間なら、それで列車が通常通り動いていると誤魔化せるでしょう。逮捕してしまえば後はこつちのものよ。大空室長、まずは直ちに列車が走行する区間の駅から利用客、駅員を避難させてください。それと、東京駅に無人の列車の配置を。他社への協力要請は政府を通じて行います」

「無関係の列車を止めるなど要求している以上、駅の封鎖をして列車が利用できないことが犯人にばれたらヤバいです。乗客が利用できない状況で列車の運行を求めますがありませんから。バレないようにやって下さい。」

一般人によるネットへの情報拡散も抑えて、なおかつ犯人が受信できないようにしないとダメですね」

僕は八雲警部の言葉に付け加え、続ける。

「八雲警部、やるからにはこの計画は極秘裏にやらないといけません。犯人に計画が知れたら、列車は吹っ飛ぶと考えて下さい」

「至急、情報統制をかけます」

「頼みましたよ」

沖刑事が室長に向き直る。

「室長、すぐに準備を」

「分かりました。……まずは仙台か。仙台と東京駅間の各駅に緊急連絡、直ちに利用客と駅員を避難させろ！ 鉄道警備隊にも協力要請を。急げ！」

指令室の騒々しさにより一層の拍車がかかった。

「解放された乗客乗務員は？」

「駅舎の外まで迅速に誘導、必要に応じて事情聴取よ」

「そんな上手くいくもんですかね」

警察コンビの会話に僕は不安を隠せなかった

* * *

『スーパーこまち20号』は、一路東京へ向けて南下していた。現在の速度は既に時速360キロ弱だ。列車はミシミシガタガタと嫌な横揺れを起こし、モーターの叫びは今までになく大きい。普段から運転している列車の真の力を目の当たりにし、僕は未だに悪い夢でも見ているような気がしていた。

「この調子なら、どうにか22時40分までには終点に着きそうですよ。やってくれましたね」

僕は堅い口調で後ろの犯人に言った。

「ふん……」

犯人……舞鶴はぼつりとそれだけ言った。三段腹に乗

せたタブレットに映し出されている、車内の監視カメラの映像から目を離さない。

電話が鳴った。受話器を取る。

「第3020M運転士、剣です。どうぞ」

『こちら指令室。霧島です。犯人はまだ運転室にいますか？』

「ええ。……どうかしたんですか？」

『犯人に代わって下さい。話があります』

それは警察の仕事ではないのだろうか？

「了解。犯人に代わります。どうぞ」

『頼みます』

受話器の向こう側で深呼吸の音がした。

「舞鶴さん。電話です。国交省の人です」

「国交省？」

舞鶴の怪訝な声は、気の狂ったような風切り音の中でもよく通る。受話器を手渡した。

「……もしもし、舞鶴です」

『初めまして。独立行政法人・運輸安全委員会のメンバー、霧島と申します。国交省の者と思ってくれて差し支えありません。現状報告です』

「なぜあなたが説明役を？ こういう事は普通警察がやる事だと思っが」

『僕ではご不満ですか？』

「いや、信用ならない警察よりはマシだ」

プランAの失策のことだろう。結局は犯人を意固地にさせただけのようだ。

『それは光栄ですね』

「それで？ 俺の要求は通ったのか？」

『基本的には、です』

「……というところ？」

列車はくりこま高原駅を通過する。窓の外が一瞬明るくなり、また暗転する。

『まず、時間。ひよつとしたら運転士の方から何か説明があったかもしれませんけど、22時40分までには東京に着きそうです。次に、あなたの逮捕。既に警察と公安、及び爆発物処理班が東京駅に向かっています』

「他の乗客の邪魔はしないだろうな？」

『もちろんです。ただ、この事件は既に世間に知れ渡っています。乗客の誰かがマスクミに流したようですね。多くの人が自発的に東京駅を避けられます』

「それは関係ない」

『……それで、問題はここからです。他路線の運行の邪魔をしない。これについてです』

「何だ？」

舞鶴の声は一気に陰しくなった。

『現在、舞鶴さんが乗っている『スーパードライマール20号』を時間内に東京駅に着かせる為に、東北・山形・秋田・上越・長野の各新幹線は部分運休、あるいは大幅にダイヤが乱れています。ご存じでしょうが、現在あなたを乗せて走っている東北新幹線は、福島から山形新幹線と、大宮からは上越新幹線、長野新幹線と同じ線路を使います。他の列車が『スーパードライマール20号』の邪魔にならないようにこのような措置をとっています』

「……そうか。分かった、そういう事なら妥協しよう。だが、東海道新幹線などの線路を共用していない路線については一切手を出すな」

『ええ。ただし、人身事故などや天災などの予期せぬ事態については約束できません。申し訳ありませんが、そこはご了承して頂くほかにありません』

悔しそうな表情をして謝罪の言葉を発する霧島さんの

姿が浮かぶ。犯人相手に頭など下げたくはないだろう。

「……まあ、いいだろう」

『要求についてはこれだけですか？』

「乗客に一切手出しをしない事も忘れずに。身元確認も含めて」

『無論です。警察にも伝えておきます』

「なら、これで全部だ」

『ええ。……あ、あの、どうしてこんなことを？』

「切るぞ。どうせ横に警察がいるんだろ」

『えっ……？ あっ、いや、おい！ ちよつと……』

舞鶴は電話を切る。僕はそつとため息をついた。

* * *

僕は受話器を置き、首を横に振った。横では警視庁コンビが天を仰いでいる。

「あくあ……どうすんですか、これ？」

二人を睨む。沖刑事が縮み上がった。

『どうしてこんなことを？』って、いくら何でもストリートが過ぎますよ」

「文句あんのか。やれって言うたのはお前らやろ」

僕は凄みを効かせた声で八雲警部に詰め寄る。

「まあまあ……犯人には当初から我々と対話を行う意思は無かったのでしょうか？」

「さあ……そんなの、国交省の僕が知るわけじゃないでしょう？ ここから先は国交省なんかに甘えないで、あなた方だけで粘り強くやるしかないでしょうね。国交省の伝達事項は全て伝えましたし、僕の方からはもう犯人に用はありません。まあ、もし僕がジャック犯なら、秋田ですげなく追い返されておいて今更話したいと言われてもガン無視しますがね」

沖刑事の質問を10倍にして返してやる。

「舞鶴に事情を聞くのはしばらく無理ね……本庁や秋田県警から何か情報は来っていないの？」

「いや、まだです。柿崎建工東京支社で、舞鶴の上司にあたる三朝という人とも連絡を取ろうとしているんですが、これもまだです」

「全く……どういつもこいつもノロマなんだから」

苛立ちは分かるが、同情する気にはなれない。

そこに、大空室長が息を切らしながら走ってきた。

「現在、列車は古川駅を通過したところです」

「ヤバいですね。次は仙台ですか」

僕の声にさらに陰が混じる。

「余裕時分は？」

「現状ではどうにか1分半つとところですよ。運転士は素人ですから、不慣れで手際の悪い操作によるロスタイムがあります。でもまあ、初めてかつこんな状況下では上出来と言えます」

手元のタブレットをちらりと見て答える。

「終点まで保ちますかね？」

「これくらいで壊れるほどヤワではないと思いますが、どうでしょう。脱線はこれくらいのスピードではとてもしません。機器類が少し心配ですね……ここまで全開で走らせたことではないので、どれぐらいのダメージを足回りに蓄積しているのか未知数です」

「一体何の話をしているんですか！？」

堪えきれなくなった沖刑事が首を突っ込んできた。

「アクセル全開で終点まで400キロ以上突っ走って、列車がつかどうかの心配をしゅうんです」

苛立ちを必死に抑えて雑な説明する。少し黙ってる。

「犯人が指定した時間には間に合いますか？」

八雲警部の顔は陰しい。

「このまま行けば、どうか。列車の故障とか、天災とかが無い限りは」

「……祈りましょう」

室長の言葉に、僕は忌々しげに呟いた。

* * *

運転室にいる僕達は、静かだった。何も喋らない。響くのは、異常に大きな風切り音とモーターの叫びだけだった。普段は新幹線に乗らず、ましてや運転することも無い。そんな僕にでもこの不気味な二重奏が異常なものだと容易に分かる。

「間もなく仙台駅構内に入る。EB用意。タイミングは指示する。減速、70。どうぞ」

「了解。どうぞ」

そのまま係員が秒読みを始めた。背後でEBつて何ですか、非常ブレーキのことですよ、と素人めいた会話が漏れ聞こえた。

「3、2、1、EB投入！」

僕はEBをかけ、大きく警笛を鳴らす。全身を襲うシヨックにも慣れきってしまった。

遠心力を感じ、流れゆく景色がみるみるうちに遅くなる。悲鳴のような軋みを車輪が発する。速度計が70を指したところでEB解除、惰性走行に切り替えた。

「制限、70、よし」

ようやく慣れた速度に戻り、少しほっとする。視界が明るくなり、駅のホームに突入する。普段ならまだ人の姿が見えるだろうが、今日の仙台駅はがらんとしている。人っ子一人いなかった。

「仙台、21時15分36秒。9分24秒、早発。指令室、仙台駅通過、完了です。どうぞ」

「構内を出たら320に加速。ATCは開放のまま。ど

うぞ」

「了解。制限、320、よし。進行」

一気に加速させる。暗い空に鋭く稲妻が光った。

第三章

指令所は混沌を極めていた。

八雲警部は誰かに電話をかけていた。やっと相手が出たとみえて、挨拶をしている。

「こんばんは。秋田県警の矢野です」

「警視庁の八雲です。本題に入りましょう。舞鶴は何の用事でそちらの警察に顔を出してたんですか？」

「質問し終えるや否や、スマホのスピーカー音量を上げた。相手が何を言っているのが良く聞こえる。

「最初から順を追って説明しましょう。昨夜の事です。

舞鶴は秋田駅西口の交番にきました。署員の話では素面だったそうだが、話の内容があまりにも荒唐無稽で、とても信用に足らないものだったそうです」

「それで？」

「何でも、人が殺されるとかって騒いだそうです」

「殺される……？ 誰が？ 誰に？」

「分かりません。ミササ、フジカワなどと人名らしき言葉を連呼していたそうです。しかし、これでは下の名前なども分からず、個人の特定は不可能です。ただでさえ荒唐無稽な話の上に、言っている事も証拠も無く要領を得ず、単なるいたずらと捉えてしまったようです。話にならないため署員がそのまま追い返したそうなんです。

『この無能が！』って怒鳴られたらしいですが』

聞く限りでは署員はとんだとばつちりだったようだ。

「はあ……そうですか。それが秋田駅署で舞鶴が警察不信になったきっかけですかね。他には何か？」

『うわ言のように『E6』と繰り返していたそうです』

『E6』……？』

「恐らく、例の『スーパーこまち20号』に使われているE6系新幹線車両の事でしよう」

僕は首をかしげる八雲警部にそっと耳打ちした。

「後は？」

『それつきりですな。あと、舞鶴の持つ爆発物の出所が掴めました。建物の解体などに使うダイナマイトの一部が秋田市中央総合病院旧病棟の解体現場から盗まれました。柿崎建工が建て替え業務を請け負っていたものです。被害届が出されたのでもしやと思えば舞鶴が持つ爆発物の量と照らし合わせると……ほぼ一致しています』

さつき岩手県警の人が言っていたことと一致する。おい、柿崎建工。危険物の管理体制はどうなってんだ。

「……そうですか。確か、舞鶴は柿崎建工の社員で、秋田には出張で来ていたとか。同行した上司や同僚の方と

かに話は聞かなかったんですか？」

『それなのですが……不明です』

「え？ どういうことですか？」

警部の声のトーンが跳ね上がった。

『三朝航大っていう男で現在の舞鶴の上司ですが、今どこにいるのか分かります。現在、捜査中です』

「三朝……さつきの、ミササですか？」

『そう考えるのが自然でしょうな。舞鶴が秋田駅署に来た時にちゃんと話を聞いていればはつきりしたはずですが、舞鶴が警察署に駆け込んだ時、その時の担当巡査は舞鶴が何者かをちゃんと知ることも無く、まし

てや上司の名前を把握なんてしていません。三朝のことに思い至ったのは、事件発生後のことでした』

「で、その三朝はどこに？ 不明ってまさか……」

『17時に八郎瀉の取引先を出て、18時50分に秋田駅を出る高速バスで仙台に向かう予定だったとのことですが。仙台では明日10時から商談があるとのことなので、どんなに遅くともそこには現れると思いますかね』
八郎瀉……確か、秋田市から少し北に行ったところにある。干拓で有名な場所だ。

「その高速バスですが、乗客の中に三朝がいるかどうかの確認は取ったんですか？」

『ええ。宮城県警にも協力をして貰い、当該のバスを高速道路上で捕縛。近くのパーキングエリアで乗客を調べたものの三朝は乗っていませんでした。途中の道で渋滞や迂回などありませんでしたから、時間的に乗り遅れたとは考えられません。いずれにせよ、何らかの形で今回の事件に関連している可能性は高いです。姿をくらますなんて。秋田を出られたら厄介です』

「厄介？」

『ええ。言うまでもありませんが、搜索範囲が一気に全国に広がりますからな。三朝は運転免許を持っていないために自家用車やレンタカーなどで姿をくらますのは不可能ですが、他にもいくらでも方法はあります』
「……八郎瀉から秋田駅まで所要時間はどれくらいですか？」

『ええと……飛ばせば40分で着きます。今日は道路事情も良好でした』

「近くに空港などは？」

『秋田空港まで車で飛ばして50分、大館能代空港までほんなに頑張っても優に1時間はかかります。その空

港を出る最終便である全日空790便17時45分発には八郎瀉を17時に出るのでは間に合いません。秋田空港の方も例の台風の影響で航空ダイヤが乱れていたようですが。三朝が飛行機でどこかに行った、とでも言うのですか？』

「可能性の一つを指摘しただけです。八郎瀉での取引先からは何か情報は得られましたか？」

質問攻めにする八雲警部に対し、電話先の矢野警部は丁寧な答えていく。だからといって、有力な情報ばかりというわけではなかった。

『いや、三朝と舞鶴の様子や関係について詳細に尋ねたのですが……舞鶴はあまり落ち着きが無かったみたいですが。逆に、三朝は特に変わった様子も無さげだったそうです。だから三朝が消えた理由が余計に分からないんです』

「二人が言い争っていた、などということも無かったんですね？」

『そのようです。客先ですしね』

舞鶴に落ち着きが無かった……こんな大事件を起こす前となったら落ち着いてもいられないかもしれない。でも、三朝のことはよく掴めない。

八雲警部はその後少し電話をしていたが、やがてお礼を言つて電話を切る。スマホを下ろした。すると、今度は沖刑事のスマホが鳴り出した。

「はい、沖です……はい、はい、ええ……何ですって？ はい、はい……そうですか。伝えておきます。引き続き捜査をお願いします」

沖刑事はスマホを下ろす。

「どうしたの？」

「警視庁からでした。舞鶴について新たな証言です。暫

定的なものです」

「内容は？」

「舞鶴は上司と女性関係で揉めていたようなんです。藤川という女です。今回の件との関係は不明ですが」

「もしや……さっきの秋田出張の？」

「名前はまだ不明ですが……恐らく、藤川と三朝のことと思われれます」

「……列車に電話を。三朝と藤川の件も含めてもう一度舞鶴に訊きましょう」

警部はつかつかと電話に歩み寄った。

* * *

「……であーつ、一体全体どうなつてんだよ、今日の首都高は！」

釜田さんが運転席でキレる。渋滞続きで遅々として車列が進まない。止まることができない新幹線とはえらい違いだ。

「この調子じゃ『あけぼの』には間に合いませんね」

「そうね。まあ、どうせ東京駅で礼士さんを待つから……」

「ん？ ちょっと待って。となると……」

「叶ちゃん。宿、どうする？」

「……あ」

とにかく東京駅に行くことばかりに考えが走って、宿のことまでは頭が回っていなかった。

「万一に備えて予備の着替えとかはあるんだろ？」

「ええ。台風が来る話は前からニュースになっていました。足止めの準備はばっちりです。宿以外は」

「俺もどこかに部屋を取って、一泊していくかな……」

「で、結局どうすんのよ？」

「まあ、どこかに部屋の一つや二つはあるでしょう。別

に丸の内じゃなくてもいいでしょう」

「丸の内なあ……」

釜田さんは少し薄くなったつむじの辺りをぼりぼりと掻いた。私は少し考えて、あることが思い浮かんだ。

「……東京駅のステーションホテルとかどうですか？」

「ステーションホテル？」

叶ちゃんが素っ頓狂な声を上げる。

「そんな、東京駅は閉鎖されるんですよ？」

「だからよ。爆弾魔が迫ってくるホテルなんて今からキヤンセル続きでがら空きよ。それに、一度泊まってみたかったし」

「一度泊まってみたかった、って……」

叶ちゃんの呆れた表情が、対向車のライトに浮かび上がる。

「東京駅が閉鎖されることは、ホテルも今日は臨時休業になるはずですよ」

「でも、犯人は列車が東京駅にちゃんと着いたら大人しく逮捕されることになっているんだろ？ それさえちゃんと済んだら駅を閉鎖する理由はねえ。ホテルも営業再開するんじゃないかねえか？」

二人は私の言葉に考え込む。

「どうでしょうね、先輩が言うほど簡単じゃないと思いますよ。駅を閉鎖するつてことは、ホテルスタッフもいなくなっているはずですよ。そう簡単に営業を再開できるとは思えません」

寝台列車とはいえ、一応ホテルで働いていた叶ちゃんの言葉は説得力がある。

「……いや、ありかもしれねえぞ」

今度は釜田さんが口を開く。

「犯人の要求を呑む以上、剣が運転してる列車は途中の

停車駅に悠長に停まる暇はねえはずだ。となると、東京まで乗り通す客はともかくとして、途中の盛岡や仙台で降りる予定だった乗客は用のねえ東京まで連れ出されることになる。しかもこんな夜遅くにだ。本来の目的地に戻るのには時間的に無理がある。東京で一泊させる場所をJRが用意するとしたら、東京駅のステーションホテルが一番妥当なところだろ。大和の言う通り、駅を閉鎖したらホテルももぬけの殻だ。つてことは逆に、駅の閉鎖を解除したら帰りに困る乗客を受け入れる場所があるつてことだ。駄目元で俺達も部屋を頼んでみてもいいかもしれねえな」

……一理ある、のかな？

釜田さんがアクセルを踏み、車はゆっくりと走り出した。ようやく渋滞が流れ出したようだ。

「ま、行くだけ行ってみようぜ。そもそも東京駅に入れるかどうかすら怪しいんだ。どうせ駄目で元々だ」

* * *

運転室には僕と犯人しかいなかったが、峠さんが戻ってきた。彼女は発狂寸前の乗客をなだめすかすのに精一杯で憔悴している。乗客も乗務員もへばつてきている。部屋には緊張感が漂っていた。警察が犯人に電話をかけてきたからだ。峠さんが恐る恐る受話器を渡す。

「何だ？」
舞鶴は不快感を隠さない。

「質問です。あなたの目的は何なんですか？」
「警察か。はっ、何を今更。俺の話信じなかったのに、今更話す訳が無いだろ」

『秋田駅署での事は申し訳なかったわ』
電話の向こうの相手は犯人の冷笑にもめげない。それにしても、秋田駅署？ 何の話だろうか。

「秋田駅署の件、な……分かってないようだな。もう手遅れなんだよ。調べたいなら勝手にすればいい。俺は協力しない」

「手遅れ？ あなた、人が殺されるって言っていたそうね。その人はもう助からないって意味？ 三朝や藤川と何の関係があるの？」

「お前らに教えて何になる？」

「犯人を捕まえる」

三朝？ 藤川？ 殺される？

「助けないのか」

「助からないじゃ助けようがないわ」

「偉そうに聞き直るな。だから昨日……いや、その前も俺の話を聞いておくべきだったんだ。俺が警察に来た時、俺のことを助けるべきだったんだ」

「質問に答えて。何が起きているの？ または、何が起ころうとしているの？」

「この場合の一番正確な質問は、『何が起ころうとしたのか』だな」

「御託はいいから早く教えなさい」

「断る。お前達は信用ならない。さっきの盛岡駅の件と

い、秋田駅署の件といい、以前の10月の件といい……

……。それに、俺は手遅れにしたいんだよ」

手遅れにしたい……？

「要求には答えているわ。これ以上何を望むの？」

舞鶴は乱暴に電話を切った。列車が宇都宮を過ぎる頃だ。制限速度に沿って僕は減速をかける。

「制限、275、よし」

僕は一瞬の静寂を突く。

「舞鶴さん」

心の内を隠し、何気なく呼ぶ。

「何だ？」

「東京駅に着いたら、僕らを解放するって約束して下さい。僕らにはやりたい事がたくさんあるんです。……会いたい人がたくさんいるんです」

頭の中に碓氷さんの笑顔が煌めく。あの人の返事だけははつきりさせておきたい。

「だから、こんなところでみすみす死ぬわけにはいかなんですよ。僕には大切な人がいるんです」

暗い窓ガラスに舞鶴の当惑の表情が映りこんだ。

「それは警察にも話した通りだ」

「信用できると思いますか？」

心の芯に沸く怒りを込める。

「剣さん、その辺にしておいた方が……」

「お前、好きな人がいるのか」

峠さんの声が遮られ、不愉快そうな犯人の声が届く。

「それだけが理由ではありませんけどね。僕が死んだら、その人は悲しみます。それは嫌です」

舞鶴の声が低くなった。

「他人を悲しませたくない、か。いいご身分だな、誰かに好かれてるなんて」

「そういうあなたは誰かに好かれるだけの努力をしてきたんですか？」

「うるさい！」

舞鶴はがばりと立ち上がり、僕の喉元に爆弾を突きつける。峠さんが小さく悲鳴を上げた。

「俺は裏切られたんだよ……何も知らずに知った口をきくな。殺すぞ」

「おっと、僕を殺したら誰がどうやってこの列車を東京まで走らせるんですか？」

僅かに喉元から爆弾が離れる。元々腹に据えかねてい

たが、さらに無茶苦茶に腹が立つてきた。

「それに、走行中に爆破したらどうなるか分かっていいますか？ 新幹線の頭脳である運転室は滅茶苦茶、架線も切れますよ。どのみちあなたの要求は満たされない」

さらにじりじりと首元から爆弾が離れる。

「何も知らないのはあなたなんじゃないんですか？ この列車のことも、藤川とか三朝とやらのことも」

舞鶴は怒りに打ち震えながらも後ずさる。

「何も知らずに知った口をきかないで下さい。特に、この列車を走らせているのは僕です。あなたではない」

とうとう犯人は大人しく席に戻ったが、背後から強く僕を凝視している。

「約束してくれませんか？ 僕達を解放しろ」

僕は声に渾身の怒気を孕ませる。

返事は無かった。

＊ ＊ ＊

「三朝の行方はどうなの？」

八雲警部が沖刑事に尋ねた。

「それが、柿崎建工本社の方にも問い合わせたのですが……全然把握していないそうなんです」

「そう……」

「まさか、『スーパードラゴン20号』に乗っているなんてことはないでしょうね？」

僕の何の気無しに言った言葉だが、八雲警部はかなり真剣に考えていたようだ。

「実はその可能性も考えているんです。ですが、舞鶴が人質になって乗客の氏名、身分を一切明かさないので三朝が列車に乗っているかどうかは全くの不明です。乗客の通信機器も全部舞鶴が回収してしまいました。乗客が東京駅で解放され次第、そのまま野放しにはせず

に事情聴取も兼ねて名簿は作りますし、その時には判明すると思えますが」

八雲警部は肥えた胸と腹の前で腕組みをした。

「それに、乗客との接触があった場合には車掌が何かしらの報告をしてくるはずですよ。それが何も無いってことは……初めから三朝が列車に乗っていないか、それとも犯人が情報を抑えているのか」

警部はそこから、もう一つの可能性に触れた。これは僕も思い至らなかったことだ。

「三朝が既に殺されている可能性？」

「警察が血眼になって探しているのに、何も三朝に関する手がかりが出てこないというのは異常です。となると、三朝は全く身動きが取れない状況にある、もしくは三朝は既に返事をできない状態になっている、そう考えても妥当性があります」

「でも、それじゃ舞鶴が新幹線に乗ったのと何の関係があるんですか？ 舞鶴と三朝、別個の事件にそれぞれが関わると言い切るにはあまりにも出来すぎています。警部の言う三朝殺害案を採用するなら、舞鶴は何らかの形で犯人サイドにいます。その舞鶴の要求は『自分を逮捕すること』ですよ？ 三朝を殺害しておいて逮捕しろ？ 矛盾します」

八雲警部は僕の指摘に詰まった。

「あの、警部。三朝の件では、もう一つ不審な事が」

「え？」

沖刑事の続きの言葉に警部も僕も振り返る。

「ここ最近、三朝は舞鶴と女性関係で揉めていたそうなんです。本庁経由で柿崎建工東京支社から連絡が来ています」

「誰？ 何があったの？」

「柿崎建工の担当者と代わります」

沖刑事のスマホが八雲警部の手に渡った。すかさずピーカー設定をかける。

「お電話代わりました。警視庁の八雲です」

『柿崎建工東京支社、建設課の能登と申します。舞鶴の同僚、三朝の部下に当たります』

「単刀直入に伺いますが、舞鶴と三朝が女性関係で揉めていたというのはどういう事情があったんですか？」

『元々、東京支社には舞鶴、三朝、それに藤川という女がいました。俺はその三人の同期に当たります。発端は社内恋愛でした』

「社内恋愛？ 舞鶴と三朝が女性関係で揉めていた、というのそれが発端ですか？」

『はい。そのカッブルが舞鶴と藤川でした。藤川は建設課のマドンナ的存在で、はつきり言って藤川がなぜ舞鶴を選んだのか理解に苦しみました。でも、とにかく二人は恋仲になったんです……と言えば聞こえは良いですが、実際は舞鶴が藤川にぞっこんだったんです。ブランド物とか色々和金をつぎ込んで貢いでいました。それはもう病的にね』

悪女に引つかかったんか……にしても、あまりにも典型的な残念な恋愛だ。

「それで？」

『周囲の人は舞鶴に忠告したりしましたが、舞鶴は聞く耳を持ちませんでした。しかし、この一方的な恋愛はあっさりと終わります。藤川が舞鶴を捨て、三朝とくっついたんです。舞鶴は悲嘆に暮れますが、藤川に対して怒りを露にするのにそう時間はかかりませんでした。藤川相手にせめて自分が貢いだ金品くらいは取り戻そうと動き出したんです。去年の10月頃のことでした』

……あれ？ 舞鶴が東京で警察に相談したのってその時期じゃなかったか？ 八雲警部も思い当たったようで、訝しむような表情をした。

「……それで？」

『舞鶴は警視庁に相談を持ち掛けたようですが、証拠不十分と民事不介入であっけなく追い返されたそうです。……あんなに息巻いていたのに、嘘のように静かになりましたよ。人が変わりました。ですが、そんな舞鶴に追い打ちをかけるような事実が明らかになります。藤川は元々から三朝と手を組んで、舞鶴に金品を貢がせる目的で彼に近付いたんです』

それはまた随分と下衆やな。
『もう少し分かりやすく話すと、藤川は三朝と最初からデキていたんです。そんな折、舞鶴を藤川にぞっこんにさせ、貢がせ、ほとぼりが冷めたら舞鶴を捨てる算段だったんですよ、あの二人は』

ここで三朝が出てくるのか。自分を嵌めた相手が直属の上司というのは……いくら何でもエグすぎる。さっき警部が言っていた三朝殺害案、十分な動機はありそうだ。でも、それならなぜここまで事件が進行してから藤川の名前がここでやっと登場したのだろうか？ 三朝も十分恨むに値する。でも、自分を直接裏切った藤川への怒りのほうがもっと大きいのではないだろうか？

「……そんな情報、どこから仕入れたんですか？」
『向こうから飛び込んだんですよ。藤川と三朝の破局というかたちでね』

さらりと衝撃的な情報が飛び込んできた。
「破局!？」

『舞鶴から巻き上げた財産があったでしょう？ それの配分で揉めたみたいなんです。藤川は『あの醜男に嫌々

抱かれまでしたのに、バイト代はたったこれっぽっちなの!？」と三朝を責め立てていました。お互いに掴みかからんばかりの勢いでしたよ。この言い争いで俺は三朝と藤川の関係を知ったんです。かなり大声での言い争いでしたし、この噂は社内にあつという間に広がりました。今年の3月頃のことでした』

何と言うか、浅はかだ。バイト代扱いはされる舞鶴がさすがに不憫だ。

「それについて舞鶴は何かアクションを起こしましたか？ どんな些細なことでもいいんです」

『確かに経緯が経緯だけに好奇の目に晒されました。ですが、彼が何か行動を起こしたかと言われると疑問です。思い当たるものはありませんし、当の本人は未練こそ残しつつ消し炭のようになっていました。何かをする行動力があつたとは考えられません。最近になってようやく立ち直ってきた感じでしたが。そんな折、この4月のことです。三朝が同期の中でもい一番昇進を果たします。優秀でしたからね。彼は舞鶴や藤川の上司となりました。で、5月。藤川は配置転換に伴い突然の転動を言い渡されました』

5月の転動……新年度になって早々の転動なんて、怪しんでくれと言っているようなものだ。

「あまりにもタイミングが良すぎますね……偶然、ではないのでしょうか？」

『無いです。いや、表向きは偶配置転換ということになっていますが。藤川は静岡支社に転動になりました。舞鶴から巻き上げた財産配分が二人の間でどう決着したのかはさすがに分かりませんが、三朝からすればうるさい女をいつまでも手元に置いておくのはハイリスクだったんだと思います。お荷物だったんですよ、きつと』

お荷物なのは舞鶴も同じだと思いが……関係がこれたうるさい女と消し炭になった被害者、どちらかを左遷するとしたら間違いない前者だろう。

僕はスマホで静岡支社を調べてみた。富士市にある。「飼い犬に手を噛まれたわけですか……その後、三朝と藤川、そして舞鶴の間で何か動きはありませんでしたか？」

『うーん……その質問についてはお力になれそうにありませんね。何も思い当たりません。あ、ですが舞鶴はここ2、3日、よく時刻表をめぐっていましたね。聞くところ、三朝と秋田出張に行くとかで……それにしても随分熱心に調べものをしていましたね』

恐らく、今起きている事件の下調べか何かだろう。その後も八雲警部は能登さんに色々質問をしたが、これ以上の収穫は得られずに聞き込みを終了した。沖刑事はスマホを返してもらいながら追加報告をする。

「舞鶴がこの件で警察に対応を求めた記録が残っていました。昨年10月、警視庁でのことです。ですが、警察は法的根拠が薄いこと、民事不介入などを理由に特に大きな動きは取っていません」

「そう……それだけじゃ情報が足りないわね。静岡支社の人にも事情聴取をしてみよう」

だが、これはほとんど空振りに終わった。そもそも藤川が静岡支社に転勤してからまだ一ヶ月くらいしか経っていない。東京支社時代の悪辣ぶりすら知らない人がほとんどだった。唯一得られた証言としては、最近また三朝とやり取りをしていたらしいということくらいだ。

「はあ……これじゃ埒が明かないわね。静岡県警に協力要請を。藤川をとりあえず重要参考人として確保。それと、宮城県警と秋田県警にも改めて今の内容を伝えてお

いて。後、三朝も重要参考人にして。行方不明だから、とりあえず全国に手配を」

「はい。上の許諾を得ます」

八雲警部はそのまま考え込む。僕は前方の路線図を見た。列車はそろそろ大宮駅を通過する頃だ。

「三朝……藤川……殺される……？」

「秋田で舞鶴が言っていたキーワードですか？」

八雲警部は頷きながら、同じ言葉をぶつぶつと呟く。

「……考えてみれば、三朝と藤川の間もこじれていたわけですよ？ 舞鶴に貢がせた財産が原因で」

沖刑事の指摘に八雲警部は唖る。

「三朝が藤川を殺す……それとも藤川が三朝を殺す……？」

「……じゃあ舞鶴の行動の意味は……？ E6……？」

手遅れにしたい……何を？」

「あの、ちよつといいですか？」

僕は二人に呼びかけた。

「そろそろ東京駅に行きましょうよ。……列車はもうすぐ着きますよ」

僕は剣さんと連絡を取り合う室長の方を見た。

『大宮駅、22時16分57秒。22分03秒早発。指令室、大宮駅構内に入りました。どうぞ』

無線電話から剣さんの声が届く。22分03秒……本当に犯人の要求ギリギリだ。

* * *

もうすぐだから……それまで、堪えてくれ。頼むぞ、相棒。

僕はブレーキハンドルをぎゅっと握りしめた。運転士の誇りの白手袋はじつとりと汗ばんでいる。

「大宮駅、22時16分57秒。22分03秒早発。指令室、大宮駅構内に入りました。どうぞ」

『了解。構内通過後に制限130。引き続きATC開放。ここから先は上り下りが激しい。気を付ける。引き続き指示する。どうぞ』

「了解」

犯人が要求する到着時刻まで、あと24分くらいだ。

それは、僕達の余命なのだろうか。

違う。

絶対に、そうはさせない。

* * *

雨の東京駅。瀟洒な赤レンガ駅舎は復元工事を終えたが、まだ駅前広場が工事中だ。そんな駅舎と工事現場は今、不穏で物々しい雰囲気包まれている。渋滞を抜けてようやく辿り着いた私達は、駅に続くロータリーの前で警察に通せんぼを喰らっていた。

「だーかーらー、事件が起きている列車の運転士は俺達の親戚なんだって！ 分かったら通せ！」

ドア窓から身を乗り出して釜田さんは怒鳴っている。

えらい剣幕で、警官相手に一歩も引いていない。

「この人の夫なんです！ 彼女のお腹には赤ちゃんもいるんですよ！」

いやいやいや、いないから！ 叶ちゃんも私をダシに援護射撃を繰り出す。私は大げさな演技で涙を堪えた。

「あーあ、女を泣かせちゃまって、どう落とし前つけるんだよ、おいてめえこらあ！？」

「いい加減にしなさい！ ここは危ないんですよ！ 分かったら早くここから立ち去りなさい！」

雨合羽姿の警官は怒鳴った。パトランプに照らされていることもあってか、背後の赤レンガ駅舎のように顔が赤い。

「ちつ……碓氷、大和、一旦引くぞ」

やっぱり駄目だったか。釜田さんは忌々しげに舌打ちして、車を後進させようとした。でも、世の中には救いの神がいるものだ。

「あれ？ 釜田さん？」

どこかで聞いた覚えがある声が聞こえてきた。

「……誰かと思えば、霧島じゃねえか。たまには店に顔を出せよ。何でまたここに？」

「仕事ですよ。運輸安全委員会としても、今回の事件に関与しないわけにはいかないので」

そういえば、霧島さんは国交省の役人だった。

「……誰ですか？ あの人の」

「さっき話した霧島さんよ。あまり顔は出さないけれど。国交省の人で、礼士さんのご友人」

以前『かま田』に上越新幹線の事件を持ち込んだ人

だ。礼士さんが解き明かしていたが、私と店が爆破に巻き込まれたのはその夜のことだった。

「霧島さん、この人達は？」

奥から二人組がやって来た。一人はどこかで見た気がするおばちゃん、もう一人は七三分けをした若い男。

「運転士、剣さんの親族の方々です。剣さんのことが心配でここまで駆けつけてきてくれたそうです。ここは特例で、中に入れてあげましょうよ」

親族って……さっきの茶番を聞いていたのか。即興で口裏を合わせてくるということは、私達の味方だ。

「駄目です。ここは危険なんですから、早く安全な所に避難して下さい」

「危険は百も承知だ。いいからとつとつ道を開けな」

「だから駄目ですってば」

釜田さんが七三分けと押し問答を始める。

「まあまあ沖刑事、少しぐらいいいじゃないですか。今

ここで特例を認めても、他に一般人は見当たりませんから、続いて入ろうとする輩もいませんよ。というか、家族が心配で来た人と野次馬を一緒くたに一般人として扱うのはどうかと思いますよ」

「あなたまで馬鹿言わないで下さい、霧島さん」

クレーマーめいた霧島さんの言葉を潰すようにおばちゃんが言う。刑事が何かなのだろうか。……やっぱりどこかで見覚えがある。

「でも、どうせ優秀な警察が犯人も捕まえて、人質も解放して、爆弾も回収するんでしょう？ 犯人も自分が逮捕されることを要求していますし。一体何が危険なんですか？」

霧島さんは『優秀』の部分をやさしく誇張して言った。あまり喧嘩を売らない方がいいと思うけれど。

「駄目なものは駄目です」

「頭の固い人ですねえ、仕方ない。ここは一つ、以前の貸しを返してもらいましょうか」

「……あなたに借りを作った覚えはありませんけど？」

「面白いことを言いますね。あなたも沖刑事も、僕に立派な借りがあるやないですか。以前、あなたの方が泣きついてきた上越新幹線の事件を解いたのはどこの誰でしたっけ？」

警察コンビは言葉に詰まった。上越新幹線の事件……それこそ以前、礼士さんが霧島さんに頼まれて『かま田』で解いた事件だ。担当刑事はこの二人だったのか。

「……あなたでしたね」

一般人の礼士さんに丸投げ……もとい、事件の内容を話したことは秘密にしているようだ。

「その恩、まさか仇で返すとは言いませんよねえ？」

霧島さんの目が意地悪く光り、二人に詰め寄る。もはやこの二人に恨みでもあるようにしか見えない。

「……」

警察コンビは返す言葉も無い。

「どうしてもこの人達を通さないって言うならば、僕にも考えがありますよ。あなた達が事件とは一切関係ない僕に捜査内容を漏らしたことが上にばれたとしたら、あなた達は立場的に困ったことになるでしょうねえ？」

いや、それはあなたも同じだと思っけど？

「……ご家族の方々は、あちらの規制線の向こう側でお待ち下さい！」

霧島さんに言い負かされたおばちゃん刑事の誘導に従い、釜田さんは車を発進させる。

「恩に切るぜ、霧島」

「今度『かま田』で、馳走してもらいますからね！」

いくらでも食べさせてやろう。

誘導に従い通された丸の内駅舎北口のバスロータリーに駐車すると、警察やマスコミの車、工事車両の影から辛うじて改札の中の様子が窺えた。

「見えるか？」

釜田さんは細い目を一層細める。

「ええ、どうにか」

私は少し疲れた声を上げた。

「……何だかんだで、うまく入れちゃいましたね」

「あいつ、敵に回すとあなるのか……」

釜田さんは面白そうな笑みを浮かべて、駅舎に消える霧島さん一行を眺める。

「お前ら、何か食うか？ 夜食にするつもりだったおにぎりならあるぞ。おかかと昆布とたらこ」

「あ、おかか下さい」

「いえ……いいです」

「そうか？」
私の横で、叶ちゃんが下手くそに包装を海苔ことはがしている。

「……」

私は釜田さんの顔を見る。そして、たらこおにぎりを受け取る。包装を剥ぎ取って頬張ると、ふちふちと塩気が効いた生たらこだ。釜田さんにはやりと笑った。

「それでいい。腹が減つちや、戦はできねえぜ」

ラジオニュースが怒鳴る。列車は上野を過ぎた。

* * *

秋田から足掛け662.6キロ。長旅の終わりを目前に、『スーパーまち20号』は東京駅に滑り込みもうとしていた。ダメ押しのようにEBをかける。焼け焦げた鉄の嫌な匂いが鼻を突く。列車が停まるや否や、戸じめのランプが消えた。峠さんがドアを開けたようだ。乗客達は我先にと転がるように逃げ出した。

時刻は22時39分02秒。間に合った。どうにか間に合った。僕は運転席の中で大きく息を吐いた。

「第3020M……東京駅、22時39分02秒。24分58秒、早着」

緊張が一気に緩み、背もたれに体を預ける。

命懸けの疾走が、終わった。

* * *

暗闇の向こうから段々大きくなってくる、眩い光。鋭いブレーキの金切り音と共に、茜い新幹線が入線した。爆発で車体は煤け、窓はボロボロだ。がらんとしたホームに鉄製のブレーキパッドが焼け焦げる悪臭が漂う。

列車が完全に停止するや否や、ドアが開き、乗客達が一斉に吐き出された。我先にと逃げ出した乗客達は警察の誘導に従い、丸の内北口へ。そこから全員が警察の聞

き込みを受ける手筈になっている。舞鶴の要求の真逆を行く形だが、どうせ舞鶴は逮捕される。泣こうが喚こうが手出しはできない。

「第3020M……東京駅、22時39分02秒。24分58秒、早着」

スマホの向こう側、指令所に剣さんの声が届く。歓声と拍手が爆発した。僕はその大きさに思わずスマホを落としそうになる。大宮から先の速度超過が効いたようだ。本当に滑り込みセーフだ。

「どうにか着きましたね。行きますよ、皆さん。処理班の皆さん、こっちです！」

僕は警察コンビと爆発物処理班に目配せし、剣さんと犯人がいるはずの乗務員室に向かう。

* * *

乗務員室のドアを開けると、見慣れた人影が出迎えてくれた。オールバックの小男。どつと気が緩む。

「霧島さん……！」

「剣さん、お久しぶりです。どうやら無事なようです

ね。良かった」

霧島さんが屈託のない笑顔で浮かべる。

「で、このデブが舞鶴ですか」

「ええ」

犯人は大人しく出て来た。直に直面すると僕よりも大きい。すぐに刑事らしき人が手錠をかけたが、宣言通り一切抵抗しない。爆発物処理班が爆弾を全て回収した。

* * *

両脇を沖刑事と警官にがっちり抑えられた犯人を後ろ目に、僕と剣さんは丸の内北口改札へと向かった。後ろには峠さんも一緒だ。ホームと同様でがらんとした通路に僕達の足音が反響する。

「天下の東京駅がこんなに空っぽだなんて……」
「凄いでしょ。そうそう見られるもんやないですよ。よく目に焼き付けておきましょう」

剣さんと峠さんの緊張を少しでもほぐそうと軽口を叩くが、緊張しているのは僕も同じだ。駅を封鎖し列車も全部利用できなくなった、と舞鶴にばれてしまうのはあまり都合が良くない。逮捕してしまったため、ばれても問題は無い。でも、ばれることが無性に不安だった。

「霧島さん、犯人の狙いは結局どうなんですか？」

「警察が調べていますが今のところさっぱりです。同僚の動きに関係があるのかもしれないが」

剣さんの質問に肩をすくめて答える。

「あと……僕は大丈夫でしょうか？ 速度超過に行路表の無視、新幹線区間の無免許運転……普通ならクビどころでは済みません」

「その辺は任しちよいて下さい。今回の件は全て不可抗力です、警察も国交省も特例中の特例として認めています。剣さんには何も責任はありませんよ」

笑いながらなだめる。剣さんはほっとしたようだ。

「剣さん、それに峠さんですね？」

背後から聞き慣れた女性の声でした。

「ええ、そうですが、警察の方ですか？」

二人に八雲警部が近寄る。慣れた手つきで警察手帳を見せた。

「はい。警視庁の八雲と言います。事は一刻を争います。お疲れだとは思いますが任意ではありませんが、事情聴取にお付き合いをお願いします」

「ちよつと八雲警部、いくらなんでもそれは……」

「はあ……事情が事情なら仕方ありませんね。ですが、手短かに頼みますよ？ さすがに疲れたので」

刃さんは諦め顔で言った。改札を抜ける。
「ご協力、感謝します」

八雲警部が改札を抜け、犯人も抜けたその時だった。
『業務連絡、犯人確保完了。各駅員、乗務員は警察と国土交通省の指示に基づき、駅封鎖の解除作業、各路線の運転再開に取り掛かって下さい。繰り返します……』

そのアナウンスに歩みを止めた人物がいた。
「おい……これはどういうことだ？」
立ち止まった舞鶴が低い声を放つ。

「いいから歩け、ほち」
沖刑事の呼びかけを無視し、歩こうとしない。その視線の先を追うと、警官とマスクミが乗客をもみくちゃにしていた。身動きが取れなくなっている乗客の姿が犯人の目に映る。

「……だから言ったんだ、信用できないって」
低い響きが聞こえて、沖刑事と警官が吹っ飛ばされた。それぞれ僕と八雲警部にストライクヒット。

「いてて……おい、しっかり押さえて……ろ……!？」
吹っ飛ばされて気付いた時には、刃さんが舞鶴の人質に取られていた。

* *
「刃さん！」
峠さんの叫びがコンコースに響いた。
「動くな！」

何が起きたのか分からなかった。舞鶴が耳元で怒鳴る。手錠の鎖が僕の首に巻かれ、身動きが取れない。「動くなよ……動いたらこの男の頸動脈を噛み切る」

そのまま汚らしく僕の首に口を寄せる。生暖かく、臭い息が僕の首筋を這う。手錠の鎖が僕の首元にじりじりと食い込み、少しずつ息苦しくなる。早鐘のような鼓動

が頭の芯に響き、余計に苦しい。

「狙撃班、狙える？」

尻餅をついたまま八雲警部が小声で言う。トランシーバーからの返事に顔を一層険しくした。

「運転士にびったりくっついていないからな、狙撃は無理だ。どうする？ 人質ごと俺を撃ち殺すか？」

「撃ち殺す？ 僕を？ ……冗談じゃない！ やつと助かったのに、こんな所で殺されるなんて！」

「落ち着きなさい！」
吹っ飛ばされた男刑事が必死でいなす。

「俺は落ち着いているさ。約束を破ったのはそっちだな……。」

「確氷……さ……」

「だからと言って、人殺しをしていい事にはならないわ！ 今ならまだ間に合うから、手を放しなさい！」

警察と犯人の会話に、大事な人を呼ぶ僕の叫びが掻き消される。頭の中には、線香花火のように確氷さんの顔、声、思い出が次々と煌めき、僕は必死に生を願う。

「間に合う？ 面白いことを言うな。言ったら、お前らは無能だから俺の言葉を聞かなかった。ざまあみろ、もう手遅れだ。撃てるもんなら撃ってみろ」

「何ながよえ！ さつきから手遅れ手遅れって!？」
これは霧島さんだ。

「ぐっ……は、離せ……」

もがいても無駄だった。更に首を締め上げられる。「お前もムカつくんだ、運転士さんよ。自分は好かれて

いるっていうその腐った自意識がな。反吐が出る」
もう駄目かもしれない。正直、そう思った。

だが。その時。

空気をびりびりと震わせるような誰かの咆哮が聞こえ

た。僕がその声の正体に気付く前に、誰かが豪速で僕と犯人に突っ込んできた。

* *
* *
* *
* *

カーラジオが乗客乗務員の解放を告げる。駅舎から乗客がわらわらと出てくるや否や、私は車を出た。弱まった雨が私をしつとりと濡らす。

「行ってこい」
「先輩、気を付けて」

後ろで二人の声がした。
警官が近付いて来る。

「すいません、まだ危険です。待っていて下さい」
そう言い、私を押しとどめようとする。

そして。
車と人込みの隙間。

私の目に、嘘のような光景が映った。
「動くな！」

獣の怒鳴り声が空気を震わす。その横には「礼士さん……!」

頭が真っ白になる。
何も耳に届かない。

きりきりと、焦点が二人に絞られる。
鼓動が加速度的に響く。

全身の血液が逆流し、沸騰する。
激昂を轟かせる。

「礼士さん!!!」
警官を突き飛ばす。

パンプスが足枷になり、上手く走れない。
柵を飛び越すも、顔面から水たまりにこける。

「きゃっ!」
額に激痛が走り、視界が赤黒く染まる。血だ。

痛い？
知るか！

あの人が殺されるくらいなら、私が、わたしが……！
口から苦い泥を吐く。

「礼士さんに何すんのよ……！」
割れた眼鏡を掛け直す。

「あんただけは……あんただけは許さない……！」
勢いよく、パンプスを脱ぎ捨て、疾走り出す。

「どいて！」
そのまま人混みを蹴散らす。

「……あ、碓氷さん、ありがとうございます。」
一歩。

「……碓氷さんは何も悪くないでしょう。」
一歩。

「……碓氷さんが喜んでくれたのなら何よりですよ。」
また一歩。

「……あなたが好きです。」
足を速めることに。

「……待っています。」
思い出す。

「……碓氷さん。」
やっと気が付いた。

あの人の言葉がどれだけ暖かいものか。
あの人がどれだけ私の救いになったか。

私がどれだけあの人の救いになりたいか。
もつと。

もつと。
もつと速く！

私はあの人が好きだから。
あの人のそばにいたいから。

あの人に生きて欲しいから。
だから。

走る。
走る。

走る走る走る。
私は、命懸けで疾走る。

ただ……ただ、あの人のもとへ！
私が礼士さんを助ける……！

絶対に……！
私の……！

譲れないこの気持ち。
「礼士さんを……！」

かけがえのないこの想い。
「返せ……！」

その全てを叩きつける。
私は、ありったけの力で犯人をぶっ飛ばした。

* * *
血の飛沫が飛び散る。

折れた歯が宙を舞う。
誰かの怒鳴り声が聞こえる。

「私の礼士さんを返せ……！」
視界の端で、犯人の巨体が吹っ飛ばすのが見えた。

「確保！ 総員、かかれ！」
警官の山が犯人に崩れ落ちる。

僕はもんどり打って床に倒れる。そのまま誰かに馬乗り
りにされる。

「礼士さん……！」
視界がぼやけ、焦点が合わない。でも、僕を呼ぶこの

声の心地良さはどこかで知っている。
僕にまたがった人が眼鏡を掛け直してくれた。焦点が

合い、そして目が合う。

「……碓氷さん……？」
驚くが、心のどこかでは……やっぱり、と思う自分が

いた。
「うっ……くっ……うっ……」

僕の目ははつきりと碓氷さんの顔をとらえた。あの日
と同じように血と泥でまみれ、堪え切れない涙でくしゃ

くしゃになっている。
「うっ……うあっ……ああ……！ うわあああああ

ああ……！」
とうとう碓氷さんは馬乗りのまま僕に抱きつき、その

まま大声で泣きだしてしまった。大粒の涙が割れた眼鏡
のレンズを通して、僕の頬にぼたぼたと落ちる。

「ちよっ、碓氷さん……何でここに……？」
「バカ……！ 礼士さんのバカ……！ 礼士さんが……礼士

さんが死んじゃったら、私はどうすればいいのよ……！」
「えっ……」

「死なないですよ……！」
「……」

「あの時……『そばにいて』って言ったのは、礼士さん
でしょ……！」

「え……う、うん」
「私のことが好きだって言ったのは、礼士さんでしょ……」

「……」
「……うん」

「返事を待っています……そう言ったのは……礼士
さんでしょ……」

「……うん……」
「……だから……だから、死なないですよ……っ！」

「……うん……」

「……ぐすつ……無事なの？」

「ああ……何とかね……」

「そう……本当に……本っ当に良かった……!」

「ごめんね……心配させて……」

僕も瑞穂さんを抱きしめ返す。

「ねえ……瑞穂さん」

「え……?」

「その……返事、聞かせてよ……」

「……」

瑞穂さんは顔を赤らめ、目を逸らす。

「僕だと、駄目かな……?」

僕は瑞穂さんの頬に手を伸ばし、触れる。熱い。顔を僕の方に向けさせ、目を合わせる。

「……私も、礼士さんが好きです」

「……うん」

「……私の方こそ、よろしくお願いします」

それは、ずっと僕が見たかった、瑞穂さんの笑顔。

「……ありがとう」

瑞穂さんの笑顔が、僕に近づいてきてぼやける。多分、僕の顔も瑞穂さんにはぼやけて見えているだろう。

唇を重ねる。少し泥苦くも、甘く、柔らかく、暖かい。そして、とても快い。瑞穂さんが僕の唇を離さない。僕も瑞穂さんの唇を離さない。

「ん……んんっ……」

唇の隙間から嗚咽が漏れる。唇を離すと、瑞穂さんから号泣が溢れ出した。全部、受け止める。

丸の内北口コンコースには、僕の恋人の泣き声だけがただひたすらに響いていた。

* * *

沖刑事が剣さんと碓氷さんに近寄ろうとするのを、僕

はそつと押しとどめた。それにしても、いつの間になんか関係になつていたのだろうか？ 以前の『かま田』でも良い雰囲気だったが、剣さんも隅に置けない人だ。

「霧島さん、邪魔をしないで下さい……」

「その言葉、そのままそっくりお返ししますよ。今あの二人を引き離すのは、それは野暮つてもんですよ」

せつかくいいところだ、邪魔されてたまるか。

「でも、事件が……」

「犯人は捕まりましたよ、この碓氷さんのおかげで。気持ちは分かりますけれど……今は、ね？」

剣さんががっしりと抱きしめられ、その厚い胸板に顔を埋める碓氷さんの号泣を前に、沖刑事は無言だった。

「霧島さん」

八雲警部が僕を呼ぶ。

「あの女の人……碓氷瑞穂さんって言うんですか？」

「正確な下の名前は知りませんが……何かそんな感じで剣さんと呼んでいましたね。苗字はそれで合っています。……お知り合いですか？」

八雲警部は黙っている。記憶の糸を手繰るように、こめかみに皺を寄せている。

「沖君、念のために碓氷さんにも事情聴取を。一般人っぽいし今回の事件には無関係でしょうけれど、あんな危険な真似をしておいて、おいそれと見逃せないから。剣さんへの聞き込みは私がやるわ」

何故だろう。八雲警部、碓氷さんと面識があるのだろうか。彼女を避けている気がする。

第四章

東京駅のステーションホテル。松本清張、川端康成、内田百閒、江戸川乱歩など、数多くの文豪が逗留した由緒ある宿だ。

犯人がちゃんと確保されてしばらくした後、営業を再開したそのホテルには、そのまま臨時の捜査本部が置かれた。『スーパードラマ20号』の乗客乗務員は全て捜査のために足止めされ、結果として満室に近かった。私も足止めされることになった。釜田さんも叶ちゃんも同行してそのまま泊まることになり、結果オーライだ。

頭から水たまりに突っ込み、そこから全力疾走した挙句、犯人を叩きのめして病院送りにした私は全身がズキズキと痛かった。歩き方が、かつて礼士さんと出会った頃の自分そっくりだ。シャワーと着替えを済まして、痛みをこらえつつ老人のようによたよたと廊下に出る。ヨロピアン調の明るく柔らかな雰囲気の内装だ。

向かうはロビーラウンジ。途中、何人かの警官とすれ違ふ。その姿が今が異常時であることを教えてくれる。少し歩いてから辿り着くと、既に他のほぼ全員がテーブル席の一角を陣取っていた。

「遅くなりました」

「おう、お疲れさん。なかなかやるじゃねえか」

釜田さんが私を見つけて立ち上がった。

「ずいぶん派手にやりましたね、先輩？」

「……必死だっただけよ」

叶ちゃんの絡みに疲れ切った声で応じる。気を抜くとすぐに眠ってしまいそうだ。

「……んで？ 一体全体何がどうなってんだ？」

釜田さんが欠伸を噛み殺しながら疑問を呈する。

「あの全国生中継されたラブシーンの続きですか？」

「やめときなさいよ、大和さん。さっきの舞鶴のようにぶつ飛ばされますよ」

叶ちゃんと霧島さんが面白そうに私を見る。私は痛む体をソファにぐったりと預けた。

「……ちよつと待って。叶ちゃん、全国生中継？」

「駅舎の前にマスコミがわらわら群がっていたでしょ

う？ 剣さんとのさっきのラブシーン、ばっちり生放送されてましたよ」

はあ！？」

「隅に置けねえな。……カメラが店に來ねえといいが」

……もうやだ、死にそう。

「しかしまあ、本当に無罪放免になって良かったな、確水。あんなに派手にやったら普通タダじゃ済まねえぞ」

「元はと言えば警察の失態が引き起こした騒動ですからね。結果的に剣さんを救って事なきを得たわけですし、警察も確水さんを捕まえるわけにはいかないでしょう」

みんなの言葉に黙って頷く。泣き腫らした私の目は真っ赤になっていた。部屋の爆破で負った軽い火傷の跡は、シャワーで化粧を落としたために隠しようがない。

「あの野郎、生きてんのか？」

「氣を失ってましたが、目を覚まして、こう言うたそうです……『藤川は三朝に殺されただろう』と。顔が變形

して聞き取りづらかったらしいですが、確かです」

「顔が變形していたって……まあ、あそこまで渾身の右ストレートを喰らったらそうなりますよね」

後輩の言葉もそこから特に続かず、沈黙が降りる。

『殺されただろう』ってどういう事なの……？』

「さあな……それより霧島、あんたの仕事はいいのか？」

釜田さんが話題を変える。

「元はと言えば警察の手落ちやし、これ以上の尻拭いを

してやる義理はありませんよ。皆さん、疲れたでしょう。眠氣覚ましに色々缶コーヒーを買ってきましたよ」

「おつ、氣が利くじゃねえか」

釜田さんが早速ブラックに手を伸ばす。私は微糖に、

叶ちゃんはカフェラテに手を出す。

こんな風にだべっているには理由がある。主賓の礼

士さんがいないからだ。あの人は今、警察から事情聴取を受けている。私よりも時間がかかっているのは、事件

に巻き込まれた一番の被害者故か。最後の最後に大きく首を突っ込んだ私はへばり過ぎて死にそうだ。叶ちゃんの

軽口に嘔みつく氣力すら無い。まあ、今日くらいは好き勝手言わせておこう。

「お、真打登場ですね」

霧島さんがブラックコーヒーの缶を手にも立ち上がる。

「遅くなりました。釜田さんに大和さんもこっちに來ていたんですね」

私の背後から近づいてきた礼士さんは疲れ果てた笑みを浮かべた。私も自然に笑みがこぼれる。

「……おかえり」

私は痛みを堪えながらゆっくりと立ち上がるうとしたが、礼士さんが抑えとどめる。

「うん……ただいま」

改めて礼士さんの巨体を前にすると、内心に安堵が湧

き出る。そして、礼士さん以上の体躯を持つ犯人を吹っ飛ばした自分の体が、いかに無理をしたのかを思う。

「警察からの事情聴取が長引いたんですか？ コーヒー

どうですか？」

「ええ、そんなとこです。……げつ、砂糖入りか」

礼士さんは缶コーヒーの残りを受け取り、渋い顔をした。そういうえば、礼士さんはブラック派だった。以前

トワイライトエクスプレスでもブラックコーヒーを堪能していた記憶がある。

「微糖があるけど、そっちにする？」

「瑞穂さん、サンキュー。微糖の方がまだマシだ」

缶を取り換える。

「にしても、良かったな。剣。いよつ、この色男！」

「末永く爆発しやがれ、コノヤローっ！」

釜田さんと叶ちゃんが威勢良く礼士さんと私を冷やかす。礼士さんははれてれと笑い、私の顔は真っ赤だ。

「……そういえば瑞穂さん？ その額の傷、どうしたの？ 眼鏡も酷い有様だよ？」

礼士さんが私の額に巻かれた包帯と、潰れて使い物にならなくなった眼鏡に視線を向ける。まじまじと顔を見

つめられて、少し恥ずかしい。

「え、ああ、これ？ さつき転んじやって」

「剣を助けようとして顔面から派手にやったもんな。こりや、最初のデートの行先は眼鏡屋で決まりだな」

釜田さんが私達をからかい、げらげらと笑う。笑い事じゃない。

「……あの、それ何ですか？ 時刻表？」

叶ちゃんが礼士さんに尋ねた。私も視線を追うと、確かに、左手に分厚い雑誌を持っている。

「そうですよ」

礼士さんは缶のプルタブを開けながら答える。その声にも疲れがありありと浮かんできた。

「どうすんだよ、そんなもん？」

礼士さんが時刻表を持っているその姿には、どこか既視感があった。……そうだ、以前のトワイライトエクスプレスでの事件の謎解きの時も手にしていた。

「……もしかして、礼士さん……解けたの？」

私はむっくりとソファに座り直す。

「さっきの警察からの質問攻めで逆にいろいろ情報を教えてもらってね……きちんとした証拠があるわけではないんだけど」

「どっこいしょ、と私の隣に腰を降ろす。

「では、始めますか」

謎解きだ。

* * *

「さて、まずは、改めてお礼を言わせてほしい。瑞穂さん、助かったよ。ありがとう」

「え……ううん、いいのよ」

礼士さんの優しいな垂れ目が私を見る。その目から、少し涙が溢れ、流れる。

「……どうしたの？」

「いや……本当は……とても怖かったんだ。大切な人……特に、瑞穂さんにもう二度と会えないんじゃないかと思うと、死ぬほど怖かったんだよ……」

私の顔がかあつと赤くなった。耳まで熱い。

「大丈夫よ……もう、大丈夫。私はここにいるわ」

あの日に礼士さんが私にしてくれたのと同じように、優しく背中を撫でる。

「おやあ？ 顔が赤いですよ、先輩？」

「お前らあつつあつじゃねえか」

ニヤニヤしているうるさい独身コンピを強い視線で制する。霧島さん、あんたまで一緒に笑うな。礼士さんはゆっくりと私から離れ、一つ咳払いする。涙を拭い、話を再開させる。

「すみません……今回の事件はまず、発端から見てみましょう。昨日、舞鶴は秋田駅の警察署に来て『誰かが誰かに殺される』という事と『E6』という言葉を残しま

した。後は三朝、藤川という人物の存在。不運にも、とか愚かしくも警察署員はそれらの言葉を真に受けずに追返しました。そして、今日。21日ですね。舞鶴は『スーパーこまち20号』を乗りました」

「もう日付は変わったぞ、とつくに」

釜田さんの眠そうな言葉に腕時計を見ると、すでに1時半を過ぎていた。

「確かにそうですね。まずは、この事件の重要人物を見てみましょう。舞鶴、三朝、藤川の三人です。元々舞鶴は二人に痛い目に遭わされた。ところが、今度は三朝と藤川が仲違いした」

「舞鶴が遭った痛い目って、何なの？」

私は突っ込んだ。

「それは僕にも分からないな、瑞穂さん。警察の人もそこまで教えてくれなかった」

「指令所で立ち話してましたよ。ざっくり言うと、藤川という女が舞鶴に近づき財産を貢がせ、散々巻き上げた後に三朝、舞鶴の上司と元の鞘に収まった……というか、初めから藤川と三朝が舞鶴をカモにしようと組んじよったんでしょね。その後、三朝と藤川は不仲になり、三朝が藤川の上司のポジションに昇進したすぐ後に藤川は富士市にある静岡支社へと転勤が言い渡されました。事実上の左遷と考えていいでしょう」

「全く……どうしようもねえ下衆共だな」

霧島さんの補足に釜田さんは呆れ果てた声を上げた。

「なるほど、そうですね……で、三朝は舞鶴と共に秋田・仙台への出張を命じられた。ここからは僕の想像が入ります。舞鶴は何かの拍子に三朝の藤川殺害計画を知

つてしまう。でも、今日の……いや、昨日のあの凶行に及んだという事は三朝による藤川殺害計画の全貌を把握

できなかったんでしょ。自力で解こうとしても、無理だった。ヒントは『E6』だけ」

『E6』というと、E6系の事でしょうか？」

霧島さんが尋ねた。礼士さんは頷く。

「鉄道業界以外、それこそ僕らが考えもしないところで『E6』という言葉はあるかもしれません。ですが、インターネットなどで調べてもトップヒットするのは新幹線の形式名『E6』……東京と秋田を結ぶ秋田新幹線

『こまち』及び『スーパーこまち』の車両です。秋田出張とも矛盾しません。では、殺人と新幹線……関係があるとすると？」

「……アリバイ工作、でしょうか？」

叶ちゃんが言う。

「そうですね。そう考えると、『スーパーこまち20号』ジャック事件も腑に落ちます。皆さん、以前トワイライトエクスプレスの事件がありましたよね？」

「え？ ええ、ありましたね。詳細は知りませんが」

霧島さんは当惑の表情を隠せない。私もだ。あの事件と今回の事件、何か関係はあるのだろうか。……特に何も無さそうな気がする。

「あ、霧島さんは乗っていないから詳細を知りませんか。以前乗ったトワイライトエクスプレスで、時刻表を駆使したアリバイトリックを基に犯罪があったんです

よ。あの事件では、定刻通りに列車が動いていたからこそ、アリバイを作れましたし、また崩せました。霧島さんにも分かる例を挙げると、以前『かま田』で解いた『Maxとき310号』の事件も同じです。列車が時刻通りに走っていたため、信濃はボロを出しました。しかし、

『スーパーこまち20号』は定刻よりも25分も早く東

京に着きました。22時39分です。鉄道は自然災害などで何十分も定刻より遅れる事はあっても、定刻よりも十分も早く着く事はまずありません。舞鶴は定刻よりも早く駅に着くというダイヤ乱れを狙っていたんです」「定刻よりも早く駅に着くダイヤ乱れ……？ 一体何のために？」

霧島さんがもつともな質問に礼士さんは答える。

「舞鶴が三朝のアルバイトを無効化するためです」

「アルバイトを、無効化……？」

「そっだよ、瑞穂さん」

「無効化って……どういう意味だよ？」

「順を追って説明しますから、ちょっと待って下さいね、釜田さん。まず、舞鶴が崩そうとしたのは三朝のアルバイトです。三朝は藤川を殺そうとしている。いくら三朝と藤川のコンビに痛い目に遭わされ、恨んでいたとしても、当初は舞鶴にもまだ良心が残っていたのかもしれない。始めは三朝の犯行を止め、藤川を救うべく秋田駅署に行ったが、相手にしてもらえなかった。これが20日の夜、舞鶴が秋田駅署を訪れるまでの展開です」

「待った待った、三朝は藤川を殺そうとしている？ そんな物騒な話、一体どこから出てくるんだよ」

釜田さんが話の腰を折る。でも確かに、随分とききな話だ。

「もしかして、秋田駅署での話ですか？ 誰かが誰かに殺される、って言って舞鶴が怒鳴り込んできた」

「ええ。舞鶴は三朝が藤川を殺害しようとしている、そう考えたんです。目が覚めた時には『既に殺された』と言っていたそうですね。気付いたという方が正確でしょうか。藤川が三朝を殺害しようとしている、そう考えな

かったのは簡単です。藤川は静岡支社に左遷され、舞鶴は東京支社勤務です。藤川が三朝の殺害計画を練ったとしても、舞鶴にはそれを知る機会が無いんです。仮に藤川が三朝を殺そうとしていたのが真実だとしても、舞鶴がそれを知るには藤川が静岡支社に左遷される前、5月以前であるはずですよ。今になって警察に駆け込んで殺害計画を訴えるのはあまりにも不自然なタイミングです」

「なるほどな。だが、最初の舞鶴にはまだ良心が残っていた？ ……にわかには信じられねえな」

釜田さんが唸るように言う。

「でも、そうでなければわざわざ秋田駅署を訪れる理由がありませんよ？ いくら訴える内容が要領を得ず、最終的には追い返されてしまったとはいえ、舞鶴が秋田駅署に来て『三朝が藤川を殺そうとしている』と話そうとしたことは事実ですよ」

霧島さんが言うことももつともだ。

「繰り返しになりますが、秋田駅署の署員は舞鶴の話の真に受けず、舞鶴を追い返してしまいます。これが直接の事件の引き金になったのでしようね。舞鶴は考え直しました。警察も自分のことを相手にしないならば、いっそのこと憎い藤川は三朝に殺させて、自分は三朝のアルバイトリックを崩して三朝の犯罪を暴露しよう。そうしたら憎い三朝も藤川も無傷ではいられないわけです。藤川が死んで、三朝も刑務所に放り込まれたら舞鶴にとって万々歳、これ以上ない復讐になるでしょう。藤川が死んだ後に暴露すれば自分のことを相手にしなかった警察の無能も暴けます」

憎しみ、死、刑務所という言葉が次々と礼士さんの口から放たれる。私は少し身震いした。

「舞鶴が新幹線に乗った動機は三朝と藤川への復讐

なんですね。でも、舞鶴にはまだ良心が残っていたってさつき言ったじゃないですか？ 何でこのタイミングで舞鶴は良心を捨てたんですか？」

「大和さん……確かにそれは疑問ですね」

「いや、分からなくも無いと思うわ」

私は口を開く。

「あんまりこんなことは言いたくないけれど、過去に自分を散々な目に遭わせた男と一人つきり出張……そんな状況ではむしろ、良心を保つ方が困難じゃない？ 警察にもちゃんと話そうとした。でも相手にしてもらえない。三朝が藤川を殺し、その三朝の犯罪がばれて三朝が逮捕されたら……自分が憎んでいる相手はどっちも再起不能になる。考えようによってはそんな美味しい状況で、憎い相手二人のために良心なんて保っていられるかしら？」

良心の方がイレギュラー……そんなことはよくある。

「そういえば、舞鶴は過去に三朝・藤川コンビに財産を巻き上げられた際に警察に相談に来ていたそうですね。ただ皆さんには話していませんでしたが、舞鶴は昨年10月に警視庁に来ています。三朝と藤川の件について対処を求めたそうですね。しかし警察は証拠不十分と民事不入を理由にほとんど対応しませんでした。そして昨日……いや、もう一昨日か……秋田の交番でのお話ならない対応。警視庁と秋田県警という違いはありますが、舞鶴から見たら同じ警察。一度ならず二度の塩対応で警察への不信感と恨みを募らせてもおかしくありません」

霧島さんが補足説明をする。

「そりゃ、警察を憎むだろうな。なあ、剣、俺からも質問していいか？ 舞鶴は三朝の犯罪を暴露しようとしたんだろ？ それがどうして今回の事件に繋がるのかはこ

れから話すんだろうから聞かねえが、そもそも舞鶴には警察に三朝の犯罪を何も話さない……悪く言うと思殺しにするってことをせず、何でわざわざ三朝の犯罪計画を見抜こうとしたんだ？ 放っておけば警察が三朝の犯罪を嗅ぎ付けるんじゃないやねえか？」

「舞鶴の立場になって考えてみて下さい。自分の話を二度も聞かずに追い返した『無能』な警察が簡単に三朝の犯罪を暴けると、本当にそう思いますか？」

釜田さんは礼士さんの回答に沈黙する。

「藤川は殺されてしまえば再起不能になります。ですが、三朝は犯罪を警察に明かされて逮捕されないと再起不能にはなりません。舞鶴からすれば、無能な警察はあてになりません。警察がもたもたしている間に三朝が証拠を隠滅したり、どこかに高飛びしてしまえば、全て三朝の思うつぼです。舞鶴には何としてでも三朝の計画を見抜いて警察に告げ口する必要があるんです」

礼士さんはコーヒーを一口啜る。

「ですが、ここで彼に難題が降りかかります。『E6』というヒントです。舞鶴がどうやって三朝の犯行と『E6』と言う言葉結び付けたのかは不明ですが、その単語がヒントであることは想像できたでしょうね。秋田駅署でもその単語を連呼していたそうですし。ネットとかで調べるなり何なりして、E6系ということは分かっただけでしょう。先述した通り、この単語は秋田新幹線の車両形式。秋田と三朝……関係するとすれば秋田出張。三朝は秋田出張の時に藤川殺害に及ぶつもりだろうと考えるところまではいきましたが、問題はその先です」

礼士さんは時刻表を開き、重厚な造りをした木製テーブルに置く。みんな揃って覗き込む。

「三朝の秋田での商談は17時に終わる、そこから藤川

がいる富士市に移動するとなると、藤川の殺害は夜になるでしょう。普通に考えて富士市にE6系は走っていませんから、殺害時刻かその前後に自分がE6系と一緒にいることを、自分が富士市に居なかった、つまり藤川殺害現場の不在証明にする気でしょう。それに適した時間で、秋田にいるE6系の一つが『スーパーこまち20号』だったわけですよ。……ですが、この時刻表から分かるのはそれだけ。どこをどうやっても、舞鶴は三朝のアリバイトリックを崩せなかったんです」

「何だか、簡単には信じられねえ話だな。E6系を自分の不在証明に使うって発想が……何と言うか、いかにも鉄ヲタらしいというか、お前さんがこれから話すであろう推理のためにこじつけたような前提に聞こえるぞ」

釜田さんの言葉に礼士さんは苦笑いした。

「鉄ヲタの僕に向かってそう言われてしまったのは元も子もありませんが、一応の説明をつけることは可能です。アリバイトリック、特に、時刻表トリックを組む上では何が重要なのか？ それは、時間通りに公共交通機関が動いて、犯人が計画した通りに乗り換えができることです。本来ならそこには車両の形式を気にする必要は皆無です。ならば、なぜ舞鶴は『E6』という単語を手に入れることができたのか？ それは三朝がその単語をどこかで発したからとしか考えられません。他に出所がありませんからね。つまり、三朝自身が、『E6』の存在を重視して時刻表トリックを組んだと考えても、妥当性はあります」

段々込み入った話になってきた。

「あのさ、礼士さん。もう少し分かりやすく話してくれない？ とりあえずその……えーと、何だっけ？」

「こう言いたいんだな、剣？ 三朝はレア物のE6系と一緒にいる写真なり何なりを見せて、『ご覧の通り、自分は藤川が富士で殺害された時にはE6系と一緒に記念撮影をしていました。自分には事件現場の富士に行く余裕はありません』って警察に見せ、アリバイにする」

釜田さんの説明に礼士さんは頷く。

「でも、写真を撮ると言えども、今はスマホとかでも気軽に写真が撮れる時代だ。写真を撮った時間や、画像加工なんかをしたらいんじゃないやねえか？」

「それくらいの小細工、警察がすぐに疑うのは火を見るよりも明らかです。むしろ一切の加工をしていない写真をスマホで撮るか、そういった加工が困難な、旧式のフィルムカメラとかを使ってE6系と一緒にいる写真を撮影するんじゃないでしょうか？ 今の警察の鑑識技術は凄いですからね、下手な小細工はすぐばれてしまいます。かえって自分の首を絞めることになりかねません。その点、無加工だったり簡単に画像加工ができないような写真なら逆に警察の目を誤魔化すことができます」

「あくまでも三朝はE6系と一緒にだと証言するつもりだ、って言うんだな？ だがまだ疑問がある。秋田での商談は17時に終わる。そこからE6系と撮影をするとしても、それは秋田駅とは限らないんじゃないやねえか？ 今はまだレア物だとはいえ、E6系自体は何編成かある。秋田ではない他の場所で撮影したんじゃないやねえか？」

「要は『三朝は秋田以外のどこかでその新幹線と写真撮影をした可能性がある』と聞きたいんですか？」

私の要約に釜田さんは頷いた。

「E6系ってのは新幹線だから、地べたを走るわけだろ？ だったら秋田でなくても東京やら仙台やら、『こまち』『スーパーこまち』が停車する他の停車駅でもE

6系には会えるだろ。そこで撮った写真を『これは秋田駅で撮ったものだ。自分は富士に行けない』とでも言い張ればアリバイは一丁上がりじゃねえか？」

礼士さんは驚きの表情を浮かべた。

「釜田さん、滅茶苦茶鋭いです。もはやそれが三朝のアリバイトリックの骨格だと言つても過言ではありません。ですが、惜しいです」

礼士さんは時刻表を開く。……今までの話ですらあんまり満足に理解できていないのだけど、大丈夫なんだろうか？ 私の心配をよそに、手帳とペンも取り出した。

「まずはE6系を使った列車、そしてその中でも三朝が商談終了後に会いに行けるものをまとめてみましょうか。霧島さん、三朝の商談は秋田のどこであつたんですか？ 秋田市ですか？」

「いや、八郎潟の近くです。秋田駅から車で40分くらいだと、秋田県警の人が言っていました。ちなみに秋田空港までは車で50分くらいだそうです」

列車に会いに行くつて……あまり聞き覚えの無い表現だ。礼士さんはさらさらとペンを走らせていく。

「時刻表をひっくり返して調べると、以下の列車が当てはまります。とりあえず、三朝が商談を終えて自由に動ける時間帯である17時以降の列車に範囲を絞っています。本当はこれらの列車以外にも車庫に入っていたりする車両もあるんですが、それはアリバイ偽造工作に使うようがないので考えないことにします。写真を撮ることができませんからね」

私達は一斉に礼士さんが差し出したメモ(図④参照)を覗き込んだ。

「……あのさ、礼士さん。E6系だっけ？ その列車つて秋田しか走っていないんじゃないの？」

→ 図④

17:00～終電		E6系使用列車	
下り列車	『こまち39号』	大曲	18:33 発
		秋田	19:04 終着
	『こまち41号』	秋田	19:57 終着
	『やまびこ217号』	東京	18:20 始発 (中略)
		仙台	20:33 終着
	『スーパーこまち19号』	東京	19:53 始発
		大宮	20:33 発
		仙台	21:45 発
		盛岡	22:30 発
		大曲	23:23 発
		秋田	23:53 終着
上り列車	『スーパーこまち20号』	秋田	19:09 始発 (以下略)

(出典：交通新聞社『JR時刻表2013年5月号』)

「それは『こまち』『スーパーこまち』でしか走っていないって意味かな？」

私は頷き、礼士さんは首を横に振る。

「確かに、メインの仕事は瑞穂さんが言う通り『こまち』『スーパーこまち』だよ。でも、実はそれ以外の列車にも使われていてね。『スーパーこまち』や『こまち』以外の列車の混雑緩和のために、増結用も含めて多めに製造される予定なんだ。だから秋田まで走らない『やまびこ』『なすの』の一部列車も本来の仕事である『こまち』『スーパーこまち』の間合いにこなしているんだよ。他にも色々理由はあるけど、長くなるから省略ね。これからの話にもあまり関係無いし」

「ふうん……」

とりあえず、色々忙しい列車なんだろう。

「17時以降に三朝がE6系に会いに行くとするれば、このメモ(図④参照)に記載した列車になります」

礼士さんは話を再開させる。

「今度は秋田と羽田を結ぶ航空ダイヤを見てみましょうか。例によって、17時以降の便だけ説明します。また、どの飛行機に乗ればどの列車に追いつけるのかも説明しますね。先に補足しておきますが、秋田駅から秋田空港までは車で30分とのこと。それと、大館能代空港も念のため調べました。八郎潟から大館能代空港へは、車でどんなに頑張つても1時間は優にかかりません。他に所要時間を短くするような交通手段もあの辺には皆無です。よって車で1時間というのが最速なんです。八郎潟を17時に出たのは羽田に向かう最終便、17時45分発の全日空790便にとっても間に合いません。ですからここでは省略します」

礼士さんはまたメモ(図⑤参照)の用意をする。

秋田空港 定期航空ダイヤ (秋田・羽田便)

日本航空 1266 便 秋田 17:00 発→商談終了が17時のため
羽田 18:10 着 三朝は搭乗不可能。

全日空 880 便 秋田 19:15 発
羽田 20:20 着→東京駅近郊でE6系の
撮影は不可能。

日本航空 1268 便 秋田 20:30 発→『こまち39号』と『ス
ーパーこまち20号』
羽田 21:40 着 を秋田駅で撮影可能。

(出典：交通新聞社『JR時刻表2013年5月号』)

「これが、通常時の航空ダイヤです」
礼士さんはなぜかわざと『通常時の』の部分強調して言った。

「このメモの通りなら、三朝は秋田駅でE6系の写真を撮ってアリバイ用のネタを確保した上で、日航1268便に間に合います。『こまち41号』は時間的に無理でした。日航1268便に間に合いません。羽田に着いて、そこから富士市に移動することも十分可能です」

「……おい、この一番下のはまじくねえか？」

釜田さんは礼士さんの方を見た。

「え？ 何ですか？」

「確かにまずいですね」

叶ちゃんと霧島さんは正反対の反応を示す。私は叶ちゃんに一票。どこがまずいのか全然分からない。

「仮に三朝が秋田駅でE6系『こまち39号』『スーパーこまち20号』を撮影し、そこから日航1268便で上京、そこから富士に移動することは十分可能です。これでは何のアリバイ工作にもなりません。鉄道には疎い警察とはいえ、少し時刻表をめくればアリバイを見破れます。警察を騙すにはあまりにもちやちやな工作です」

「霧島の言う通りだ。アリバイつてのは一度見破られたら犯人は申し開きができねえ。こんなしょうもねえアリバイ工作をするくらいなら、始めからアリバイは無いと言いつつの方がまだ安全だ」

霧島さんと釜田さんの言葉に……納得……か？ 少なくとも、私には見破る自信が無いから何とも言えない。

「確かにこれではアリバイ工作としてはあまりに簡単すぎて、警察の目を騙し通せません。ですが、そもそもこのアリバイ工作は今日に限っては実行不可能でした」

礼士さんはメモに何か書き足す(図⑥参照)。

秋田空港 航空ダイヤ (秋田・羽田便 6月21日)

日本航空 1266 便 秋田 17:00 発→商談終了が17時のため
羽田 18:10 着 三朝は搭乗不可能。

全日空 880 便 秋田 19:15 発
羽田 20:20 着→東京駅近郊でE6系の
撮影は不可能。

~~日本航空 1268 便 秋田 20:30 発→『こまち39号』と『ス
ーパーこまち20号』
羽田 21:40 着 を秋田駅で撮影可能。~~

* 日本航空 1268 便は台風に伴う機材繰りの影響で欠航した。

(出典：交通新聞社『JR時刻表2013年5月号』)

日本航空1268便は台風に伴う機材繰りの影響で欠航した……そうだ、そうだった。車の中で叶ちゃんに見せたじゃないの！

「台風3号は6月20日に高知に上陸、そこから西日本各地に被害を与えて21日の昼に温帯低気圧になりました。台風となれば、交通機関にも大きな影響が出ます。

特に影響をモロに受けるのが飛行機です。台風が過ぎた後でも、機材が本来必要な場所に配置されていなくて欠航とせざるを得ない状況になることも格段に多いです。

機材繰りがつかずに欠航という奴ですね」

「機材繰りですか……飛行機って一日で結構な広範囲を飛びますからね」

霧島さんが口を挟む。

「僕は実家が高知で、一度、高知から家族と秋田に旅行に行ったことがあるんです。私用の場合は全日空ユーザーなんです。高知から羽田に向かう途中、娘がおやつのため、ボーロを座席の間に落としてしまったことがあるんです。簡単に取れない場所に挟まってしまったので仕方なく放置して、羽田で乗継便を待ちました。乗り継いだ飛行機は高知から乗った時と同じ座席。もちろん同じ全日空。もしやと思いい座席の間をのぞき込むと……あったんですよ。たまごボーロが」

それは凄いな偶然だ。でも、どうしてたまごボーロごときで幽霊が出たかのような言い方をするんだろう？ ……それにしても、高知か。しばらく行っていない。

「つまり、その機体は一日の内に高知にも秋田にも行った訳ですね。こんな感じで、全国各地を飛び回る飛行機は全国レベルで悪天候の影響を受けます。そしてそれは、今回の台風3号でも例外ではありませんでした。さらに、機材繰りによる欠航は状況が刻々と変わる気象状

況と違い前もって欠航の予定が立ちやすいです。だから、お客様にも早くから欠航の案内を出すことができます。

日航1268便の欠航がいつ発表されたのかは警察に調べてもらいました。20日の16時だったそうです。昨日……いや、一昨日のことですね。三朝にとって

は幸運で、舞鶴にとっては不運でした。舞鶴からしたら、実行可能なE6系絡みのアリバイトリック……『こ

まち39号』『スーパーこまち20号』を使ったアリバイトリックが秋田では不成立になるわけですからね」

叶ちゃんがじっとメモを見る。

「剣さん、じゃあ三朝はどのE6系、でしたっけ？ 会いに行ったんですか？」

会いに行ったって……地味に礼士さんの言い方が感染している。でも、確かに疑問だ。

「日航1268便が欠航となったため、秋田でE6系『こまち39号』『スーパーこまち20号』の写真を撮影してから富士に向かうことは不可能です。東京での撮影は最初から不可能。この時刻表の中で残る可能性は仙台に20時33分に着く『やまびこ217号』が該当します。三朝は秋田から仙台に移動して『やまびこ217号』の仕事をしたE6系を撮影し、さらにそこから富士に移動できるのか？ 調べてみましょうか」

何だか話が段々大きくなってきた。ついていける自信が無い。

「調べてみた結果がこれですね」

礼士さんは新しいメモを差し出した(図⑦参照)。メモを書く度に手帳のページを破り取るため、礼士さんの手帳がどんどん薄くなっていく。

「……はい、無理ですね」

「無理ですね、って……」

『やまびこ217号』の場合

『こまち48号』	秋田18:02発
	↓
『やまびこ217号』	仙台20:33着
	↓
『やまびこ68号』	仙台20:55発
	東京22:56着
	↓
『こだま809号』	東京22:47発

*『やまびこ217号』が仙台到着後、東京への先着列車は『やまびこ68号』だが、東京から富士に向かうことができる最終列車である『こだま809号』には接続できない。(出典：交通新聞社『JR時刻表2013年5月号』)

私は礼士さんがあまりにもあつさりど敗北宣言を出したものだから、ソファからずり落ちそうになった。

「三朝が八郎潟での商談を17時に終え、そこから秋田駅に向かうとなれば接続できるのは18時02分発の『こまち48号』になります。八郎潟から秋田駅まで車で40分くらいかかりますから、17時終了の商談から時間的余裕はあります。この『こまち48号』に乗ってE6系使用列車である『やまびこ217号』に遭遇するには、仙台で下車するしかありません。両列車の仙台駅到着時刻はこのメモ(図⑦参照)の通りです」

「こんがらがって来た頭を頑張つて整理する。とりあえず、三朝はその『こまち48号』に乗って仙台で降りれば、狙いのE6系新幹線の写真を手に入れられて藤川殺害のアリバイ工作に使えるということか。」

「ですが、問題はここからです。三朝にしてみれば、この写真を撮つた後に富士に行くことができれば無意味です。藤川を殺害できませんからね。では、仙台で『こまち48号』を下車した後に富士に向かうことはできるのか？ 結論から言えば不可能です。『やまびこ217号』到着後の列車で東京に先着するのは仙台20時55分発『やまびこ68号』です。しかしこの列車、東京に着くのは22時56分です。東京から富士に向かうにはどんなに遅くとも22時47分発の『こだま809号』に乗る必要があります。これなら各路線の最終を乗り継いで富士や静岡まで行けますからね。しかし、『やまびこ68号』ではどう頑張つても『こだま809号』に接続できず、富士に行くことができないんです」

「剣さんが時刻表をめぐってこうやって大げさに調べましたけれど、そもそも『やまびこ217号』は今日の事件の影響で運休しました。どっちみち『やまびこ217

号』を撮影してから富士に向かうことは不可能です」

「だめじゃんそれ。霧島さんの補足説明に、釜田さんも叶ちゃんもげんがりしている。」

「一度、状況を整理しましょうか。三朝は藤川が殺害される場所の富士に移動できない不在証明として、東京と秋田の間を走るE6系の写真を使うと舞鶴は考えました。なら、そのアリバイトリックを見破ればいい。その前提に立って、僕達は今まで『三朝が会いに行けて、なおかつ撮影後に富士に移動が可能な時間帯のE6系』を風潰しに探してきました。ですが、東京と秋田間において条件に合うE6系の列車は何もありませんでした。つまり、舞鶴はこの時刻表では三朝のアリバイトリックを見破れなかったわけです」

「これじゃ八方塞がりじゃねえか」
「そうですね。移動ができないのにアリバイ工作なんてできませんよ」

釜田さんと叶ちゃんが礼士さんに嘔み付くが、礼士さんはむしろ微笑んだ。

「その通りです。それがまさに、三朝のアリバイを見破ろうとして調べまくった挙句、アリバイを見抜くことができなくて頭を抱えた舞鶴の姿です」

「そういうえば『舞鶴は三朝のアリバイを無効化することが目的だった』みたいなことを礼士さんは言っていたよ。うな気がする。でも、三朝のアリバイが見抜けないのは無効化なんてとても不可能だ。」

「ですが考えてみて下さい。アリバイを崩せないのは列車が全てダイヤ通りに動いているからです。その前提条件を崩してしまえば、要は、三朝がE6系の写真を撮影した後に富士に移動できれば何でもいいいわけです。そ

こで舞鶴が目をつけたのがE6系で運転される『スーパーこまち20号』でした。E6系が関与するこの列車、すなわち『スーパーこまち20号』の時刻に細工をして、富士に移動できるようにしたら、E6系の写真を使った三朝の不在証明アリバイを崩せるかもしれない」

礼士さんはまた手帳とペンを出し、何か書き始めた。
「これは『スーパーこまち20号』が定刻通りに走った時のダイヤです(図⑧参照)。しかし、このように定刻で走ったら問題があります。三朝がいる秋田から藤川がいる富士市に接続できる列車が無いんです。東京駅から富士に接続できる最終列車は、東京駅を22時47分に発車する東海道新幹線『こだま809号』です。『スーパーこまち20号』は東京駅には23時04分に着く。本来ならば接続は不可能ですが……急がせれば可能なのでは？ ならば無理矢理にでも接続させるようにすればいい。でもどうやって？ 柿崎建工の社員である舞鶴にはうってつけのものが秋田にはあるじゃないですか」

「……ダイナマイト？」
礼士さんは私の言葉に頷いた。若々しい黒髪が揺れる。サービスマニアのテレビで放送されていたダイナマイトが盗まれたニュースを思い出す。

「秋田市中央総合病院の旧病棟……でしたっけ？ 以前、瑞穂さんも入院していたけれど。あの建物の解体に使われるはずだったダイナマイトを盗んで、それを列車に持ち込んだら簡単にトレインジャックができます。あの建物の解体と建て替えは柿崎建工が主導していたはず。柿崎建工の、しかも建設課の社員である舞鶴にはダイナマイトの情報を手に入れることや、それを盗み出すことは困難とまでは行かないでしょう」

「はあ……その柿崎建工って何なんですか？ ザル？」

叶ちゃんが呆れた声を上げる。ザル以外の何物でもないだろう。

「飛行機と違い、日本の鉄道には乗車前の保安検査がありません。ぶっちゃけた話、危険物なんて持ち込み放題なのが現状です。トワイライトエクスプレスの時もそうでした。浅間が鋸を持ち込んで、犯行に及んだ。同じことです。一度ダイナマイトを手に入れてしまえば、後は簡単に列車を乗っ取ることができます。そこからは自分の意のままに列車は走る。後はもうご存じの通りです。『スーパーこまち20号』は定刻よりも25分早い、22時39分に東京駅に到着しました。東京駅を22時47分に出る『こだま809号』にギリギリ接続できるようになったんです。舞鶴の狙い通り、当日中に秋田から富士まで行けるようになったわけです」

それがさつき言っていた『定刻より早く駅に着くダイヤ乱れ』……つまり『三朝のアリバイを無効化する』ことか。礼士さんは手帳のページを破り、テーブルに置いた。私達は揃って覗き込む(図⑧参照)。

「鉄道はいろんなものを繋ぎます。遠くと遠く、人と人、昔と今。今回はそんな鉄道が悪意と悪意を結んだわけです。……一人の鉄道員として、いや、それ以前に一人の鉄ちゃんとして断じて許せないものですね」

礼士さんの声は珍しく怒気を孕んでいる。

「……正直、瑞穂さんの一撃にはスカッとしたよ。最初は何が起きてるのか全然分からなかったけどね」

「ちよっ、礼士さん……!」

私は顔を真っ赤にした。あの時はまさに命懸けだったから何も思わなかったが、今となっては恥ずかしい限りだ。礼士さんはいたずらっぽい笑みを浮かべた。

→ 図⑧

舞鶴の時刻表トリック (秋田→富士)

『スーパーこまち20号』 (無理矢理急がせた場合)
秋田 19:09 → 東京 22:40頃 (実際は22:39)
↓
『こだま809号』 東京 22:47 → 三島 23:39
↓
『東海道線普通273M』 三島 23:47 → 沼津 23:55
↓
『ホームライナー静岡21号』 沼津 23:59 → 富士 0:13
(出典:交通新聞社『JR時刻表2013年5月号』)

「こうしたら三朝のアリバイ工作である『E6系と一緒いた』という条件と藤川殺害に必要な『富士市にいた』という条件を両立できます。だから舞鶴は『スーパーこまち20号』を乗っ取って無理に急がせたんです。しかし実際は舞鶴の『無関係な列車の運行を阻害する、東京駅を封鎖するな』という要求に反して東京駅が鎖され、東京駅に乗り入れる各路線は軒並み運休になりました。『こだま809号』も運休しました。だから実際のところ、この偽シナリオは破綻したことは付け加えておきます」

叶ちゃん是不審げな表情を見せた。

「……これって、三朝が『スーパーこまち20号』に乗たと仮定したら成立するアリバイトリックですよ。ね? 朝が『スーパーこまち20号』に乗っていないと判明したらこのアリバイ工作は無駄なんじゃないですか?」

叶ちゃんの言葉に礼士さんは頷く。

確かに、この偽シナリオは『三朝が『スーパーこまち20号』に乗っていない』ことが判明したら全ておじやです。だから舞鶴は対策を立てました。乗客が外部と絡を取れないように通信機器を全て没収し、警察が乗の身元を判明できないようにしたんです。『乗客を解しても、警察は一切手を出さないように』という舞鶴要求もこれが狙いです。警察が乗客の身元確認をし、三朝が『スーパーこまち20号』に乗っていないことが判明したら舞鶴の偽シナリオは崩壊しますからね」

話し続けて喉が渴いたのか、礼士さんは缶コーヒーをに運ぶ。

ですが、仮に三朝が『スーパーこまち20号』に乗っていないことが判明したとしても一応の保険はあるんですよ。それは『スーパーこまち20号』が東京駅に22

時40分までに着く……舞鶴の要求が満たされた場合に成立する保険です。いいですか？ 三朝はE6系の写真を撮り、そこから富士に移動できれば何でもいいんです。今回の『定刻より早く東京に着いた』というダイヤ乱れでこれを満たす状況がもう一つ誕生しました」

礼士さんはまたメモを書く(図⑨参照)。

「先程、航空ダイヤのメモ(図⑤参照)がありましたよね？ここに書かれている全日空880便。これは定刻より30分遅れで運航されました。秋田を19時50分に発ち、羽田に20時50分に到着しました」

JALのサイトでANAへの振替案内が出ていたの思い出す。振替を受け持っていたのはこの880便か。

「羽田にこんな時間に着いても、そこからE6系を撮影し、富士に向かうことは本来なら不可能です。しかし、昨日に限って言えば可能でした。『スーパーこまち20号』が東京駅に22時39分に着いたからです。羽田から東京駅まで移動する時間は十分ですし、東京駅から『こだま809号』に乗る時間もギリギリあります」

「でも東京駅は閉鎖されたし、この『こだま809号』も運休したからこのアライトリックは不可能だったんですよ？」

私は先回りして質問する。セリフを奪われた礼士さんは少し苦笑いした。

「うん、そういうこと。品川や浜松町から東京に向かう山手線、京浜東北線、東海道線も全部ストップしてて東京駅に向かえないし、仮に東京駅に辿り着いても閉鎖されて入れないしね。……ごめんね、説明がくどくて」

うん、くどい。でもそれだけ特殊なケースなんだから仕方ない。

『スーパーこまち20号』の場合(6月21日)

全日空880便	秋田	19:50発(35分遅れ)
	羽田	20:50着(30分遅れ)
↓		
『スーパーこまち20号』	東京	22:39着(25分早く到着)
↓		
『こだま809号』	東京	22:47発

*秋田駅から秋田空港までは車で30分かかるため、秋田駅で『こまち39号』(秋田19:04着)と『スーパーこまち20号』(秋田19:09発)を撮影する時間的余裕は無かった。また、舞鶴の要求に反して東京駅は封鎖されたため、実際にこの乗り換えを実行することは不可能だった。

(出典：交通新聞社『JR時刻表2013年5月号』)

「そういや、その三朝って奴は結局列車には乗っていたのか？ 警察が乗客乗員をこのホテルに缶詰めにして取り調べしてるんだろ？ どうだったんだ？」

釜田さんの問いに霧島さんが首を横に振った。

「結論から言ってしまうと、三朝は乗っていませんでした。列車の乗客は全員分の名簿を取りましたし、列車や

駅の監視カメラも風漬しに調べました。でも、どこにも

三朝の姿は映っていませんでした。あと、全日空880便にも搭乗履歴が無かったそうです」

「全員分の名簿って言っても、自由席に乗っていたら具体的な乗客の数は分かんないんじゃないんですか？」

今度は叶ちゃんが疑問を呈したが、礼士さんがそれに答える。

「大和さん、『こまち』『スーパーこまち』は全列車が全車指定席なんですよ。だから発券された指定券の枚数でほぼ正確な乗客の数を割り出すことができます。特定特急券など制度上の例外は多少ありますが、少なくとも今回の『スーパーこまち20号』に関しては指定券の発行枚数と乗客の人数が完全に一致しました。つまり、全ての乗客が例外なく指定券を持っていたんです。その中に三朝の姿は無かった……つまり、三朝は列車に乗っていませんでしたということになります」

ということは、舞鶴の計画の要が崩されたことになった。飛行機にも乗っていないことが判明したから、保険も無駄だったわけだ。今頃分かってても手遅れだけど。

「話を続けますね。乗客の乗り換えが不可能では全て無意味なので、舞鶴は警察にもう一つ釘を刺しておきました。『無関係な列車の運行を阻害しないように』と。富士

士まで乗継ができるように無茶に『スーパーこまち20号』を急かしたのに、東京から先の路線が止まっていた

らアリバイ工作が破綻しますからね。こうして、舞鶴は『三朝は『スーパーこまち20号』で上京し、そこから列車を乗り継いで富士市に行き、藤川を殺害した』という偽のシナリオを作り出そうとしたんです。東京駅での乗り継ぎが少し危ないですが、これくらいなら何とかあります。仮に全て舞鶴の計画通りになったならば、警察は三朝がそのようなアリバイトリックを使ったことに反証できません。だって、警察は『スーパーこまち20号』の乗客を把握していないんですから。三朝が『スーパーこまち20号』に乗っていないことを証明するには、その時間に三朝自身がどこで何をしていたのかを明らかにする必要があります。三朝にそんなことができませんか？」

できるわけがない。もしも全て舞鶴のシナリオ通りに進んでいて、三朝が『スーパーこまち20号』に乗っていないことを説明しようとしたら、その時に三朝がどこで何をしていたのかを話さなければいけない。それはつまり、三朝にとつてみれば、三朝がこしらえた本当のアリバイトリックを、藤川殺害計画を自供することになる。「仮にその偽アリバイが本当だと一時的にでも認められたら、三朝は警察関係者がひしめく東京をまんまと通り抜け、富士に向かい、藤川を殺害したことになるわね……逆に言えば警察は三朝を取り逃がして藤川殺害を防止できず、藤川の命が奪われたことになる。偽アリバイ発覚後は二重に警察の権威も失墜して、舞鶴から警察への復讐もさらに達成できる。そういう事？」

「鋭いね、瑞穂さん」

礼士さんは私の言葉に少し目を丸くした。

「それだけじゃありませんよ。そもそも、舞鶴は三朝が

藤川を殺そうとしていることを警察に話そうとして追い返されています。それも含めたら三重に警察の権威を失墜させることになります」

「叶ちゃんも私の考えにかぶせてくる。……もしかして、警察って柿崎建工以上にザルなんじゃない？」

「確水さんと大和さんが言うことも納得がいきますね。」

「……劔さん、舞鶴の言っていた無関係な列車って、ここの言う『こだま809号』『東海道線普通273M』」

『ホームライナー静岡』の三本のことですか？」

「ええ。仮に東京駅が閉鎖されて……実際は閉鎖されて

全面運休になって、それが犯人にばれて僕は殺されかけたわけですけどね、人質が死亡するという警察にとって

最悪のケースを現実のものにして、警察に復讐するため

に……東京始発の『こだま809号』が運休したら舞鶴

の偽アリバイは破綻しますからね。だから無関係な東

北、山形、秋田、上越、長野の各新幹線が乱れても許容

したわけです」

「なるほどな。で、舞鶴はその偽アリバイを実行に移したと。だが、何でまたそんなまどろっこしいことをした

んだ？ 舞鶴は犯罪行為に手を染めることになる。要求

でも『自分を逮捕しろ』って言っていたようだが、そこ

までする必要はあったのか？」

「どうかそれ以前に、舞鶴は三朝を止めたかったな

ら、最初から秋田で三朝を足止めすればよかったんじゃないの？」

釜田さんと私が礼士さんに質問を畳みかける。

「さつきと説明が重複しますが、必要なのでもう一度。

舞鶴は秋田で警察に三朝の犯行を訴えましたよね？ で

も、軽くあしらわれてしまった。その前には警視庁に助けを求めらるもすげなく追い返された。『無能』と怒鳴っ

たことから想像できますが、舞鶴は無能な警察には三朝のアリバイトリックを崩せないと考えたんでしょう。

ですが、警察には三朝を藤川殺害容疑で逮捕してもらわないと舞鶴は自分の復讐を達成できません。ならば三朝が藤川殺害に手を染めた後に三朝のアリバイトリックを解き明かして警察に説明したら復讐も完璧……なのですが、肝心の三朝特製のアリバイトリックは舞鶴にも解けなかった。だから先述した無茶なアリバイトリック(⑧参照)を実行に移したんです。ですが理由はそれだけではありません。皆さん、質問です。警察がほぼ無条件で信用するのは何ですか？」

私達は考え込む。コーヒを飲んでカフェインを摂取したのに、深夜ゆえに頭は重く、回転が鈍い。

「……容疑者の告白、ですか？」

叶ちゃんが正答を言い当てた。

「ええ。逮捕した容疑者の告白です。自分が逮捕されたら、当然、警察から取り調べを受けることになります。そこで告白したら？ 今までは違ひ、警察もそんなりと話を聞いてくれ、信用してくれるはずです。そこで『これは三朝と協力してやった犯罪だ。自分が列車を急がせて』『こだま809号』に間に合うようにして三朝を富士まで行かせ、彼に藤川の殺害を任せたとでも言えば、警察も三朝に手を伸ばします。当然この告白は真赤な嘘ですが、果たして警察は『三朝は今回のトレインジャックには関与していない』と見抜けるでしょうか？ 舞鶴の言葉を借りて言うならば『無能』な警察に？」

「……警察って本来は優秀なはずなのだが、ここまでけちよんけちよんにけなされると自信を持って『見抜ける』とは言い切れない。『舞鶴にそこまでさせるほどに三朝と藤川は憎まれてい

たのでしよう。警察も」

……狂ってる。憎しみに身を焦がした舞鶴も、そこまで追い詰めた三朝と藤川も。みんな狂ってる。

「じゃあ、舞鶴が言う手遅れっていうのは……」

「警察が三朝による藤川殺害を食い止められなかった、つまり藤川は殺されたということの意味しているんだと思います。さつき瑞穂さんも言いましたが、止められたはずの犯罪を止められなかったとしたら、それは警察にとつて最大の失態……文字通りの『無能』でしょうね」

霧島さんの疑問も明快にぶつた切る。

「そのために、舞鶴は三朝を止めなかったの？ 自分の恨みを晴らすために？」

「うん。でも、もつと保身を考えて理由もあつたと思うよ。だって、三朝はこれから人を殺そうとしているんだよ？ 無理に止めたら自分も殺されてしまうかもしれない。それに、今三朝を足止めしたところで、三朝はまた藤川の命を狙う。自分が話してもどうせ警察は信用しないだろうし、いつまでも三朝と藤川を遠ざけておくにも限界がある。舞鶴には三朝を止めるって考えは無かつたと思うよ。それに、自分の身が警察に拘束されたら？ 舞鶴は三朝の恨みを買う計画を実行に移しても、自分が逮捕されたら逆に三朝は手出しができない。警察の拘束力を逆手に取つて自分の身の安全も確保できるしね」

なるほど。そこまでおかしい話ではない。「アリバイが解けないから逆にアリバイトリックをこしらえるって、一体どんな発想ですか……」

叶ちゃんは頭を押さえながら質問した。私と同じくかなりオーバーヒーフト気味のようだ。

「でも……これは舞鶴が無理矢理捻り出した、本来あるはずがない時刻表トリックですよね？」

叶ちゃんが言う。

「ええ、そうです。全くの間違いです。三朝が編み出したアリバイトリックは……これはこれで曲者です。説明しましょう」

礼士さんは息を一つ吐いた。

「まず、三朝のアリバイトリックは通常のアリバイトリックとは大きく異なります。舞鶴とはまた違った形のダイヤ乱れが起きたからこそ実行可能だったんです。既に話に出てきていますが、心当たりはありませんか？」

急にそんなことを言われても分かるわけがない。既に舞鶴の犯罪でお腹いっぱいだ。

「日航1268便の欠航です」

……そういえば、そんなものもあつたな。

「さつき、『三朝のアリバイトリックの要はE6系だ』という前提のもとに『三朝が会いに行けるE6系』を調べましたよね？ その時、日航1268便が欠航になっていないと仮定した話をしたのを覚えていますか？」

「あの、あれですよね？」

霧島さんがメモの山をこそと探る。

「ああ、あつた。このメモです(図⑤、図⑥参照)。仮に日航1268便が普段通り運航されたとしたら、三朝は秋田駅で『こまち39号』と『スーパーこまち20号』を撮影して、そこから日航1268便で上京、そこから富士に移動することが十分可能です……その話ですよね？」

「ああ、あまりにも簡単すぎて警察の目も欺けやしねえ、ちやちなアリバイトリックのことか」

「霧島さん。そのメモ、少し見せて下さい」

私は霧島さんの手元を覗き込む。叶ちゃんも一緒だ。

「この×印をつけたやつのこと？」

「そうだよ、瑞穂さん」

「これがどうかしたんですか？ 実行不可能だったアリバイトリックなんて、何の役にも立たないでしょう？」

その通りだ。でも、礼士さんは叶ちゃんの言葉にも動じず、ニコニコと微笑んでいる。

「その通りです、大和さん。ですが、その『使えない』ということが三朝にとつて大きな意味を為すんです」

礼士さんはまたコーヒーを飲む。テーブルに置く缶の音が段々軽くなっていく。

「この時刻表を使つて調べた限りでは、21日に三朝が会いに行けるE6系の列車は皆無でした。唯一の望みであつた『こまち39号』と『スーパーこまち20号』についても、何度も言っている通り、日航1268便が欠航したためにアリバイトリックに使えません。その状況がまず三朝が望んでいたものでした」

「……礼士さん、話を少し遮つてごめん。その言い方だと、三朝のアリバイトリックは『日航1268便が欠航した』という偶然の上に成り立っているように聞こえるんだけど？」

「身も蓋も無く言つてしまえばそうだよ。確かに、これから話す三朝のアリバイトリックはこの偶然に依存している、日航1268便が普通に飛んでいたら多分実行には移さなかつたと思う。でも、それが三朝にとつて何かマイナスになるかい？ そんなことは無い。藤川の命を狙う機会はまだいくらでもある。計画を延期すればいいだけの話だよ。まあ、三朝には今すぐ藤川を殺さないとはいけない理由があつたのかもしれないし、それについてはつきりしたことは言えないけれど。とにかく、日航1268便は欠航になった。この事実を見逃す手は三朝

に、い、み、れ、ば、全、然、無、い、」

「つまり、日航1268便の欠航は三朝の意図しない幸運……棚ぼただったってことか？」

釜田さんが欠伸を噛み殺しながら聞く。

「意図しないというか、当てにしないという方が正確かもしれません」

当てにしていなかった幸運が三朝に舞い込んだのか。

「でも、剣さん、さつき釜田さんがこう言っていましたよね？」

『E6系ってのは新幹線だから、地べたを走るわけだろ？ だったら秋田でなくても東京やら仙台や

ら、『いち』『すーぱーこまち』が停車する他の停車駅でもE6系には会えるだろ。そこで撮った写真を『これは秋田駅で撮ったものだ。自分は富士に行けない』と

も言い張ればアライバイは一丁上がりじゃねえか？』って。それが三朝のアライバイトリックの骨格だったこと

は、三朝はE6系に会いに行っただってことですか？」

礼士さんは頷く。……あれ？ ちよつと待って？

「でも礼士さん、それっておかしくない？ 時刻表を調べた限りでは、三朝が会いに行けるE6系は何も無いって、さつき説明してくれたじゃない」

礼士さんは少し困ったような表情を見せた。

「じゃあ瑞穂さん、逆に聞くよ？ 時刻表に載っていないE6系の列車があるとするれば？」

時刻表に載っていないE6系の列車……？

「三朝のアライバイトリックは、時刻表の弱点を突いたと言えるかもしれません。いよいよ核心に触れていきますが、その前に質問です。皆さん、このような普通の時刻表に載っていない列車って何だと思えますか？」

礼士さんはそう言って、手にした時刻表を掲げる。交

通新聞社のJR時刻表、6月号だ。

「回送列車とか？」

私の答えに礼士さんは微笑み、首を横に振る。

「試験列車とかですか？ ドクターイエロー的な」

「いいえ、いずれも時刻表に載っていないことは正しいのですが、今回の質問でははずれです」

礼士さんは欠伸を噛み殺しながら否定する。そのまま

微糖コーヒーを喉に流す。私も喉の渴きを覚えて一緒に甘ったるいコーヒーを飲む。

「息ぴったりだな、お前ら……貨物列車か」

釜田さんの答えに礼士さんは頷く。

「ええ。これには旅客列車しか掲載されていません。貨物列車は掲載の対象外です。三朝はそれを悪用しようとしたんです。ここでちよつと回り道。E6系についてざ

っくりと説明しましょう。重要です」

重要だと言われても時間が時間だ。既に2時を回っている。みんな揃って欠伸をした。

「新幹線は、元々在来線の輸送力の抜本的改善を目的に作られました。そのため、基本的に在来線の車両よりも新幹線車両の方が大きいんです。だから、新幹線から在来線への乗り入れは基本的に不可能です。新幹線の車両が大きすぎて在来線の建築限界……橋やトンネル、駅のホームといった地上設備に引っかかってしまいますからね。これを解決したのがミニ新幹線。車両サイズを在来線に、走行性能を新幹線に合わせた特殊な車両です。E6系はこの最新版。つまり、走ろうと思えばE6系は在来線を走れるんです。大和さん、ここでクイズ。新造された新幹線車両はどうやって運ばれるでしょう？」

「へ？ ……新幹線の線路を使ってそのまま車庫みたいなどこに運ぶじゃないんですか？」

目をぼくりさせながら答える。

「はずれです。普通は船で海上輸送、それが超大型トレーラーを使い道路を移動させます。手間がかかるんですよ、これが。でも、ミニ新幹線用の車両には他の方法があります。在来線サイズの車両だからこそできる方法が。貨物列車として在来線を走らせるんですよ」

「配給ですか」

霧島さんが静かに言う。

「ハイキュー？ 何ですかそれ？」

私の問いに釜田さんが答えてくれた。

「甲種輸送とも言う。自力で走行できない状態の列車を機関車が引っ張って移動させる貨物列車の一種で、工場で新造されたばかりの列車を車庫に運ぶためのものが多

いな。基本的にかなり珍しいから、鉄道ファンの人気が高い。ネットで調べたらザクザク出て来るぞ。ほれ」

そう言い、スマホでネット画像を見せてくれた。機関車が赤い列車を引っ張っている。

「今言ったE6系の配給ですね、これは。機関車の後ろにくっついてる赤いのがE6系ですよ」

霧島さんが言い、缶コーヒーを飲み干す。

……とりあえず、珍しい物だった事は分かった。

「説明ありがとうございます、釜田さん、霧島さん。E6系は現在、秋田新幹線の旧型車両を置き換えるために製造中です。ミニ新幹線という在来線サイズの車両だから、少し細工をしたら在来線区間での甲種輸送は可能

E6系の配給は既に何回か実施されていますから、時刻を調べるのは楽勝です。調べてみたら、ネット上にこんなものが出てきました」

礼士さんはそう言い、スマホからサイトを開いて私達

に見せる(図⑩冒頭参照)。

「これはつまり、名古屋に……ええと、その……」

「E6系？」

「ええ、そうそう。E6系がいたって事？」

「そう。現在進行形で製造が続けられているE6系ですが、一部は兵庫県にある川崎重工の工場で製造されています。さらにその一部は貨物列車として在来線を甲種輸送されます。名古屋でE6系の写真を撮るなり何なりして、『これは秋田で撮ったものだ』って言い張ればアリバイが作れます。専門家が見たらばれるようなお粗末な写真になるでしょうが、鉄道の専門家ではない警察にはそうやすやすと見破れるものではないでしょう。高飛びや証拠隠滅のための時間稼ぎも不可能ではありません」

「確かに、一般警察の鉄道に関する知識は薄い……人によつては皆無でしょうね。さつきまで僕も指令所で鉄道素人の警察相手に散々苦勞しましたよ」

「言われてみると、霧島さんの顔にも濃い疲労の色がべつとりとへばりついている。警察相手によつほど難儀したのだろう。」

「それは……お疲れ様でした、霧島さん」

「まあ、仕事ですからね。苦勞つて言つたつて、事件に巻き込まれた上にはまいには殺されかけた剣さんの苦勞には遠く及びませんよ」

「ええ、まあ……そうですかね」

「礼士さんの困惑した反応も構わず、霧島さんは話す。で、三朝はその配給列車トリックを使つたんですか。」

「確かに、時刻表に載っていない列車について警察の考えが及ぶとは思えませんね。かと言って、時刻表を調べても三朝が会いに行けて、なおかつその後には富士に行ける時間帯のE6系は無い。警察からすれば完全に手詰まり

ですね。鬼貫警部なら話は違つかもしれませんが」

鬼貫警部つて、また懐かしいネタを出してきたな。

「三朝のトリックを見破ろうとした舞鶴も同じで手詰まりよね。でも舞鶴は『スーパードライ20号』を乗つて急がせ、無理矢理富士まで接続できる手段を確立することでその状況を強引に解決した……つてこと？」

「うん、そういうことだ。では皆さんお待ちかね、E6系の甲種輸送列車を組み込んだ三朝のアリバイを再現してみましようか」

「礼士さんはまたペンを取り、再びメモ(図⑩参照)を書き始めた。少ししてから書き終わり、私達は順に回し読みしていく。」

「舞鶴の組んだ偽アリバイ(図④参照)も、三朝が組んだアリバイ(図⑩参照)も富士駅0時13分着です。八郎潟から秋田空港までは車で飛ばして50分弱です。八郎潟での商談は17時終了ですし、ギリギリ行けます」

「名古屋での在来線と新幹線の乗り換えも10分程度……標準的な時間が確保されていますね」

「おいおい、マジかよ……」

「荷物つて……んなアホな……」

「めいめいに呟きを漏らす。私はもはや言葉も無い。日本航空のサイトによると、このアリバイトリックで使つた日航2178便は5分遅れで運航されました。伊丹空港からのバス移動は時間が読めない運試しの要素も大きいですが、新大阪駅には20時42分に着いたことが、さつき警察に調べてもらつて判明しました。このメモには定刻を書いてありますが、まあ、遅れたとしても『のぞみ62号』への乗り換えには余裕があります」

「でもこんな……時刻表に載っていないなんて」
叶ちゃんの漏らした呟きに礼士さんは反論する。

三朝の時刻表トリック (秋田→富士)

甲種輸送：6/21(金) 『E6系Z11編成甲種輸送』 22:04名古屋駅(通過)

↓	日本航空2178便	秋田18:20	→	伊丹19:45
↓	バス	伊丹20:10	→	新大阪20:35
↓	『のぞみ62号』	新大阪21:00	→	名古屋21:52
↓	『E6系甲種輸送列車』	名古屋22:04	通過	
↓	『こだま694号』	名古屋22:14	→	静岡23:23
↓	『東海道線普通874M』	静岡23:40	→	富士0:13

(出典：交通新聞社『JR時刻表2013年5月号』)

「時刻表に載っていないからアンフェアだつて言いたいですか？ 今や、列車の時刻は時刻表の専売特許ではないんですよ。貨物列車の時刻表はネットか貨物時刻表にしか掲載されていません。旅客用の時刻表にしか目が行かなかった舞鶴が、三朝が組んだ真のアリバイトリックを崩せなかったとしても全く不思議ではありません。この甲種輸送の列車は舞鶴が読んだ時刻表に掲載されていないんですから」

こんなニツチな知識を使つた時刻表トリック、組む方も組む方が解く方も解く方だ。

「では、三朝の翌日の商談は？ 仙台で午前10時からあるやつです」

「そうですね……これならどうでしょう？」

礼士さんは霧島さんの言葉にちよつと思案して時刻表をめぐる。そしてまたメモを書く。程なくして、再びメモ(図⑩参照)を回してくれた。

メモを書き終えた礼士さんは、みんなが回し読みをしている間に缶コーヒーを飲み干す。

「富士から何遍も乗り換えるなんて手間をしなくても、

『サンライズ瀬戸・出雲』というもつと東京に早く着く

寝台列車はあります。東京に7時08分着です。でも、寝台列車なのに朝になつてからの短距離利用という珍しい客なんて足が付きかねませんし、東京駅で連絡できる新幹線も同じです。この乗り換えルートで仙台での商談には十分間に合いますし、これで行くつもりでしょう」

……なるほど、見事に商談に間に合つてしまう。

三朝の時刻表トリック (富士→仙台)

『東海道線普通720M』 富士5：36 → 沼津5：56

↓

『東海道線普通322M』 沼津6：05 → 三島6：11

↓

『こだま800号』 三島6：26 → 東京7：20

↓

『はやて・こまち23号』 東京7：32 → 仙台9：13

↓

商談 10：00開始

(出典：交通新聞社『JR時刻表2013年5月号』)

「これは補足ですが、E6系の甲種輸送列車は富士市も過ルートに入っています。ですが、僕が調べた限りでインターネット上などに時刻の掲載がありませんでしたのでしようね。富士をいつ通過するかの情報が入らなかつたものと思われれます。……事件の内容としては、こんなところですよ」

礼士さんの推理は、ようやく幕を下ろした。

配給・甲種輸送か……そりゃ、トリックをすぐに見破るのは鉄道素人の警察にはとても無理だろうな。でも、

つからこのトリックに気付いていたんだ？」

仕事終わりにこの列車を撮りに行こうと考えていたんです。警察から話を聞いているうちにE6系について思

至つて調べてみたんです。時刻表に載っていないかつたで、まさかと思つて調べてみたらビンゴでした。今日

事件が無かつたら明後日にでも撮りに行けるんですけどね、事件の始末で無理でしょう。あーあ……」

釜田さんの疑問に答える礼士さんは不満げだ。撮りにくつて……さすが筋金入りの鉄道ファンだ。

この推理は警察に話したんですか？」

霧島さんがおずおずと尋ねた。

僕だつて警察の尻拭いはごめんですが、事が事ですかね。大体話しましたよ。今頃、裏を取っている頃じゃないでしょうか？」

そりゃ、警察の事情聴取から解放されるのにも時間がかつて当然だ。

お疲れ様、礼士さん」

さすがに疲れたよ。……ありがとう」

このやりとりで、心が温まる。

その時、太つたおばちゃん汗だくになりながらこつ

ちに走って来た。駅舎の前で押し問答をした人だ。……
やっぱりどこかで見たことがあるよな、この人。

「霧島さん！」

おばちゃん呼びかけに霧島さんが立ち上がる。

「どうしました？ そんなに血相を変えて」

「藤川が保護されました！ 無事です！ それに、三朝も発見されましたよ！」

「えーっ!？」

私達の眠気が一気にけし飛んだ。

「藤川って奴、まだ殺されてなかったのか……」

「マスコミが舞鶴の事を盛んに報じたので、ヤバいって思ったんでしょう。三朝は自分から現れました。観念したのか、藤川殺害の犯行計画を自供し始めています」

「それで？ 三朝は今、どこにいるんですか？」

霧島さんが尋ねる。興奮を抑えきれずにその場で立ち上がった。

「名古屋です。静岡・愛知両県警からの連絡に時間がかかり、報告が入ったのはさっきです」

連絡が遅くなったって……最後まで締まらない。おばちゃん刑事の目は、じっと礼士さんを見ていた。

「良かったですね、八雲警部……誰も死ななくて」

礼士さんの冷ややかな咳きは、私の心をぐさぐさと刺し、そして歓声に掻き消された。

エピローグ

ステーションホテルの一室。空き部屋が少なく、僕は釜田さんと相部屋になった。

「コンコースが良く見えるな。この部屋の真下に狙撃班が待機していたとはな。警察も舞鶴が一筋縄で行くとは思っていなかったんかね。そこは一筋縄で行かせるのが仕事だろうに」

「ええ……」

僕は生返事さえもおっくうで、布団をかぶった。

「しかしまあ、難儀だったな。お疲れさん」

「ええ……疲れました」

シャワーを終えた釜田さんはベッドに寝転がった。後は寝るだけだ。

「そういや、釜田さんは何でこっちに来ていたんですか？」

「え？ ああ……裁判にな。白雪の」

そのまま釜田さんは、裁判の内容をかいつまんで話してくれた。半ば朦朧とした頭で内容を咀嚼する。

「……白雪が赤倉を殺害した後に、誰かが赤倉の所に侵入した？」

「ああ。白雪もこれについては知らぬ存ぜぬの一点張りだ。赤倉を殺した後、わざわざ再度侵入する必要もねえし、疑う理由がねえ。本当だろう」

僕は考えようかとも思ったが、疲れ切った脳みそがそれを拒否した。

「まあ、大したことはねえさ。とりあえず、今夜はゆっくり休むといい」

「ええ……おやすみなさい」

僕の意識はそこでふつりと途絶えた。

夜空がゆつくりと白み始める。朝日が東京駅を照らすうとしていた。

* * *

翌日の昼過ぎ。東京駅での現場検証を終えた僕は一度

国交省に戻る事にした。釜田さんが車で霞が関まで送ってくれることになった。

「すいませんね、わざわざ国交省まで」

「別にいいさ。ちよつとしたドライブだと思えばどうってことねえよ。あんたこそ難儀だな、徹夜明けで事後処理か」

「徹夜なら慣れてますよ。僕とて伊達に官僚をやってるんやないんですよ？」

「本当に大丈夫かよ……」

釜田さんは欠伸をしながらハンドルを切る。後部座席では大和さんが静かに青空を見つめている。久々の晴れ間だ。

「柿崎建工はどうなるんだろうなあ？」

「ダイナマイトのみならず危険物全般の管理体制を問われるでしょうし、行政の指導を受けるでしょうね」

日本を揺るがす大事件の一因になったのだ。無傷では済まないだろう。

「そういや、あのカップルは？」

「ああ、あいつらか？ ステーションホテルに来たついでに挙式していくつてさ」

さらりとんでもない冗談を飛ばされた。

「結婚式の招待状をもらった覚えは無いんですけどね」

「へっ」

僕の返しに釜田さんは陽気な笑い声を上げた。

「真面目な話、あの二人はまだ駅で取り調べ中だ。今日の夕方の新幹線で帰るつてさ」

秋田に戻ったら、とりあえず碓氷さんの眼鏡を新調しに行くのだろう。

「今回の事件の後処理で、どうせまた秋田に来るんだろ？ また店に顔を出せ。今回は色々世話になったか

ら夕飯食わしてやる」

「当然です。僕があの後とんだだけ叱られたと思うんですか。クビになりかけて苦労したんですよ」

上層部も事情を汲んでくれて、どうにか首の皮一枚繋がって今の職を続けられることになった。大空室長は今回の件が落着いたら引責辞任するそうだ。出張は気が重いが、また『かま田』で舌鼓を打てるなら悪くない。

「しかし……今回の事件も皮肉なものだな、霧島？」

「ですね」

僕も欠伸交じりに答える。

「何の話ですか？」

「分からねえか、大和？ 舞鶴は何のために今回の事件を起したか。剣が話してくれたろ？」

「最初は三朝の犯行を事前に警察に知らせることで、藤川を助けようとした。でも、警察に相手にされなくなつた後から目的が変わつた。藤川は三朝に殺させて、三朝のアルバイトリックを崩すことと、警察への恨みを晴らすことに……こんな感じでしたよね？」

「ああ。そうだ」

車は追い越し車線に入り、前の車を追い抜く。

「でも……皮肉って、何がですか？」

「分かってねえなあ……」

釜田さんはため息をついた。

「舞鶴は、結果として三朝に藤川を殺させ、それを警察が見破って三朝を刑務所に送ることを目的に犯行を起したわけでしょう？ ですが、結果はどうでしたか、大和さん？」

「藤川は助かって、三朝は藤川殺害を直前で思いとどまりましたね」

「でしよう？ 舞鶴の目論見に反して、藤川は死ぬど」

るか傷一つついていません。三朝もまだ、辛うじてです

が何か罪を犯したわけやありません。まだ何もしてない人に対して警察も手出しはできず、多分釈放されるでしょう。そりや二人とも会社は追い出されたり、三朝は藤川への接近禁止命令が出たり、舞鶴との関係を洗われて色々出てくるでしょうけれど。でも結局、今回の事件で一番損をこいたのは舞鶴です。全ては、舞鶴が新幹線に乗ったから起こつた結果です」

大和さんは少し考えて、納得した表情をした。

「揃いも揃って懐も浅かったわけだ。復讐なんてろくなものじゃねえ。そんな簡単なことがどうして分からねえんだろうな」

釜田さんはじつと前を見つめたまま独り言を言い、そつとアクセルを踏み込んだ。

* * *

『20番線、ご注意下さい。』はやて45号』新青森行きと『まち45号』秋田行きが16両編成で参ります。黄色い線までお下がり下さい。東北新幹線の運行状況ですが、昨晚盛岡駅で発生した火災の影響によりダイヤに乱れが生じております……』

夕方6時前。当座の取り調べから解放された私と礼士さんは東京駅で故郷に帰る列車を待つていた。そういう日は夏至だった。道理でこんな時間でもまだ明るいわけだ。

「お、来た来た」

礼士さんはほくほく顔でスマホカメラを構える。白と銀のツートンにビビッドピンクの細帯を巻いた列車が私達の前で停まる。……こんなに詳しく列車に目が行くようになると、以前の私では考えられない。昨夜の謎解きで少し毒気に当てられたのかな。

「これが昨日話してたE6系ってやつ？ にしては赤くないような……」

「いや、これはその一世代前の車両。E3系って言うんだ。これを運転したくて僕はJRに入つてね。カッコいいという言葉が似合う列車は多いけれど、美人って言わしめる列車はこれくらいだと思うよ」

お、おう。そんなに顔を輝かせて力説されても。もしかしたら私は、とんでもない人を恋人に選んでしまったのかもしれない。それはお互い様か。

「この平仮名のロゴマークとか、引き締まったブラックフェイスとか、鋭いように色んな表情を見せる吊り目ライトとか、もう最高だよ。……老朽化で今度の3月に引退するんだけどね。その後継で導入されたのがE6系」

返事に困っていると、礼士さんは少し苦笑いした。

「ごめん、つい語り過ぎちゃって……もうちよつと控えるにするから」

「え？ いや、まあ、別にいいわよ」

そりや興味は無いけどさ。でも、礼士さんの笑顔が見られるのは悪い気はしない。思い入れが深いのはよく分かつた。

「乗ろうか。足元に気を付けてね」

礼士さんは私の手を取り、車内に入る。手を握られると顔が熱くなるのが分かつた。お目当ての席を見つけ、揃つて座る。握つた手が離された。

「秋田に着いたら……まずは眼鏡屋ね。この眼鏡はとも使いた物にならないし」

私はポケットから眼鏡の残骸を取り出した。レンズは割れ欠け、フレームもぐつしやりと歪んでいる。酷い有様だ。

「礼士さんも、その……一緒にどう？」

「……それはデートの誘いってことでいいのかな？」

「え……うん」

「……予定、空けとくよ」

礼士さんの緩み切った顔が目に入る。……駄目だ、やっぱりまだ気恥ずかしい。照れ隠しに窓の外を見ると、少しぼやけた視界にも梅雨とは思えない青空が少しずつ朱に染まってきていた。今度の眼鏡は青いフレームのものにしてみようか、などとぼんやり眺めながら思う。

急に右肩に重み加わる。驚いて振り向くと、礼士さんが私にもたれて寝息を立てていた。さっきまであんなにワクワクしていたのに子供みたいだ。呆れながらも安らかな寝顔をぼんやりと眺める。まだ昨日の疲れが抜けていないのだろう。私もだ。

寝顔を眺めているうちに、昨日のことがページをめくるように思い出される。

とうとう……告白してしまった。

そして……そして、受け入れられてしまった。

ひと月以上も前に『待っています』と言われ、本当に私の返事を待ってくれていた。

正直、嬉しかった。

私が礼士さんにふさわしいとは、やっぱり思えない。消えることの無い過去の傷跡が、血の臭いが私に暗い影を落とす。

でも。

この人を好きでいることくらいは……せめて、それくらいは構わないだろう。

何かを、誰かを好きになる気持ちは、それだけは誰にも侵すことはできないのだから。

頭の切れる礼士さんのことだから……断片的とはいえ、私の過去を知っている礼士さんのことだから、私の

過去を知る日が来るかもしれない。

いや、いつかは私から話さないといけないだろう。

知ったならば……私から離れてゆくだろう。

でも。

それでもいい。

私は、この人に対しては素直でいたいから。

だけ。

せめて、ほんの少しの間でもいいから、私はこの人のそばにいたい。

この人には、私のそばにいてほしい。

恋人がどこかに行ってしまうそうで無性に不安になった。今度は私から礼士さんの手を握る。心のざわめきが落ち着くと、すると本音が漏れた。

「ありがとうって言うのは……私よ。礼士さん……」

返事は穏やかな寝息だけ。私も礼士さんに体を預け、眠ることになった。

『こまち』が走り出す。私達は長い家路についた。

*

*

暗い部屋の中。

俺はじつとテレビの画面を見つめていた。

『先月、神奈川県小田原市で赤倉翔一氏を殺害したとして逮捕された白雪春江被告の裁判が、昨日始まりました。白雪被告は容疑の大部分を認めており、今後の展開が注目されます……』

チャンネルを変える。別のワイドショーでは、昨夜の東京駅の様子を飽きもせず繰り返し映している。

女が犯人を殴り飛ばし、人質らしき男に馬乗りになる。男は服装からするに乗務員だろう。投げつけられ、そして受け止められる愛の言葉。交わされる熱いキス。

「この女……」

俺はそう呟いたあと、乗務員の男に目を移した。

「へえ……」

堪え切れない笑いで口元を歪める。

篠突く雨が屋根を叩いていた。

〈第四話につづく〉